

---

# IS ~ インフィニット・ストラトス ~ 記憶を失いし者

トッド・ギネス

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

IS（インフィニット・ストラトス）記憶を失いし者

### 【Nコード】

N7350S

### 【作者名】

トッド・ギネス

### 【あらすじ】

記憶を忘れたの少年が、ISの世界にて「何が出来るか」を探し、自身の過去、記憶を思い出していく。そして思い出したらどうするのか・・・そんな感じの物語です。

先に謝らせてもらいます、ファンの方々スイマセン。キャラが変わっていますが、気にせず読んでくれることを祈ります。

作者に文才が無いのと、どこか抜けているので、長い目で見てくだ

さい。

(小説タイトルを「名前を失いし者」から変更しました。・・・殆ど変わってないだろうが！との言葉は受け付けておりません。本人も自覚しているのでご了承下さい。 m( ) ( ) m( )

## プロローグ（前書き）

至らない点が多々ありますが、ご了承ください。

## プロローグ

プロローグ

？「・・・？」

そこは奇妙な部屋だった。見渡した部屋の至る所にはケーブルがツタのように何本も無数に互いをもつれ合い伸び、機械の備品もちりばめられている。

？「何でこんなところに・・・確か・・・。ん？」

何故か縄で椅子に括り付けられていた。

??「おゝ、気がついた。」

声のほうを見たら、真っ青なブルーのワンピースに、エプロンと背中には大きなリボン。

しかも頭につけているカチューシャは、白ウサギの耳。あ、耳が動いている。とりあえず見た目からして、変人か天才かのどちらかか、それとも両方か。

・・・とりあえず知りたいことを聞くか。

？「え」と。あなたは？ここはどこですか？」

??「私は天才 篠ノ之<sup>しののたばね</sup> 束<sup>たばね</sup>さんだよ。ここは秘密の研究<sup>ラボ</sup>所、で君は？どうやって此処に？」

(・・・他人嫌いだろう微妙に棘がある。)

？「私は御神<sup>みかみ</sup> 悠<sup>ゆう</sup>と申します。気がついたらここに居たんですが・・・何で天才と？」

束「・・・知らない？」

悠「・・・知りません・・・。(何かをやって世界で名前を知らない人が居ない・・・って感じか？  
で、こっちは名前も知らなかったし、何で天才かも知らない・・・と。自称天才なら問題ないのだが・・・)」

嫌な沈黙……。

東「……ちょっと待って、面倒だからもうすぐ来る尋問官に任せ  
るね。」

悠「尋問官!？」

東「うん。物凄く怖いから、正直に君の事話してね。」

と言いながら去っていった。

尋問官と聞き正直ぞつとしない、物凄く怖いときた。

しかも笑顔で言い放ってきやがった。殺す気がないのは気配でわか  
ったが、正直生きた心地がしなかった。

尋問だからな……しかも誰も居ない部屋で一人は微妙につらい。  
しかも暇だ……

悠「ハァー……暇だ。」

数分後

遠くで声でした。

束「チ〜〜〜〜〜〜〜〜ちゅ〜〜〜〜〜〜ん!!」

束さんが大声で誰かを出向いたらしい。

束「やあ、やあ、逢いたかったよ！ チイちゃん！ さあ、ハグハグしよう！ 愛をたしかめ……」

束さんの言葉を全て言い終わる前に誰かが言う。

？「五月蠅いぞ、束。私は明日……だぞ。」

辛辣な言葉。当たり前だな……

女性の声だな、だけど怖いな……尋問官と言っただけのことはある。

束「相変わらず容赦の無いアイアンクローだね。」



アイアンクロー!?!?・・・・これは覚悟を決めねば・・・・。

?「で、お前の言った子供は?何か喋ったのか?」

東「とりあえず、・・・・・・ただだよ。」

?「ふむ・・・・何事も話さないとわからない。でどこに居る?」

東「こつちだよ。」

足音が近づいてくる。

東さんが見えた。

その後から入ってきた人は・・・・スーツが似合う物凄く綺麗な人だ。

東「連れてきたよ。」

悠「えくと、あなたは?東さんとは、どのような関係で?」

?「私の名は織斑 千冬と言う。こいつとは悪友?君の名は?」

探る様な眼で見てくる。

悠「私の名前は御神 悠です。東さんにも言いましたが、私は気づいたら此处にいました。あと東さん」

同じ事を聞かれる前に言っておいた。ついでに東さんに文句を言っておきたかった。

東「なに〜？」

悠「何が、物凄く怖い尋問官ですか・・・生きた心地がしませんでしたよ・・・。」

織斑さんが東さんのほうを向いた。

千「・・・ほう〜」

お〜・・・阿修羅が見える・・・尋問官であっていたな。

東「ちーちゃん・・・怖いよ・・・」

千「お前が余計なことを言ったからだ。」

悠「え〜と、織斑さん？」

とりあえず話を戻さないと、先に進まない。

千「千冬でいい。なんだ？」

悠「もしかしたら、私の知ってる事と千冬さん等が知ってる事が違うかもしれないので、できたら情報交換したいのですが・・・その結果、何故自分がここに居たのかが分かると思いますので」

千「・・・分かった。」

悠「ありがとうございます、」

そこから数分間・・・千冬さんの住んでいる世界と自分の居た世界の違うところを質問したり、されたりして自分の出した答えが。

千「異世界から来たか・・・。」

悠「憶測なので聞き流してください。」

千「・・・東、どう思っ？」

千冬さんは、先ほどから隣でキーボードを打っていた東さんに聞いた。

悠「（・・・）」

パネルを閉じ束さんは、口を開いた。

束「どの国にもこの子の名前がなかった・・・あとこれと、これ。」

束さんが左手に音楽プレイヤー、右手に「ルビィ」の様な、紅い透き通った指輪」を持っていた。

悠「（天才って言うだけのことはあるか・・・）」

千「・・・いい曲じゃないか、それが？」

束「ついでに調べたけどそれも無かったよ。で、ここからが本題、君はこれを持って倒れてた、どこで手に入れたか覚えてる？」

指輪をこっちに突き出し、真面目な顔で聞いてきた。

悠「身に覚えがありません。それは？」

束「これが「IS」。これは待機形態ね。しかも私が全く解析できない「IS」。」

千「解析できないのか!?!」「IS」の生みの親でもあるお前でも。」

悠「（そういえば、さっきの情報交換で開発したとか言っていたな・・・）」

束「全然できなかったよ・・・で、結論、私もこの子が異世界から来た。以上。」

千「お前が言うんだ、当たっているんだろう。」

悠「元の世界に戻せることは・・・」

恐る恐る言ったら束さんは、自信満々に言い放った。

束「無理無理、出来ないし、そ・れ・に」

何故か手をワキワキしながら近づいてきて、肩を握りながら喋りだした。

束「仮に出来たとしても帰さないよ」

・・・少し不気味・・・

束さんは肩から手を離し、こちらを指さした。

東「君は、この東さんの研究ざいりよ・・・もとい！、この未知の「IS」の所持者なのだからここに居なさい。衣食住を与えるよ。」

悠「・・・研究材料と聞こえたのですが・・・（だがこの無一文状態で食べ物と寝床を与えてくれるのはいいが・・・何か危険な感じがする・・・）」

解剖とかすると思いますか？あとそろそろ縄を取ってください。」

隣でこの状況を見ている千冬さんを見ながら聞いてみた

千「・・・しなれと思いたい。」

と呆れた顔で言い縄を解いてくれた。

悠「・・・思いたいですか・・・」

解けた瞬間、千冬さんを盾にする。

千「そうだ・・・なぜ私の後ろに隠れる？」

悠「弄いじられると思ひ、・・・東さんには、逃げ回るより千冬さんに任せたほうが一番かと・・・」

東「弄らないよ、このISが起動したら解析しようと思っただけなのよ」

あ、拗ねた……。意外と繊細なのかな？

東「そ、だよ、東さんは繊細なんだよ。」

悠「心を読まないでk」ぐう」……。」「

俺の腹がなった。

千「……。」「

東「……。」「

悠「……。はあ、台所はどこですか？」

自分で作ったほうがいろいろ楽なので言ったんだが、その発言に千冬さんが振り返り、肩に手を置いて聞いてきた。

千「御神、料理はできるか？」

悠「……。できますよ。どんな物があるか確認したいのですが……」

「

千「東」

東「こつちだよ」

東さんに、台所？に連れて行かれた・・・

悠「（・・・あの二人もしかしたら・・・だとしたらあれを作るか、材料は・・・足りるな）さて、やるか」

料理中・・・（なお作者はまったく料理ができません）

悠「~~~~~ん？」

千「・・・」

東「・・・」

千冬さんが訝しげに、東さんが期待に満ちた目でこつちを見ていた。

悠「え〜と・・・ナンデシヨウ？」

「「何作ってる」の」



悠「・・・お粥」

「「・・・は？」」

千冬さんと東さんは固まった

悠「二人とも疲れていると思って、軽いものをと・・・よし、終わり。」

食事中・・・

美味いという感想に反応したのが不味かったのか、千冬さんが少し赤くになっていた。

その時の言葉が「あまりその顔をしない方がいいぞ」だ。どんな顔なんだ・・・？

その後、千冬さん達は、この世界のことを話してくれた・・・

私も話した。この世界と違う自分の世界の事を・・・

野暮だったが気になっていたのを聞いてみた。

悠「何故、私の言ったことを信じれるのですか？」

その言葉に千冬さんは。

千「嘘かどうかは大体わかる。・・・何か隠してるみたいだな。」

悠「そうですね・・・」

・・・外は夜になっていた。

余談・・・ 鏡を見て驚いたが、10歳ぐらいになっていた事。  
髪の色が、見せてもらった指輪と同じで、鮮やかな紅色に変わって  
腰まである事ぐらいかな？

## プロローグ（後書き）

大幅に修正、設定変更しました。  
作者に文才とかイロイロ足りないので、ご了承ください。

一話〱嘘と誘拐〱（前書き）

原作を読み直し、意見を取り入れ修正しました。

一話　　嘘と誘拐

一話

【嘘と誘拐】

夜・・・入浴中

悠「　　」

長い髪に苦戦しながら洗っていた。

悠「　　」

ドアの方で物音が聞こえた・・・

ガチャ・・・

千「御神、石鹼が・・・お前・・・男か？」

扉を開けて、切れていた石罅を千冬さんが届けてくれた。

悠「ええ……そうです。」

俺は体を隠しつつ背中を向けて言った。

悠「千冬さん恥ずかしいので……」

千「!?……お前……その背中どうした？」

悠「?……何が？」

千冬さんが何かに気づいて震えた声を出した。

千「……気づいていないのか？」

悠「その前に……千冬さん……物凄く恥ずかしいです。」

今、俺は風呂に入っているので、服を着ていない。

千「すまない……風呂から出たら見せてやる。」

悠「わかりました。」

そう言って千冬さんが出て行った。

しばらくして・・・俺は風呂から出た。

千冬さんが鏡を二つ持って座っていた。

千「御神、そこに座れ。」

悠「わかりました。」

千冬さんの前に座った。

千「上着を脱いで後ろを向け。」

悠「はあ・・・ところで千冬さん、東さんは？」

千冬さんの言った言葉通りにしつつ、居ない人の事を聞いた。

千「どこかに出て行った、東の事は気にするだけ無駄だ。」

悠「そうですね。」

束さんは居ないようだ。

千冬さんが鏡で背中を見えるようにしてくれた……

そこには……

悠「……これは……」

そこには傷痕が付いていた……右肩辺りから左の腰にかけて二重の傷痕が。

千「お前これに『覚えが無いのか?』」

見せられるまで気が付かなかった。

悠「ええ。全く……（あ、やば……）」

こんな傷痕があつて『覚えが無い』なんて、明らかに異常である。

千冬さんが気がついた感じで口を開いた。



千「まさか・・・記憶が無いのか。」

悠「・・・ハイ。名前と何故居たかと先ほど見せてもらった傷痕・・・」

記憶喪失・・・つまり・・・

千「つまり・・・」「御神 悠」と言う名前は偽名なのだな？」

悠「・・・ええ。名前に「神」って字が付いていた事だけは覚えていたので・・・咄嗟に言いました。」

面倒だな・・・記憶喪失は。

悠「・・・バレるものですね・・・嘘なんて。」

俺は服を着ながら言った。

千「当たり前だ馬鹿者。何故嘘をついた？」

悠「名前が思い出せません何て言ったら、東さんにどんな名前を付けられるか想像できません。」

千「……否定できないが嘘を吐くなよ。」

そこは否定してあげましようよ……

悠「すみません。」

頭を下げた。

千「分かればいい。他に嘘は付いている事はあるのか？ この際、洗いざらい吐くまで寝させないぞ。因みに、嘘を吐く度どうなるか解っているだろうな？」

つまりは拳骨かアイアンクローで拷問すると言つ事だ。

束さんの言った通りになった……怖い尋問官ですな。ウン

ガシ！ギリギリ……アイアンクローを食らった。

悠「千冬さん……何も言っていないのですが？」

とりあえず抗議の言葉を言った。

千「何か失礼なことを考えていた気がしたのでな。」

悠「そうですか・・・名前以外は全部本当のことです。千冬さん何か聞きたいことは？」

千「そうだな・・・向こうとこっちで変わった事はないか？」

アイアンクローを外して質問した。

変わったことね・・・

悠「そうですね・・・多少顔つきが変わったのと、髪の色が変わったことぐらいですね・・・今のところは。」

覚えているのではこんな所だ。

千「ふむ・・・嘘は吐いていないな。」

だから何で解るんですか？

千「それぐらい解る」

悠「・・・（綺麗だが怖い人だ。）」「ゴンー！」「痛いのですが・・・」

千「お前が余計な事を考えるからだ。」

ふむ……

悠「え、綺麗って考えが余計ですか……？」

千「……フム、少しお仕置きがいるか？」

手を閉じたり開いたりしながら言われた……

殴られるか掴まれるかどちらかだ……

悠「丁重にお断りさせていただきます。綺麗と言つのは正直な意見なので素直に受け取ってください。」

嘘は吐いていない、千冬さんは実際美人の部類に……しかも上位に入る。

千「……あまり年長者をからかうな。」

コンと軽く叩かれた。あまり褒め慣れていないのかな？

悠「わかりました。．．．ところで私はドコで寝るのでしょっつ。」

気になったので聞いた。

千「監視の為、私と同じ部屋だ。拒否権は無いからな。」

悠「．．．わかりました。」

千「ついてこい。」

ベッドに入り眠りについた。

---

朝の5時頃、目が覚めた。そう言えば、昨日は東さんのところに泊めてもらった。

隣を見たら千冬さんが眠っていた。

そのまま起きて朝食の準備をやっていたら千冬さんが起きてきた。

千「・・・こんな時間に何をやっている？」

悠「何って・・・朝食の準備。千冬さんはどうしたのですか？こんな朝早く。」

千「・・・今日は第二回モンド・グロツソがある日だ。」

乗気じゃない顔をして言った

悠「そうですね・・・すぐ朝食の準備するから待っていてください。弁当は間に合わないと思うので諦めてください。」

朝食を用意しつつ千冬さんに言った。

千「わかった。」

何故か残念そうな顔をして言った。

・・・数分後、千冬さんの朝食の準備が終わったところに、匂いに釣られてか東さんが起きてきた。

東「いい匂い」

悠「東さん、少し待ってください。千冬さんどうぞ」

千「悠・・・主婦だな」

悠「それを言うなら主夫でしょ！あ・・・そんな事言っていないで、時間大丈夫ですか？」

千「お前の飯は美味しいから問題ない。」

え・・・どんな理屈ですか？

東さんの朝食を準備していたら、千冬さんが食べ終わった。

問題ないって言うぐらい早かった・・・

千「では、行ってくる。」

東、悠「「いってらっしゃい」「」

東さんと自分の朝食を食べ終わって、片づけしていたら東さんが話しかけてきた。

東「ゆっくん」

悠「はい？」

束「この後「IS」を起動してもらっただけで体の調子はいい？」

悠「問題ないです。それと「ゆっくん」って？」

束「悠くんだから「ゆっくん」・・・ダメ？」

昨日から言っていたがあだ名か？・・・勘弁してほしい。

悠「・・・わかりました。「ゆっくん」でいいですよ。それどころで「IS」を起動するのですか？」

束「こっち来て〜」

笑顔で言った束さんの後をついていく

あだ名の件は・・・諦めた。抗っても無駄っぽいから。

数時間後・・・



束「ん〜なんでだろ？ゆっくん解る？」

悠「束さんが解らないのに・・・私が解ると思いますか？」

「IS」が起動していなかった。

束「ん〜解らないものは放って置いて、ん・・・？」

束さんが幾つかの画面を見ていて何かに気づいた。

悠「どうしたのですか？」

束「いっくんが誘拐されたらしいんだよ。あ、いっくんはちーちゃん  
の弟なんだけどね。」

悠「千冬さんの弟が誘拐！？・・・まさかな・・・」

今日は第二回モンド・グロツソ・・・千冬さんが言っていた。

俺はその画面を見ながら考えた。

悠「（大会だからか・・・憶測だが可能性は否定できないし・・・  
だけど違う目的もありえるし・・・。最悪・・・まさか！・・・く・・・

・こんな時に力があれば・・・!?)」

その時、指輪が語りかけた気がした。受け入れた瞬間、膨大な情報が流れてきたそして・・・理解した。

悠「ああ、ありがとう。・・・そして行こう・・・」アポロン」

束「大丈夫だよ。ちーちゃんに情報がいつて、助けに行ったから・・・あれ? ゆっくん?。」

束が言い終わるころには、其処には誰もいなかった。

悠「（ここが捕まっている所は・・・ん？）」

現在、「光学迷彩」を使用して、千冬さんの弟が捕らわれている所にいる。

縄で縛られている男と離れたところに監視と思われる者が数人・・・

悠「（君がいつくんと言っか千冬さんの弟？）」

一「（ん？誰だ？・・・それにこれは？）」

悠「（ああ、それは・・・！？）」

「居ない!?!」

監視の者に気づかれた。

一「千冬あん・・・」

悠「（喋るな!）」

とりあえず「光学迷彩」でやり過ぎす・・・と思ったが、いつくんが声を上げたことにより露見。

いきなりこっちの方を向いて銃を構え撃ってきた。

悠「(ちっ)」

「あぶね！お・・・」

ドゴー！

これ以上、煩いのは嫌なので気絶させる、そして肩に担いだ。

相手からはこちらの姿が見えない、銃を乱射させまくっている。鬱陶しいから、誘導兵器とウイングスラスタに付いてるレーザー砲で壁を攻撃。

悠「ここを破壊する・・・5分だけ待つ、死にたいやつは残れ・・・」

4分後・・・やつこさんが逃げていった。

悠「さてと・・・」

「光学迷彩」を解除して誘導兵器を打ち出し攻撃、足のレーザーブレードを蹴り放つ。

敵が残って居ようが居まいが関係無い、とにかく壊す！壊す！壊し

まくる！

破壊中……

……その途中、曲がらないかな？と思いき撃っていたら、レーザーが曲がった。

悠「……ビームが曲がるのが便利だな。……だが結局、相手の目的が分からなかったな……」

相手の目的……一夏の誘拐だけが目的だったのか？ほかに目的が無かったのか？

……今更考えても仕方が無いが、最悪のケースだけは回避できたな。

悠「思い出したらまたムカついてきた。……」

誘導兵器にスラスターのレーザー攻撃、足を振り斬撃を放つ。

幽閉されていた場所を徹底的に破壊し尽くす。

何も残らないくらいに・・・

「話ぐ在り得ない」(前書き)

キャラが崩れてきていると思います！

気にしないでください・・・m(´)´(´) m

二話（在り得ない）

二話

【在り得ない】

SIDE千冬

39

織斑千冬は焦っていた。

数時間前の・・・織斑一夏が誘拐されたと、ドイツが真つ先に居場所を特定し、千冬に情報が提供されたからだ。

千「（一夏が誘拐だと・・・！）」

束「ちーちゃん。」



束からいきなり通信が入った。焦っているのに・・・

千「なんだ！？今は忙しいのd・・・」

束「ゆつくんがそっちに行ってるかもしれない・・・」

千「！・・・詳しいことを聞かせろ」

悠が向かっているだと？

束「ISが起動していなくて量産機の打鉄を渡そうとしたら、いつくんが誘拐された事を見つけて・・・それを言ったら。ゆつくんが消えてて」

千「消えただと!?!」

束「うん。その時の映像がこれ・・・。」

映像が送られた。難しい顔をしていて何かに気がついた顔をした瞬間、一瞬でISを起動させて「消えた」。文字通り消えた。

千「なんだこれは・・・」

束「空間の歪みがあったから、特殊兵器が単一仕様能力だワンオフ・アビリティと思うよ。

「

千「・・・なぜ悠はこっちに来てると思う？」

一夏を救出するために向かいながら聞いた。

東「それは・・・最悪ちーちゃんかいつくん、もしくは二人とも死んでしまうと思ったから・・・だと思う。」

千「(予想はしていたが)・・・わかった。一夏と共に悠も何とかする。」

それしか言えなかった。

東「気をつけてね。」

千「ああ。」

通信が切れた。兎に角、一夏が捕らわれている所に急いだ。

数分後・・・

千「何だあれは・・・」

一夏が捕らわれている所に近づくにつれて異変に気がついた。

黒煙が上がっていた・・・所々で爆発音もしていた。

千「一夏、悠・・・！」

ハイパーセンサーが、空に、誰かを抱えた者が長い髪をなびかせて浮いている者を捉えた。

辺りに誘導兵器が六基、縦横無尽に飛び回りレーザーを放っていて、背中に六機、展開されているウイングスラスタから大量のレーザーが曲線を描いている。

時折、蹴りを放ち斬撃を飛ばしていた。

・・・離れていても浮いている者から殺気と怒りが伝わってくる・・・

近づいたらその者は、私に気づいて気を静め、振り向いた。

千「悠・・・」

振り向いた悠は哀しい顔をしていた。

悠「千冬さん……気を失っています。弟君は無事ですよ……」

千「……そうか……」

私に一夏を預けてきた。会話をしている最中に誘導兵器を戻していた。

……悠は破壊した後を見ながら口を開いた。

悠「……どの世界も……こんな事があるんですね……」

千「……無い世界なんて無いだろう……それがお前のISか。」

指輪と同じ紅を中心とした「IS」だった。

背中にある六機のアンロック・ユニットのスラスタ、腰に誘導兵器が六基、両肩に二つ装甲が展開されていた。

悠「ええ……アポロン……力があればと思っただら、こいつが答えてくれた気がしました。」

千「ギリシャ神話の神の名か……」

悠「……ええ。……あ」

悠は地平線の彼方かなたを見て何かを思い出したらしく口を開いた。

千「どうした？」

悠「……帰りますか。」

千「……帰ったら説教だぞ。」

説教と言った瞬間、悠は悲しそうな顔をして空を見上げた。

悠「……しばらく空を眺めていたいです。」

ゴン！

千「そんなものは、何時でもできる。さあ帰るぞー！」

私は一夏を持ち直して、悠の頭を叩き、耳を引っ張りながら束の所に帰った。

悠「千冬さん痛い！痛いです！」

千「少しは反省しろ！馬鹿者。」

千「（・・・人の気持ちも知らずに・・・）」

SIDE OUT 千冬

---

現在は織斑邸・・・また何かされる可能性を考慮しての事だ。

織斑一夏を助けたは良いが、千冬さんと束さんのダブルで説教を食らった。

一夏を自室に置いてくるらしく、それまでは束さんの説教（ISに  
関しての質問攻めと解析と少しの説教）を受けた。

UNKNOWNだった所が若干だけ表示されたらしい、それを見  
て束さんは探るように解析できた所を難しい顔をしていた。

数分後、一夏を置いてきた千冬さんが帰ってきて、怖い顔でこちらに近づいてきた。

そこからは思い出したくもない説教・・・数十分・・・。

説教中、何かを思い出したらしく束さんが話しかけてきた。

束「そう言えば、ゆっくんどうやって移動したの？」

千「そうだ、明らかに私よりも先に着いていたな。」

悠「え、移動しただけですよ？」

「「・・・は？」」

二人して聞き間違えたか？と言う感じで言った。

悠「「空間制御」して移動しただけです。移動した瞬間にカウントが2つて表示されましたが・・・」

「「!？」」

二人が目を見開いた。どうしたのだろうか？

千冬さんが信じられないような感じで、隣の束さんに聞いた。

千「東、お前作れるか？」

東「わ、私でも作れないよ・・・けどここに在るんだから、あるんでしょ？」

千「そうなのだが・・・あと燃費が悪そうな誘導兵器を使っていたが、私が行くまでエネルギーが切れなかったな？」

確かにドカドカ撃っていたが・・・

千冬さんの言葉が不思議に思った。

悠「え？切れるものなのですか？数値が徐々にですが回復してましたけど、全てのISがそうじゃないのですか？」

千「違う・・・東。」

東「普通は無理だよ。単一仕様能力ぐらいじゃないと・・・つまり」  
ワンオフ・アビリティ

「「ありえない・・・」」

二人とも信じられない様な感じで言った。

悠「そうなのですか？」



千「ああ・・・このIS一つで戦争の火種になりかねない・・・」

束「うん・・・」

悠「そこまで事態が発展するのですか？」

気になったので聞いたみた。

千「今現在、空間に働きかける兵器で、空間を制御して転移する技術は存在しないし作れない。それに普通はエネルギーは自然回復はしないし、そんな技術も無い。それがどんな意味を持つかわかるだろうか？」

悠「そんな未知の技術が搭載されてある「こいつ」もしくは俺達を奪うために世界各国、各企業が動くと言う訳ですね・・・」

千「そう言う事だ。理解できたようだな、それとそれを使えるお前がどれだけ危険なのか。」

つまりは危険人物扱いか・・・当たり前か。

解析できたら、確実に悪用しかねないからな・・・

悠「理解できました・・・束さん、その部分って解析できましたか？」

束「BT兵器と展開装甲の部分しか解析できなかったけど、私が開発したやつより性能も燃費も良いのよね。後は解析不能。」

手を挙げて言った、つまりお手上げ状態と。

だが、まったく解析が出来なかったのに、少しだけ解析が出来たのを不思議に思った。

悠「少しだけ解析できたのですね。何で解析できたのだろう・・・？」

束「さあ？何でだろうーちゃん？」

千「お前がわからないのに、私ができるわけがないだろ・・・（こいつをそのまま野放しには出来ないからな・・・見極めてみるか。）」

俺が束さんに聞いてみたら、束さんも分からなかった。

束さんも千冬さんに聞いたけど、束さんが分からないのに千冬さんが分かる筈もないという事になった。

千冬さんが少しだけ考えて、何か浮かんだらしく口を開いた。

千「私は一夏の情報を伝えてくれたドイツに借りを返す為、数年間あっちのIS指導員として行かなければ行かない。それに悠を同行

させようと思う」「それ」を持たせて良いか見極めるために。東、リヴァイブか打鉄どっちでもいいから、ISを用意しておいてくれ。」

東「わかったよ。ちーちゃん。」

即答している辺り、東さんは出来るのだろう。

千「ついて来るかは自分で決める。ちなみに拒否したら「あれ」はこちらで預からせてもらう事になる。」

千冬さんは俺のほうを向いて聞いてきた。自分の行く末を決める事だからすぐには決めれない。

悠「・・・時間を頂けませんか？明日までには答えを出しておきます。一応「こいつ」は預かってください。」

千「当たり前だ・・・明日になったら答えを聞かせてくれ・・・」

千冬さんに指輪を渡して、データを見ていた東に視線を移した。

もし用意するなら、一つお願いしておこう・・・

悠「東さん、ISを用意するなら近接ブレードを複数でお願いできますか？」

束「できるよ、何本ほしい？」

悠「二本で。」

千「何だ心得があるのか？」

悠「一本が折れたりしたら嫌ですので、念のために。」

千「そういう事が・・・」

千冬さんが言い終わった瞬間・・・

「ぐう」

小さい音だが誰かの腹がなった。ちなみに今度は俺じゃない・・・

「」「」「」「」「」「」「」

物凄い嫌な空気だ・・・私では無いぞ見たいな空気がある。

背中から嫌な汗が出てくるぐらい・・・東さんは・・・違うなケロッとしてる。千冬さんを見たら・・・怖いな。

・・・飯にするか・・・

悠「そう言えば、一夏君は食事のほう大丈夫なのですか？できたら起こして、聞いてきてもらえますか？あと台所と。」

千冬さんが恥ずかしいような、狼狽える様な感じだった。

千「あ、ああ、一夏も料理はできるが・・・今日はお前が作ってくれ、台所はそこだ・・・／＼／」

東「ふふふ、ちーちゃんかわい・・・」

ゴン！

言い終わる前に、千冬さんが殴った。

東「ちーちゃん横暴！」

千「五月蠅い！」

悠「千冬さん少しは手加減しないと・・・」

そのまま顔を赤くして一夏君を起こしに行った。

お腹がなつたのが恥ずかしかったのか・・・

二話〈在り得ない〉（後書き）

東さんが消えるのについて、瞬間移動しているのか、迷彩使っているのか判りませんね……

### 三話　夕飯と選択

#### 三話　【夕飯と選択】

俺が台所で材料見ていたら、千冬さんが気絶していた。一夏君を起こしてきた。

一「千冬姉から話は聞いたよ。俺は織斑一夏。助けに来てありがとう。え」と・・・」

悠「御神　悠だ。呼び方は悠でいい。こちらこそ気絶させて悪かったな。一夏君。あと俺は男だからな」

一「あゝ・・・あれはいきなりだったからな。・・・って男!？」

気絶させたと云う言葉を聴いて千冬さんが怖い顔をして聞いてきた。

千「悠・・・それはどう言う事だ?」

悠「あまりにも煩いので気絶させました。・・・てへ」



「「てへ、じゃない！」」

おお、シンクロ。

悠「え、常に居場所を教えている行為だったので黙らしたのですよ。時間が惜しかったし、煩かったし。」

千「・・・それは仕方が無いな。」

—「千冬姉！それは無いぞ。「じゃ、死にたかったのか？」いや・・・」

俺が言ったら黙った。

悠「助かったからよかったとして・・・食事のほうはどうします？多め少なめ？」

「「・・・多めで・・・」」

二人とも腹が空いてるらしく。素直に答えた。

悠「じゃ、二人とも待っていてください。」

—「悠、手伝おうか？あと呼び方は一夏でいいぞ」

「夏が手伝う事を言ってきたが、ここは少しでも気を紛らわす為に  
手伝わせるか・・・」

悠「じゃ～お願いするか。一夏。」

「おう、任せてくれ。」

そこから二人での料理が開始した・・・

かなりの料理ができ、食卓に着いた。

「いただきます」「」「」

との掛け声を合図に食卓は戦場と化した。

「これうまいな、あ、千冬姉それ俺が目をつけてたやつ。」

千「早い者勝ちだ。修行が足りんぞ。む、東……。」

東「どしたの？ちーちゃん？美味しいね。」

千「く……。」

悠「……（もぐもぐ）」

美味しいと言い、食べてくれるのはいいが……

千「ん？悠どうしたもつと食べる。」

そう言って沢山、盛り付けてきた。

悠「……ありがとう。」

東「ん？ゆっくんどうしたの？」

少し昔を思い出していたが、それを気取られてしまった。

悠「ん？東さん食べないの？千冬さんがドンドン食べていってるよ

「？」

話を逸らした……この明るい雰囲気壊したくなかったから。

束「あ！ちーちゃん食べすぎ〜」

千「考え事をしているお前が悪い。」

—「千冬姉食べすぎだ！」

悠「……（懐かしいな）」

数分後……料理の半分を千冬さんが食べつくしてた。

片づけして、風呂入ってソファアをベッド代わりにしていた。

今日はここに泊まっていけとの事だ。

ちなみに束さんは研究所に一時帰宅？した。

ソファアに寝転びながら明日のことを考えていた。

悠「（答えか……拒否したら一般人としての生活か……限り無

くゼロに等しいが、最悪消されるだろう・・・あとドイツか・・・

「

天井を見ながら数分考えた。

悠「（ついていくか。俺自身、この世界で何ができるか探すため・・・。使い方を誤ったらただの破壊者だからな、それだけは気をつけないと・・・）」

寝返りを打った。

悠「（眠れない・・・よし無理やり寝るか。）」

夢を見た・・・

俺と妹と姉がご飯を食べている夢・・・

悠「ん……」

？「おい」

悠「あと少し……」

寝返りを打った。

ゴン！……頭を殴られた。

悠「痛い……」

千「おはよう」

悠「……おはようございます。」

千「今日は遅いんだな。」

起き上がったなら……外は日が出ていた。時計を見たら10時頃だった。

悠「……千冬さん」

千「先にご飯にしる。今日は一夏が作ってくれた。」

何を言うか感じ取った千冬さんはそう言ってくれた。

悠「ハイ・・・一夏は？」

千「あいつは少し前に出かけたぞ」

悠「そうですね。」

遅い朝食を食べて食器を片付け、いざ話そうとしたら東さんが現れた。

東「ちくくちやくくん。」

東さんが千冬さんに飛び込んで行った。いつもこの登場なのかな・・・？

千「・・・」

するりと避けた・・・アイアンクローしなかったんだ。

千「悠。答えは出たのだな。」

悠「ハイ・・・俺は、千冬さんについて行くつもりです。己自身何ができるか探すために。」

束「ちーちゃん、ゆっくん・・・」

束さんが無視されて拗ねているが・・・真面目な話の最中、ツッコミは無い。

千「・・・そうか、それが答えか・・・束」

束「うん。ハイ、ゆっくん」

悠「これは・・・？」

片方は音楽プレイヤーと携帯、もう片方はカードと通帳、茜色の腕輪だった。

束「腕輪はリヴァイブ、少し改良してあるよ。カードはあのISの解析分のデータ賃。」

通帳を見たらかなりの金額だった。驚いた顔で束さんを見たら、いつもの笑顔で言った。



東「あのデータは貴重だったからね、それぐらいでも安いほつだよ。後はご飯代？」

悠「ありがとう。」

礼を言った。少しのデータでこの金額は……

東「いいよ、お礼なんて。」

千「悠、そろそろ行くぞ。」

千冬さんが時計を見て言った。

腕輪を着けて外に出て、東さんに向き直り挨拶をした。

悠「では、東さん行って来ます。」

東「いつてらっしゃい。ちーちゃん、ゆっくん。」

千「ああ、行って来る。」

そして俺は千冬さんとドイツに行った。



三話「夕飯と選択」(後書き)

誤字、脱字が目立つ様なら、ご報告等お願いします。

## 四話、ドイツ初日

### 四話 【ドイツ初日】

日が傾き辺りが薄暗くなっている時、現在、ドイツ軍のIS訓練施設に来ている。

千冬さんが自己紹介しているが、今の俺にはその有難い言葉は入ってこない……。

現在俺の周りは、当たり前だが全員女性、ハッキリ言って嫌だ……  
落ち着かない。

千「瞬」、……」

ゴン！

聞いていなかったと思われ、早速鉄拳制裁を食らった。

聞いていたが入ってこなかった。

悠「ぐ……何でしょうか？織斑教官……」

千「私の話を聞いていたのか？」

なぜ俺のことを「瞬」と言ったかということ……まゝ偽名だ。現在の名は、「如月 瞬」と言うことになっている。

ちなみに女装しての事……男がISを起動できる事を知ったら周囲がうるさい為である。……気休めではあるがと言っていた。

そして「アポロン」は千冬さんが紐に通して首に掛け見えないように服の内側にある。

悠「いえ、緊張していたので耳に入ってきませんでした。」

コン！今度は軽かった。

千「と、違反をした者は、先ほど以上の罰を与える。わかったか。」

バツ！

全員敬礼した。おおゝ全員一致してる、感心する。

千「よし今日は解散。明日に備えろ、あと瞬とラウラは残れ。」

その言葉とともに、俺とラウラ以外が全員散っていった。

千「ラウラ、最近の成績が振るわないようだが、なに心配するな。一ヶ月で部隊内最強の座に戻してやるう。私が教えるのだからな。」

悠「（千冬さんが言うと、何故かできると信じれるから不思議だな。）」

俺はラウラを見た。

輝く様なきれいな銀髪。たぶん銀だろ……。あと眼帯、医療系とは思えないから何かを抑えている、隠しているみたいな物か？

もっとも印象に残ったのは赤い眼、ただ捨てられた様な感じの悲しい眼だ。

悠「（何故だろ……。一番見たくない眼だ……。）」

俺はラウラの頭を撫でてやった。

悠「ラウラ、千冬さんの事が信じられないのか？」

ラ「いや・・・私は・・・」

ラウラは驚いた感じで俺を見た。

嫌な予感がして離れた。

ビュン

今度は避けた。しかも拳骨で「ブン」は判るが、「ビュン」って効果音はやばくない・・・？

悠「千冬さん、何をするのですか？」

千「織斑教官だ・・・瞬、明日私とISでの模擬戦をする。お前の腕を見ておきたい。」

悠「・・・わかりました。」

とりあえず返事をした。ハッキリ言って面倒だが・・・

千「面倒でもやるからな。」

何故わかる・・・

悠「ハイ・・・そろそろ遅いし解散しましょうか？」

千「そうだな、ラウラ明日から覚悟しておけよ。」

ラ「ハイ。」

ラウラが走っていった。暗い感じから変わったからよしとするか。

悠「あ、そういえば・・・」

千「どうした？」

俺は忘れていたことを千冬さんに聞いた。

悠「私は何処で寝るのでしょうか？」

千「私と同じ部屋だ。当然だ。」

千冬さんはさらりと言った。同行者として来たから当然なのだが・

悠「・・・そうですか。」



千「その間は何だ？ちなみに拒否したら、外で寝ることになるが？」

悠「拒否なんてしませんよ。ただ落ち着かないだけですよ。」

俺は本心を言った。女性と同じ部屋は落ち着かなくて嫌だが、外で寝るなんてもっと嫌だ。

千「そうか。明日は早いし、さっさと部屋に行くぞ。」

悠「了解。あ、千冬さん。」

千「何だ？」

教官じゃなくて良いのか・・・

悠「明日、飯作って良いですかね？」

千「・・・何でだ？」

悠「ラウラを見ていたら・・・何処かで見たことのある目をしていたので・・・」

あの見たくない目・・・

千「そうか・・・何故、飯なんだ？」

悠「『美味しい飯は食した者の心をも癒す』みたいな感じの事を聞いたことがある様な無い様な・・・」

つまり分からないと・・・

千「ハア～・・・全員の分作れよ。」

部屋に着いた。

部屋について俺が千冬さんに言った。

悠「和食を作ろうと思つので・・・千冬さん日本に行きます?」

千「あれを使うのか? 効果範囲が分からないのに?」

悠「ん～・・・最終手段使います?」

これなら大丈夫じゃない? って感じで言った。

千「どんなのだ?」

俺はアポロンを呼んで展開し「光学迷彩」を使った。

千冬さんが驚いて紐を手繰り寄せた。

そこには指輪が無かった。

千「遠隔コールもできたのか？」

悠「やろつと思っただけでした。」

真顔で言った。

千冬さんは呆れていた。

千「呼び寄せれるのなら、私にそれを預けても意味が無いのでは？」

悠「意味は・・・多分ありますよ。」

千「どんなのだ？」

悠「俺の気持ちの問題です。使い終わったらまた預けます。」

・  
・  
数日だけ話した人だが・・・この人は多少信じられると思ったから・

千「……で、どんな手段なのだ？」

悠「これですよ。」

俺は千冬さんを正面から抱きしめて跳んだ。

現在、織斑邸の上空。

千「!?!?……おい。」

かなりドスがきいた声で言われた。

悠「暴れたら危ないですよ。」

千「ふざけた事をするからだ。後でお仕置きだ有り難いと思え。」

かなりご立腹だ。

悠「ハイハイ……開いてる店、知ってますか？」

千「ここからだ……。」

そして千冬さんの案内で食材を購入し、また跳んだ。

現在、ドイツの寝室・・・

悠「いあゝ、便利だが回数制限が有るのが残念だ・・・」

と愚痴を言った。

空間制御は3回が限界らしい。

千「・・・おい。」

と、前方で千冬さんが怖い顔でいらっしやいます。

悠「ハイ・・・すみませんでした。」

俺は正座をして謝った・・・要するに土下座だ。

千「フム・・・殊勝な心掛けだな。だが！」

ゴン！拳骨を食らった。

千「人の断りもなく使うな。いいな？」

睨みを利かせて言われた。

悠「ハイ・・・あと抱きついてすみませんでした。」

全面的に俺が悪いので謝るしかない・・・

千「・・・他のやつにはするなよ？」

悠「分かりました・・・千冬さん風邪？」

少しばかり顔が赤い気がするのだが・・・

千「違う・・・あれに回数制限があると言っていたが何回だ？」

悠「3回です。一夏の時に使用したら2となっていたのが回復していたので、時間回復か一日経過で回復するか微妙です。」

千「3回か・・・」

使えるだけでも有り難いからな。

悠「千冬さん、これ預かってくださいね。」

俺は指輪を外し千冬さんに渡した。

千「ああ。分かった・・・悠、マッサージしろ。」

千冬さんはベッドにうつぶせになっていきなり言った。

悠「・・・は？」

千「マッサージだ。それとも、もう一度殴られたいか？」

まぐ、抱きついてしまったからな・・・それで許してもらえら  
するか・・・

そしてしばらくマッサージをしていた・・・その際、色っぽい声を  
出され恥ずかしかったが無視した。

予想外に良かったとの事・・・しばらく継続していた。

千「・・・」

悠「千冬さん?・・・」

千「すうく・・・」

静かだと思ったが眠っていたのか。

悠「しょうがないな。」

熟睡しているらしくまったく起きない。仕方ないのでベッドに寝かした。

悠「よし、俺も寝るか。」

俺もベッドに入り眠りについた。



四話、ドイツ初日、(後書き)

気にしちゃダメだ・・・このまま突き進むだけ！

## 五話 腕試しと勝敗

五話

【腕試しと勝敗】

次の日

今、俺は束さんから貰ったリヴァイブを起動している。前方少し離れたところに、打鉄を起動して近接ブレードを持った千冬さんがいる。

そして、離れたところに野次馬が居た。その中には、もちろんんラウラも居た。

俺は近接ブレードを出し握り締めた。

悠「・・・」

千「勝敗はどちらかのシールドエネルギーが尽きたらだ・・・では・・・いくぞ。」

千冬さんが、高速で接近し攻撃を仕掛けてきた。それを回避しようとした時、違和感があった。

悠「・・・俺の反応に機体が追いついてない？」

その攻撃を俺は紙一重で回避した。シールドエネルギーを削られてしまった。お返しとばかり、回避行動と同時に斬りかかったが回避された。

悠「（やっぱり少し反応が遅い・・・ヤルか）」

自分の反応速度に合わせるため、左手を部分解除して調整をしながら、千冬さんに切りかかった。

その行動に千冬さんも野次馬等も驚愕した。

千「戦闘中に調節するな馬鹿者が！！」

千冬さんが物凄い剣幕で怒鳴り俺の斬撃に対応した。

尤もな意見だが、違和感があるとやり辛いのは確かなので・・・

悠「仕方ないでしょ。違和感が在るのは、かなり使い難いんですよ！」

鏑迫り合いしつつ答え、パネルを高速で打ちまくり蹴りを放つ。

千冬さんを蹴り飛ばして距離を取り、ブレードに軽く上に投げ銃火器系を出し数発撃った。

武器を展開する時間すら惜しい、だから上に軽く投げた。

千「ちっ（これは待っていたら、負けてしまいかもな。）」

正確に迫りくる銃弾を回避して、片手が使えない今の内に勝負をつける為、フルブーストで接近し切り掛かってきた。

その時には銃を量子化し落ちてきたブレードを掴んでいる。千冬さんの斬撃の軌道をブレードで逸らし、斬り飛ばしまた距離を取った。

俺はブレードを振りながら、左手で高速で調整した。

悠「（調節が終わるまで、もう少し時間を稼ぐか・・・あとエネルギー残量が400か・・・間に合うか・・・何!?!）」

千冬さんが、高速で袈裟切りしてきた。

悠「(さつきより速い!?・・・さつきエネルギーを放出し、それを内部に一度取り込んで、また放出したはず・・・やってみるか。)

俺は、千冬さんがやった事と同じ事をやってみた。

後に聞いたが、イケンニッション、ブースト瞬時加速と言っらしい。

原理は、エネルギーを放出、それを内部に一度取り込み、圧縮して放出するとの事、その際に得られる慣性エネルギーを利用して爆発的に加速するらしい。

こちらも高速で接近し逆袈裟で対応。今度は次々と斬撃を浴びせてきたが、その斬撃を逸らし時に防いだ。

千冬さんが呆れた感じで言ってきた。

千「片手で私をあしらい、拳句、瞬時加速まで見ただけで使うとは・・・呆れを通り越して怖いな。」

悠「これで精一杯ですよ。」

千「阿呆。さらに片手で調整しながら、平然とやってるからだ!」

と言いながら蹴り飛ばしてきた。防御、回避が間に合わず、まともに食らってしまった。

悠「くっ！（やばい！）」

体制が整っていない隙に、瞬間加速を使い接近して横薙ぎを食らわせた。

ギリギリ直撃を避けれたがシールドエネルギーが、かなり削られて残り110になった。

牽制のためブレードを振り、一時距離をとった。

悠「怖いな・・・（あと2秒、よし）」

調整が終わって左手を部分展開、手を開け閉めした。

違和感が無いことを確認して、左手にもブレードを呼び出し振った。

右手を前に構え千冬さんを威圧しながら、左手を振って感覚を確かめた。

千「調整が終わるまでに、終わらせたかったが間に合わなかったか・・・（恐らく次の一撃が最後だな）」

悠「・・・（たぶんこれで決まる）」

千冬さんは居合いの構えをした。それに対し俺も右手を弓を引くように引き、左手のブレードを逆手に持ち、前に突き出した。

千「・・・」

悠「・・・」

俺は瞬間加速をし千冬さんに突っ込んだ。千冬さんも同様に瞬間加速をし突っ込んで来た。

攻撃の射程範囲に入った瞬間、先に仕掛けてきたのは千冬さんだった。そのまま俺の胴を・・・否、左手を狙ってきた。

それを左ブレードで防いだ。ブレード同士がぶつかり一瞬拮抗したが、千冬さんの威力に押し負けた。

千冬さんはそれだけに止まらず、そのまま上段の構えに移った。

俺は押し負けた反動を利用して、右のブレードで斬り掛かった。

二人の攻撃、切り裂くのは同時。結果・・・二人ともエネルギー残量が無くなり引き分けになった。

千「悠・・・何が折れた時のために・・・明らかに扱い慣れしていたぞ。」

千冬さんが俺を見て言って来た。俺は空を見上げ注意した。

悠「・・・名前。」

千「悪い・・・どうした？」

千冬さんは違和感を感じ聞いてきた。

この世界の最高峰である千冬さんに引き分けになったが・・・

悠「・・・夜にでも話します。それと面倒な事になりましたね。」

千「ああ・・・まさかお前がここまで出来るとは思わなかった。それにもう遅いけどな。」

その後、野次馬等の質問攻めにあつたが、疲れていると言って追い払った。



五話〱腕試しと勝敗〱（後書き）

戦闘を書くのが、こんなにも難しいと書いてる途中で感じました。

六話 〱 疑惑と思い過〱〱〱

六話

【疑惑と思い過〱〱〱】

試合が終わり・・・移動中

俺は右に居るラウラの頭を撫でていながら、千冬さんと移動していた。

ラウラは少し落ち着いた感じの雰囲気だった。

俺は昨日の事を千冬さんに報告した。

悠「千冬さん」「ゴン！」織斑教官・・・痛いです。」

千「知らん。で、何だ？」

千冬さんと言ったら殴られた。

悠「食堂担当に話をつけて、夕食は私が作る事になりました。と報告をしたかっただけです・・・イッテ・・・」

俺は頭を擦りながら言った。

千「そうか。・・・おかしいな軽くしたつもりだったが？」

この人は・・・加減と言うものを知らないのかな・・・？

千「・・・もう一度殴られたいか？」

悠「お断りします。」

ラ「シユン・・・食事を作れるのか？」

ラウラが聞いてきた。

悠「当たり前だ。覚悟して食べるよ。」

ラ「・・・どう覚悟するのだ・・・？」

悠「できてからののお楽しみ。味は教官のお墨付きだ。」

ラ「そうか・・・わかった。」

出会ったばかりの時よりはマシだ。

歩いていたら少し離れた場所で、こっちを見ながら話をしている、二人が居た。

よく聞いたら俺の事とラウラの事を言っているらしい。隣のラウラを見たら、出会ったばかりの目になっていた。

あの目に・・・

S I D E    ラウラ

私は頭を瞬に撫でながら教官と歩いていた。

ラ「（こいつに撫でられていると何故か安心するな・・・）」

隣に立つ者は、ずっと頭を撫でながら歩いている。教官と同じ位かそれ以上の実力者。

ラ「（見た感じ女なのだが、何か違和感を感じる・・・口調、態度・・・）」

考えていたその時、遠くで囁き声が聞こえた。耳を澄ましたら、瞬の事と私のことを言っていた。

ラ「・・・。」

教官の来る前の気持ちに・・・。

隣から殺気がした。慌てて隣を見た瞬間・・・そこには頭を撫でていた者の姿は無く、その隣に居た教官が冷や汗を流して走り出していた・・・。

声のほうを見たら、瞬が先ほど私の事を喋っていた二人に殺気を出しながら説教していた。

ラ「（ISを展開したにしても、速すぎないか・・・？）」

二人が私のほうを向いて頭を下げ、そして全力疾走で走っていった。  
その後を見ながら瞬は、頭を振っていた。

そして空を見上げていたら、追いついた織斑教官に拳骨を食らって  
頭を抱えていた。そして、教官の説教が始まった……。

S I D E   O U T   ラウラ

夕食……

和食を含めた料理を用意した。

口に合うか心配だったが、問題なかったようだ。

悠「我ながら美味しいな……」

千「そうだな。」

ラ「美味い……」

ラウラが僅かだが微笑んだ気がした。

悠「美味いか、ラウラもつと食べるよ。千冬さんに食べ尽くされる前にな。」

千「お前は明日、他のやつの倍の訓練だ。有り難いと思え。」

悠「全然嬉しくないのですが。」

千「そうか残念だ。だが拒否権は無いから素直に受け取れ。」

ラ「……ご愁傷さまだな。」

悠「そうだな……ご馳走様。」

俺は片付けて部屋に戻った。

その夜

現在、俺と千冬さんが寝室に居る。

悠「・・・面倒なことになった。」

千「ああ。面倒なことになったな。」

二人とも疲れていた。千冬さんに引き分けになった事と夕食の事で、何回も質問攻めを食らった。その度に千冬さんの制裁により回避した。

千「そう言えば・・・悠、試合後どうした？どこかしら呆けていた気がするのだが。」

千冬さんは、勝負がついた時の事を聞いてきた。

俺は少し遠い目をして口を開いた。

悠「人に聞かせたくないの、移動しますがいいですか？」

千「ああ」

悠「千冬さん「アポロン」貸してもらえますか？」



千「ん？ああ。移動するぐらいなら構わないぞ。」

千冬さんからアポロンを受け取った。

俺は、アポロンを展開。そのまま千冬さんを両手で抱えた、いわゆるお姫様抱っこ。

その行動に千冬さんは怒る前に、狼狽した。

千「ゆ、悠！なにをす……」

悠「あれを使うわけにはいかないの……」

千「それもそうだが、関係あるのか！？……前から気になっていたがこれは？」

状況の変化に千冬さんが聞いてきた。

悠「あとで説明します。それじゃ移動しますか……しっかりとつかまってくださいね。」

千「ちょっと待て、どこに行くつもりだ？」

抱えつつ、外に出て高速で移動しつつ言った。

悠「人があんまり来ない所ですよ。」

千「なに!？」

と、千冬さんが言った時には高速で海上まで移動した。

悠「ここなら誰にも聞かれることも、邪魔される事ありませんよ。」

千「・・・おい」

またお怒りの様子・・・あとで説教かな。

悠「ハイ？」

とりあえず恍けた。

千「ハア」。いろいろ言いたいが、まず「これ」の説明をしろ。」

自分の周辺を見て言った。

悠「光学迷彩です。シールドバリアーを変換しているのか、周囲に何かを散布していると予想しているのですが・・・要するに理解できませんし、分かりません。」

千「なるほどな・・・その機体にも呆れる・・・で、何でこの格好なのだ？」

悠「私自身の事だから、周辺に聞かれること無く二人で話がしたかったのですよ。それに軍のIS使って移動するにしても、気づかれるかもしれませんが。空間制御のほうは・・・自重しました。」

千「理由はわかった。お前自身の事とは？」

「ここからが本題、自身の事・・・」

悠「・・・千冬さん、俺は異世界から来たと言いましたよね？」

千「ああ。まさか違ったと？」

悠「異世界から来た事は合っています。ただ・・・向こうに居た俺と、今此処に居る俺が同じなのか？と・・・」

千「どういう意味だ？」

悠「勝負がついた時思ったんです。向こうでは強くも、賢くもなかったのに・・・何故今の俺はここまで出来るのか？ってだから・・・ここに居る俺は、誰かの体を使っているのか？って思ったんですよ。」

「誰だって、いきなり強くなったり賢くなったり考えてしまおうと思う。何故強いのか？、何故賢いのか？」

「異世界に来た事により強くなりました」とかイロイロ考える人も居ると思うが、俺は・・・瓜二つの他人の体に乗っ取って動かしただけと、思ってしまった。

千「なるほどな・・・」  
「ちょっと待て。」

千冬さんが携帯をとりだした。

東「それはないよ」

電話口から東さんの声が聞こえた。

何気に即答だし・・・しかもさっきの会話聞いていた!?

東「世界各国の行方不明者、および、ゆっくんと同じ年齢位の子を調べたけど、瓜二つの子は居なかったよ」

千「だ、そつだ。だから・・・ここに居るお前は、お前だ。」

千冬さんが俺を見つめて言った。そんな事で悩んでいたのか？見た  
いな顔で……

悠「……………」

俺は目を逸らしてた。威厳のある感じとのギャップがあって……  
なんか可愛い。

千「……………なぜ目を逸らす？」

悠「え」と……………その……………」

千「いいから言え。」

俺が口籠っていたら、千冬さんが睨んで言ってきた。

悠「……………可愛かったからです」

俺は白状した。その瞬間千冬さんの顔が真っ赤になった。

千「わ、私だって女だ。そういう顔をする時もある……………//」

そんな反応も可愛いな……

悠「東さん、なぜ俺は向こう側と違うのですか？」

天才の意見を聞いたみた。

東「さあ〜？」「異世界に来たから強くなりました〜」「じゃない？」

じゃない？つて……投げ遣り気味に……ま〜考えても仕方ないか……

悠「……分かりました。……東さんにも感謝の言葉を言いたいのですが、何処から聞いていたのですか？」

俺の考えていたことが杞憂に終わり。千冬さんに言葉を貰い嬉しかったのだが……嫌な予感がしたので聞いておきたかった。

東「それは〜全部〜」

悠「……もしかして……これか……」

俺はリヴァイブを見た……

東「ぴんぽん　それが盗聴器の役割をか……」

ブチ！千冬さんが電話を速攻で切った。要するに渡したときから全部筒抜けていたらしい。

ドイツを出たらリヴァイブの盗聴器機能を外しに行こうと思った。

千冬さんが携帯をしまった。

悠「千冬さん、ついでに東さん」

千「何だ？」

俺は遠くの地平線を見て、千冬さんと東さんに言った。

悠「ありがとうございます。これで少しは前に進める気がします。」

千「そうか……よかったな。それでだ……」

千冬さんが顔を赤くして言った。

千「そろそろ、眠たいのだが・・・。」

悠「そうですね・・・戻りましょうか。」

千「明日は・・・せ・・・きよ・・・うだぞ」

悠「（何か物騒なことが聞こえた気が・・・まっいいか）」

そう思い部屋に戻った。

千冬さんは疲れてたらしく、戻っている最中に眠りについてたから  
千冬さんをベッドに寝かし、俺も自分のベッドに入った。

そして深い眠りについた。



## 七話 男と旅立ち

七話

【男と旅立ち】

千冬さんと模擬戦闘をして一ヶ月が経過した。

誰も起きていないと思う朝の四時過ぎ、俺は外に居た。

現在俺の首には、千冬さんが紐を通して持っていた、IS「アポロン」が掛かっている。

IS「アポロン」は三週間ぐらいしたら渡してくれた。

渡されたとき「信じているからな」って釘を打たれた。

話を戻して・・・外にいる俺は少し変化したリヴァイブを展開している。

千冬さんと模擬戦をやった次の日・・・リヴァイブを改造した。

その際、千冬さんに知られてしまい説教を食らった、が無事改造が

終わったので（もちろん証拠は残していない）ついでに名前も改名した。

「黎明」・・・俺にとっても「黎明」にとっても新しい事が始まる時だと思い変えた。

黎明を展開して近接ブレードを呼び出し、両手に持つそして1時間ぐらい振っていた。

五時過ぎ振り終わり呼吸を整え・・・

悠「~~~~」

歌を歌った・・・俺の居たところの歌だ。

早朝の素振りとは、改造した次の日からの日課になっている。

因みに、この世界は俺の居た世界の約60年位前から、分岐した世界みたいだ。

理由は分からない・・・分岐したのだから仕方ない。

だから俺の知ってるものは、この世界には無い・・・

多少似ているのは在るが、それでも少し寂しいから歌っている。

悠「~~~~」・・・ふう・・・ん？」

？」……」

誰かの気配がして後ろを振り向いたけど誰も居なかった……

悠「……シャワー浴びて、久しぶりに飯作るか。」

俺はシャワーを浴びてる最中も、誰かの気配を感じていたが誰か分からなかった。

そして朝食の用意をする前に……

悠「……（誰も居ないな、カメラも無しと）」

「光学迷彩」発動して、日本に跳んだ。そして材料を大量に購入、またドイツに戻った。

厨房に入って思った、材料でどこに行っていたかバレる……

ここは早く調理を終わらせて、証拠隠滅をすれば……

「黎明」を展開して全速力で調理を開始した。

出来上がる頃には証拠は全部隠滅した。

悠「ふう〜。よし俺がんばったぜ。」

自分自身を褒めた。うん。がんばった。

？「ほつ〜ご苦労。」

悠「……………」

ギギギギギ……………首がブリキの様に後ろに向いた。

そこには千冬さんが腕を組んで仁王立ちしていた。

悠「……………千冬さんあと2分経ったら火を止めてください！」

と言いつつ逃げようとしたが、千冬さんに捕まった。

千「逃がさんぞ。最後まで仕事しろ。」

悠「ハイ……千冬さん何時から居たのですか？」

千「朝起きてお前が居なかったからな、探していたら気配を消して歩いているお前を見つけてな。」

跳ぶ瞬間も見られていたって事になりますな……

悠「……すいません」

千「あまりアレを使うなよ。（お前の素性を探ってるやつも居るから気をつけろ）」

千冬さんが小声で話しかけてきた。朝の気配か……

悠「（朝方、見られてた感じがしていたのですが、気のせいじゃなかったんだ……おそらくラウラ辺りでしょ）」

千「（そつだ。今もこつちを監視している。）」

悠「そうですね……よし終わり。」

千「肉じゃがが・・・」

悠「ええ。和食を・・・」

ちなみにメニューは、ほうれん草入り炒り卵と、厚切りベーコン、  
たきたてごはん、肉じゃが、グヤーシユ。

朝食中

ものすごく落ち着かない。

悠「・・・ラウラ」

ラ「なんだ・・・」

悠「何で、チラチラこっちを見ている。落ち着いて飯が食べれない  
よ。」

ラウラがこっちを見ているからだ。

ラ「気のせいだ。それとも見られるようなことでもやっているのか  
？」

悠「・・・」  
「ご飯食べよ。ちf・・・織斑教官に食べられるぞ。」

危うく千冬さんと言いつつになつた。だがそれだけは言っておきたかつた。

千「・・・そうだと、ラウラお前の分まで食べてやるのか？」

ラ「教官！？・・・わかりました。」

千冬さんが出会つた時に言つた「部隊内最強の座に戻してやる」が現実のものになつたから、ラウラは千冬さんの事を尊敬する様になつた。

尊敬より崇拜の方があつてるような気がするけど・・・

兎に角、部隊内最強に戻つたからラウラは千冬さんを尊敬する様になつたとき。

ラウラが渋々、肉じゃがを口にした。

ラ「美味しい・・・相変わらずお前の飯は美味しいな・・・」

ラウラがこつちを向いて聞いてきた。自分で自白してるし・・・

悠「何で作った人物を知っているかわからないが、美味いか・・・」

ラ「う・・・ん」

俺はラウラの頭を撫でてやった。

ラ「何を・・・？」

悠「気にするな・・・ゆっくり食べる。」

ラ「ああ・・・」

悠「（懐かしいな）」

千「ゆ・・・瞬、もう一度模擬戦をしたいのか？」

何故か千冬さんが物凄い気を放ってる。ラウラの頭を撫でているだけなのに・・・

俺は朝食を再開しながら考えた。そろそろ言っておくか・・・

悠「したくないです。そうだな・・・織斑教官が言ったとおりになったし、昼食も俺が作るか？」

ラ「またこの人数を作るのか？・・・俺？」



千「・・・馬鹿者が」

ラウラが俺の発言に何かに感づいて、千冬さんが不機嫌に言った。

ラ「もしか！？ん　っ！」

とりあえずラウラの口を手で塞いだ。

悠「ラウラ、訳は後で話すから、とりあえずここは黙ってくれないか？」

ラウラはコクコク頷いた。

朝食が終わり、人が居ないところに移動・・・現場には千冬さんと俺、そしてラウラ。

悠「・・・という訳なんだ。」

女装していた事、俺自身の事は束さんに拾われた捨て子として説明した。もちろん「アポロン」は伏せた。

ラ「信じられない・・・」

男でISを動かせる者が、しかも千冬さんと同等の実力者が居るのが信じられないのか疑いの目をしている。

悠「目の前に居るのだから受け入れろ。口調とかは日頃から気をつけていたのだがつい飯になると・・・」

千「嘘をつけ、いつも夜に説教しても聞いていないだろ。」

悠「いきなり口調を変えるは無理です。千冬さんだって無理でしょう？」

千「織斑教官だ、それと私に振るな。」

説明して忘れるとこだった。

悠「まゝ改めて。織斑教官、俺、一週間後、旅に出たいんですがいいですか？」

「「旅〜!?!」」

二人ともハモッタ。

悠「ああ。俺自身、これで何ができるか探したいんだ。結構前から

考えてた事だし。」

俺は、腕輪を見ながら、胸に手を置いた。

千冬さんは、俺の顔を見て、何をやっても意志が動かないと感じてくれた。

千「そうか・・・分かった。こちらで何とかしよう、それまではここに居ろ、勝手に行く事はするなよ？ あとこの事は他言無用だ。分かったな。」

悠「わかりました。」

ラ「了解しました。」

敬礼した。納得してくれたと思いたい。

悠「で・・・昼食の件だが、俺が作るが食べたいか？」

千「私は食べたいぞ。」

ラ「・・・私も」

二人とも食べたいらしいな。さて何を作るつか・・・

悠「よし話をつけて来るか。あ、訓練ですが再開しててください。」

千「分かった、楽しみにしておこう。いくぞラウラ。」

その後話をつけて、少し訓練に参加、皆より早めに訓練を終わり昼食の準備をした。

昼食の準備ができ少し待っていた。作りすぎた感じがするが……  
気にしない！

悠「……」

暇だからいつもの歌を歌って待った。

悠「……」

パチパチパチ

歌い終わったら拍手が聞こえた。いつの間にか訓練が終わり皆が居た。

悠「・・・いつから?」

「最初から(だ)」

全員から言われた・・・

悠「声をかけてください・・・」

千「あまりに集中していたからな、声を掛けづらかった。」

顔を見たら微妙に笑っている気がしないでもない・・・

悠「・・・さっさと食べましょう。」

全員の反応は・・・とりあえず辛口のラウラに聞いてみた。

悠「ラウラどうだ?」

ラ「美味い。」

悠「そうか。」

ラ「・・・それで何故頭を撫でる?」

ラウラの顔が赤くなった気がしたが感想言っただけで恥ずかしかったのだろ。

悠「辛口のお前から高評価が出たからかな？まゝ嬉しいからだろ。」

千「……瞬、さっき話してきたら許可が出たぞ。ただ私の滞在期間が少し延びたがな……」

千冬さんに物凄く睨まれた。……俺何かやった！？……たぶん滞在期間が延びたからだろうと解釈。

悠「ありがとうございます。」

千「さて、瞬あとで私とラウラの二人相手の模擬戦だ。」

悠「辞退させてください。」

千「冗談だ。さすがに私も鬼ではない。」

ほっと安心した。が……

千「だがお前だけ他のやつより厳しくする。これは冗談ではないからな。」

悠「……勘弁してください。」

と・・・酷い目にあつた。

一週間後・・・

見送りは、事情の知ってるラウラと千冬さん。

悠「・・・・・・・・じゃ行くよ。」

千「ああ。死ぬなよ。」

悠「物騒な事言わないくださいよ。ラウラ、元気だな。」

ラ「・・・・・・・・ああ。」

寂しそうな顔をしたラウラの頭を撫でてやった。

悠「千冬さんも体を大事にしてくださいよ。」

千「分かったから早く行け。」

千冬さんは少し頬を赤くして言った。

悠「分かりました。」

俺は二人に背を向け歩き出した。

……自分自身何ができるか探すために……



七話 男と旅立ち (後書き)

歌のほうは全部「~~~~」で表現します。

## 八話　旅の準備と旅の後

八話

【旅の準備と旅の後】

旅する前に……まずは！！

悠「東さん！余分な機能外して下さい！」

東「嫌よ〜ゆっくんの歌も聴きたいし、寝言も聞けるし〜」

と東さんの所に「黎明」の盗聴機能を外しに行ったけど、部屋から出てこない……

おいおい、寝言もかよ……しかたないあれを出すか……

俺はお土産を持ってきている……名前の由来が「動かないはずの仏像でさえも、壁を飛び越えて来る」だったかな……？

佛跳牆（ぶつちようしょう、または、フォーティヤオチアン）だ。

結構金が掛かったが作っておいた。いつも眠そうな感じだから薬膳

系の物も入れてある。

火をつけて煮込んだ。いい匂いだ・・・物凄く食べたくなってきた。  
このまま東さんにあげずに俺だけで食べようかな・・・

東「私も食べる〜」

悠「・・・ゲット」

東さんが後ろから声をかけてきた。部屋に逃げないように捕まえて、とりあえず用件だけ言っておこう。

悠「盗聴・・・外して下さい。あと監視カメラとかも止めてください。その間に皿に盛っておきますから。」

東「うん。わかった〜」

準備し終わったら東さんが声を掛けてきた。

東「終わったよ〜。ゆっくんリヴァイブ改造したの？」

悠「ええ。駄目でした？」

東「駄目じゃないよ。よく改造できたね。ついでに名前も。」

悠「ん〜できたからね・・・それで千冬さんに怒られましたよ・・・  
・冷めますし食べましようか？」

東「うん。」

一口食べた。脂ぎっていないスープ、食材の旨み、流石高級スープだけの事はある。

東さんを見たらガツガツ食べている。・・・千冬さん並みに速い。

東「おかわり〜」

その後東さんが殆ど平らげた。

悠「お粗末さまでした。それじゃ〜洗ったら少し旅に出ます。」

東「うん。いってらっしゃい〜」

俺は東さんの所から出て行った。

それから、各国を歩いた。食べ物が不味い国、美味しい国、気温が寒い国、暑い国、「色んな」所を歌いながら回った。

一回だけ髪の水色？の人を助けたことがあったが、二度も会わないだろうと思い、名を語らなかつた。

・・・ただ去るときに見た、あの獲物を見つけた顔は不吉な予感がした・・・

とりあえずカツラと伊達メガネとカラーレンズを買って変装。

その後、たまぐに一夏の所に寄つたりとかしていた。

寄つた際に驚かれたが・・・

それから・・・織斑一夏がISを起動したと言うニュースを見た。

現在レストランで働いている。・・・料理をしていたら、千冬さんから連絡が来た。

千「悠、一夏の事知っているだろ？」

悠「ええ。それが？」

千「それでだ。お前をIS学園に入学させる事になった。因みに拒否権は無いからな。」

とんでもない事言ってきたよ・・・女だらけの所に突っ込めと・・・聞こえはいいが面倒なところに行けと？

一夏も居ると思うが、あいつは天然だから大丈夫だろう・・・何となくだが。

悠「辞退さ・・・」

千「拒否権は無いからな。」

抵抗しても無駄だろう・・・

悠「・・・分かりましたよ・・・」

千「分かればいい。あとお前の職場と政府とかの対応は私と束がやっておいたから安心しろ。」

悠「ありがとございます。って職場まで!？」

皆が何事が聞き耳を立てている。

仕事はどうした？

そして・・・いつの間に話をしたのですか？

千「政府とかの対応が終わってからだ。」

電話越しで何故分かるのかは無視して。

悠「そうですね・・・それで、いつ学園に行けばいいのですか？」

千「お前の入学は突然決まった事だから、明日だ。」

悠「・・・は？明日って日曜日ですが・・・」

千「そうだ。明日の朝、校門で待っているからな。土産楽しみにしているぞ。」

と言が残して切られた。

お土産ね・・・作っておいたアクセサリーでいいか。飾りで少しだけ金がかかったが安い物だ。

兎に角 どの様な対応したか聞いておこう。

悠「料理長、誰かから私の事で連絡がありませんでした？」

「あつたぞ。「長期休暇とらせる」とさ。」

「「え〜」」

と周りからはワザとらしいブーイング、みんな知ってた感じで言ってきた。

「その話はオーナーから聞いているから安心して今日から休んでもいいぞ。」

まあ、偶にでもいいから手伝いに来いよ。」

悠「因みに誰からですか……」

「『然る（さる）お方』ってよ」

悠「猿お方？、優秀な猿が居たんだな……」

猿が連絡か……凄いな・ウン。

「御神……わかつて言ってるだろ。」

悠「もちろん、「それ相応な、身分ある人」って意味でしょ。」



どっちか分からないが・・・恐らく連絡するのは千冬さんだろう。

悠「暇があれば手伝いに来ます。皆に軽い物を作って行きます。」

現在、手が空いているから皆に料理を振舞った。

そしてレストランを後にした。

日用品と服を買わないと・・・

## 八話〱旅の準備と旅の後〱（後書き）

旅の途中は、書くのが面倒だったので書きませんでした。

書いたほうが良かったと思われる方は感想お願いします。

学園編は、慎重に投稿していることと思います。

九話 お土産と模擬戦(前) (前書き)

ヒロインか……考えていませんでした。

九話　お土産と模擬戦（前）

九話

【お土産と模擬戦（前）】

現在・・・学園前。

登校日一日前に来た。

悠「　　」

校門前にスーツが似合う女性が立っていた。

千「誰だ・・・」

悠「・・・ええ！？昨日、連絡くれたでしょ！？」

肩まである青のカツラとメガネを掛けているから、少し分かり難かったのかな？

千「悠！？・・・久し振りだな・・・髪・・・変えたのか？」

悠「・・・カツラですが・・・」

千「は？・・・なんだと？」

驚いていた。千冬さんぐらいなら見破ると思ったのだが・・・

千「荷物はそれか・・・？」

悠「ええ」

バッグと先ほどまで聞いていた音楽プレイヤー、電子キーボードとギターに鍋に・・・壺

悠「そういえば・・・千冬さん、お土産どうぞ。」

俺が出したのは、黒い宝石？の付いた指輪をチェーンに通した首飾り。

千「・・・その宝石はどうした？」

悠「旅の途中、綺麗な石だったから拾ったんですよ。それを加工して首飾りにしたんです。」

盗んできたみたいな感じで言った千冬さんにとりあえず説明した。

千「後でじっくり聞かせてもらおうぞ。」

悠「分かりました。そう言えば千冬さんって付き合っている人って居ました？」

千「居ないが？・・・何故その質問をする。」

少し周辺の温度が下がった気がするが気にしないでおう。

悠「付き合っていたなら、アクセサリ系は諦めて何か別の物にしようと思ったのです。」

付き合っている人が居たのなら、女性に装飾品を渡すのは失礼だろう・・・多分。

千「誰も居ないから貰っておく。」

悠「分かりました。(・・・素直じゃないな)」

少し照れた感じで受け取った千冬さんを見て思った。

千「・・・何か言いたそうだな。」

顔に出ていたか？・・・

悠「気のせいでしょう・・・まあ、気が向いたらつけて下さい。ア  
クセサリーはつけてこそ意味があるんですから。」

千「気が向いたらな・・・今から部屋に案内するついで来い。」

歩いている途中チェーンから指輪を外し、指に嵌めようとしている・

・・・

悠「千冬さん・・・何をしているらっしゃるのですか？」

嫌な予感が・・・

千「折角、指輪があるんだ嵌めれるか試している。」

悠「自分としては試さないでもらいたいのですが……」

千「アクセサリーはつけてこそ意味があるのでは？」

悠「ぐ……物置しておけば……」

千「もう遅い。」

指輪のサイズは大体で作ったから合っていないと思うのだが……  
合っただけじゃない、絶対にからかってくる……

千冬さんと歩いているが、時々女子とすれ違って何か聞こえるが無視。

千冬さんがいる部屋の前で止まった。

千「数日間だけだが、お前は私の部屋で泊まることになっている。  
お、嵌ったぞ。」

悠「……なんですと？」

俺は二つの意味で言った。嵌った事、一緒の部屋の事。聞き違いであって欲しかった。千冬さんを見たら怖い顔をしていた。

千「因みに拒否権は無いぞ、嫌なら外だ。」



どこかで聞いた気が……

悠「分かりましたよ。で、どの指ですか？」

千「これだ。」

薬指……勘弁してくれ。

悠「……似合ってますが、誤解されるので首飾りにしてください。」

俺は素直な意見を言った。

千「当たり前だ。まあ男除けとして使うかもな……そんな話は後だ、荷物を置いたらすぐに移動する。」

悠「分かりました……で、ここが？」

中を見たら……一言で言えば酷い。確か一夏が言っていた、いつもはだらし……

千「外で寝たいか？」

思っていた事をさとられた・・・相変わらず勘が鋭い。

悠「いえ・・・後で掃除をしておきます。」

千「そうか・・・」

荷物を置いて移動した。気になったので聞いてみた。

悠「今からどこに向かっているのですか？」

千「IS訓練用のアリーナだ。旅でどれだけ腕を磨いたか見てみたいからな。」

千冬さんが言った、その言葉に・・・

悠「・・・・・・・・相手は？」

千「私だが？お前と対等に戦えるのは私ぐらいだろ？」

千冬さんはさも当たり前のように言った。

悠「・・・分かりました。黎明使いますか？」

千「調整するのに時間がかかるんだぞ・・・着いたぞ。」

ピットに着いた。そこには緑の髪をショートにした眼鏡をかけた女性  
性が居た。

千「山田くん、待たせたな。こいつが御神 悠だ。」

？「この子が先生の言っていた？」

こちらをマジマジ見てきた。擦れ違った女生徒と同じで、男が珍しい  
のだろう・・・

悠「始めまして、御神 悠と申します。」

山「あ、ご、ご、ご丁寧には明日、御神君のクラスの副担任をす  
る事になる、山田 真耶です。」

ふむふむ、クラスの副担任か・・・副？じゃく担任は？と千冬さ  
んを見た。

千「ちなみに私が担任だ。」

悠「やっぱり……と言うと、あいつも同じクラスか……」

千「そうだ」

大体予想していた。男でISを動かせる人間をまとめて置いたほうが何かと楽だからだろう。

悠「千冬さん、黎明ですが預かるか東さんに渡してもらえますか？」

千「分かった。だが何故だ？」

俺は外しながら言った。

悠「旅の途中……人を助ける為に使ってしまったので……」

千「そうか……だがその話は後だ。時間が無いからISを起動してそこまで歩いていけ。」

言われたとおりIS「アポロン」を展開……そこに歩いていった。

悠「（見る限りカタパルトだな……）」

カタパルトに歩いていくと、足が固定された。

『カタパルトのロックを確認、御神君、発進どうぞ』

山田先生の発進の許可がでた。

悠「さて・・・行くか」

俺はカタパルトに押し出されるようにアリーナの空へと舞い上がった。

3分ぐらいしたら千冬さんが・・・黎明を展開してきた。

・・・スラスタが増えている・・・それに時間がかかるって言うていたのに早すぎだろ。

こんな事ができるのは・・・

悠「もしかして・・・東さんが来たのですか？」

東「そうだよ～～～銃器系を取っ払ってスラスタを増設しました」

千「お前の機体性能が見たいと言って来たぞ・・・」

東さんが明るいう声で、千冬さんはゲンナリした声で答えた。

そして俺は脱力した。

その前に・・・

悠「『少し待つてください。」「リジェネレーション」を切ります。』

「

俺はプライベート・チャンネルで千冬さんに言いながらシステムを切るためにパネルを呼び出し打ち始めた。

千「『再生・・・もしかして、あれか?』」

このIS「アポロン」は「そのシステム」でシールドエネルギーが回復していくのだった。

切ることも可能というのは旅をしていたときに気づいた。

悠「『ええ。詳しく調べようとしたけど分かりませんでした・・・切ることはできましたが。』」

千「『そうか。東には知らせるなよ。』」

悠「『わかりました。・・・システム切りました。』」

千「『そうか。』」

俺は紅い刀身の刀型ブレードを両手に装備した、千冬さんも近接ブレードを出した。

『模擬戦を開始します、始め!』

九話 お土産と模擬戦（前）（後書き）

初めて感想を頂きました。ありがたや〜

嬉しいものです、それを励みに頑張りたいと思います。

メインは・・・千冬さんかな・・・？



十話〈模擬戦（後）と断片と答え・・・と、土産の正体〉（前書き）

これが一番時間を費やした・・・

見直し修正しの繰り返しでしたが、何とか漕ぎ着けました

十話〈模擬戦（後）と断片と答え……と、土産の正体〉

十話

【模擬戦（後）と断片と答え……と、土産の正体】

『模擬戦を開始します、始め！』

千冬さんが瞬間加速イグニッション・ブーストで先制してきた。

千冬さんの斬撃を悉く受け流す、こちらからは……攻撃をしない。

いや……できなかった……

SIDE 千冬

こちらの攻撃は次々受け流し、隙があるのに全く攻撃しない目の前の男・・・悠に苛立っている。

千「悠！なぜ攻撃しない！（こいつ侮辱しているのか？）」

悠「・・・」

こちらの言葉に答えない・・・か。刺激してみるか。

千「これが実戦で、私が敵だったらどうする！？。お前が攻撃しない所為で、他の者に被害が出るかもしれないんだぞ！」

これぐらい言わないと、こいつは攻撃しないと感じた。

言った瞬間、空気が変わった・・・

刺す様な殺気が伝わってきた。

そして悠の目は私を何かと重ねて見ている感じがした。

千「ぐっ！(なっ！？スラスターと展開装甲をすべて瞬時加速に使ったのか・・・!)」

感じた瞬間には両腕とスラスターを全部やられてしまっていた。

殺気がなくなった方を見たら・・・悠はとても悲しい顔をしていた。

・・・こいつにとって勝負とは悲しい、もしくは虚しいものなのか？・・・

シールドエネルギーが無くなり落ちている私を、悠が涙を流しながら受けとめに来ている。

どうやら地雷を踏んでしまったらしいな・・・。

S I D E   O U T   千冬

言われた瞬間、旅の途中で思い出したあの事を言われた気がした。

悠「・・・千冬さん大丈夫ですか？（今度から使用するのは控えよう、体にたいする負担が大きい）」

スラスターと展開装甲・・・全てを瞬時加速に使った反動は、いくら操縦者保護機能で守られているにしても体に負担がかかった。

千冬さんを抱えに行った。

千「・・・ああ。悠・・・泣いているぞ」

悠「え・・・あ」

いつの間にか涙を流していた。

俺はそのまま千冬さんを担いでピットに戻った。俺はまだ涙を流していた。

悠「・・・」

千「悠、何があった？」

千冬さんが痺れを切らして聞いてきた。ずっと涙を流しているから異常と感じているのだろう。

悠「……今から話します。東さん聞きますか？」

東「ん、遠慮する」

悠「それじゃ、黎明を返しておきます。」

東「うん。」

千冬さんは黎明を外して東さんに渡した。

そして東さんはピットから出て行った。

悠「スイマセン、山田先生は……」

千「……わかった山田君……ここに誰も入れないようにしてくれ。」

山「わ、わかりました。」

山田先生が慌てて出て行った。残ったのは俺、千冬さんの二人……

俺は涙を拭いて口を開いた。

悠「旅の途中で……少し思い出したんですよ……歳は忘れましたが……俺は……親父を殺したんです。」

「……」

息を呑んだのが分かった。俺は続けた。

悠「親父は突然会社をリストラされたらしく、酒に嵌ってね……いつも母さんを……そしてたまに俺等を殴っていた……八つ当たりだったのかな……それに対して姉は泣いて、妹は……虚ろな目をしていたよ。俺は止めに入って……姉と妹を慰めていたよ。」

千「もしかして背中への傷は……」

千冬さんが気がついた感じで言った。

悠「ええ。恐らくですが、その時に受けた傷だと思います。」

思い出しただけでも嫌になる……記憶……

悠「あの時・・・いつもより酷かったんだ・・・」

酒が切れて余計暴れだす父・・・

悠「暴れに暴れて・・・母さんの首を締め出したんだ・・・俺は・・・親父を刺したよ。それからは想像通り。」

・・・警察が来て、事情聴取とe t c。

悠「それがあるからかな・・・虐めとか・・・あの目を見ると抑えきれないのは・・・」

「・・・」

千冬さんは黙って聞いてた・・・俺は思い出しながら言った。

悠「俺にとってあの時はそれしか選択肢は無かった。あれしか手が無かったんだ・・・助けるために」

涙を流している母・・・

悠「理不尽な暴力で母さんを死なせたくなかったから・・・。」



時間が無かった・・・

悠「助けを呼んでも駆けつけてくれなかったら？説得しても聞いてくれなかったら、母が死んで居たかもしれない・・・止めようと思っても力が無い俺には止めれない。」

力が無かった、賢くなかった自分が許せなかった・・・不甲斐無い自分が許せなかった。

悠「誰かが言ってたな、「何かを得るために、何かを犠牲にしなければならぬ」・・・と。

しかし・・・

悠「だが殺しは罪だ・・・俺は母を家族を助けるために、一人の人生を終わらせたんだ・・・（「人」って・・・「生きる」って・・・難しいな）」

誰もがある事だと思う、どっちを選んでも最悪な時が・・・それしか選択肢がない時が・・・

悠「あの選択は・・・殺したことは間違ってるが・・・母さんが死なずに済んだ、姉と妹も犠牲にならずに済んだ。だから俺は後悔はしていないと思う。」

要するに、その時・・・選んだことを後悔しないように行動する事ができたか・・・だと俺は思う・・・

俺は途中から涙を流しながら言った。

・・・ニュースでいろんな事が言っていた。仕方がないとか間違っているとか。

周りに助けを呼んでも聞く耳を持たなかったとか・・・それじゃ誰に助けを呼べばいいのか・・・いろんな事を言っていたが・・・

結局は、時間と共に忘れ去られていった。

俺はアリーナの方に歩きながら言った・・・

悠「だから俺は・・・誰かのために誰かを守るために・・・これを使いたいと思う。例えば自己満足と言われても・・・目の届く範囲だけでも守りたい・・・それが・・・旅の中と、過去を少しだけ思い

出して、出した・・・俺の答えです。」

俺は待機形態の指輪を嵌めてある右手を握り締めた。

千「・・・そうか」

千冬さんが一言だが答えてくれた。その心は分からない。

千「だから私を攻撃しなかったのか・・・最悪、傷つけてしまう・・・殺してしまうから。だがそれは「私は」・・・」

千冬さんが戦闘中疑問に感じていたことを言った。そのあとと言う言葉は予想ができたから遮った。

悠「私はそれ以来、勝負もしくは競うものが嫌いになりました。そして姉が「お前は優しすぎる。その優しさがいつか他の者をさらに傷つける事になるぞ」って言われました。その時は意味がわからなかったけど、今は少しだけ理解ができます。時間を割いて私と対戦してくれた千冬さんの顔に泥を塗ったことになったから。」

千「・・・わかった。今すぐとは言わない、ゆっくりでいい、だが確実に直せ。」

千冬さんが俺の気持ちを汲んでくれて言ってくれた。

悠「ありがとうございます……」

俺はピットゲート付近まで行って座った。

「~~~~~」

俺は歌った……今の気持ちを籠めて……俺にとって、「只、気に入ったから」「好きでは無く、「歌詞が好きだから」「好きになった曲。」

俺からは「過去を受け入れる」みたいな感じの歌詞だったから……

何年か悩んで出した答えか……

私でも人を殺めていないのに、こいつは幼い歳で殺めたのか……  
それにより当然周囲の反応も変わる。

非難も中傷もある中、耐えてきたと思う……

千「(優し過ぎるか……)」

一夏の時もラウラの時も、悠は苦痛を感じていたんだな……

殺されてしまうと思う気持ち……感じたことはある……だがこ  
こまで切羽詰った事は無いと思う……

絶望をした目……一夏がそんな目をした事は無い……

千「(苦しみを味わったからこそ、そうなってしまったんだな……  
)」

ただ放っておけない……同じ苦しみを味わって欲しくない。

千「(一夏とは似て否なる強さだな……)」

・・・

悠の歌を聞いて想う。

千「（過去を受け入れて往くか・・・）」

できたら良いな・・・

まだ悩んでいる感じがするが・・・

千「（また話してくれるだろう・・・）」

そう思い歌い終わるのを待った。

悠「~~~~~」

涙を流しながら歌った……前に進むために……過去を受け入れて往くために……

悠「……………」

千「悠……」

歌い終わったら千冬さんがこちらに近づいてきた。

俺は千冬さんの方を向いた。

千「例えどんな答えを……どんな道を選んでも、それぞれが厳しく辛い。だが……」

千冬さんは背を低くし母親が子供を落ち着かせるような感じで、俺を胸に抱きしめ言った。

千「それがお前の道なら往けばいい。」

感動するが・・・。

傍から見たら・・・



実際は苦しい……ハッキリ言って苦しい、心地良いし、千冬さんの心臓の音が聞こえて落ち着く、が苦しい……

千冬さんが前から抱きしめているせいで息ができない。

背中を叩いたけど、まったく気にしていない様子。しかも何故か力を強めてきた……

千「……」

悠「……(千冬さん緩めて〜)」

いろんな意味で危険な状態……少し疲れた……

ぐた……

千「ん？……悠？」

悠「……」

沈黙していた……

千「悠？・・・起きる。」

ビシビシ類を叩かれる。

悠「・・・すう」

千「寝てただけか？」

眠っていた・・・

千「泣き疲れたんだな。このまま部屋に連れて行くか。」

千冬さんは寝ている俺をそのまま抱えた。

向かおうとしたらドアが開いた。

束「いやゝわすれ・・・ちーちゃんとゆっくんが禁断の関係！？それも捨てがたい・・・」

束さんがピットに戻ってきてきて現状を見て言った。

千「違う。そして帰れ。お前は追われているんだぞ。」

束「え〜。それじゃ〜、帰る前にちーちゃんに問題〜 その宝石何処で拾ってきたのでしょうか?」

束さんが千冬さんの首飾りを見て言った。

千「知らん。旅の途中と言っていたが、知っているのか?」

千冬さんが束さんに聞いた。それに対して・・・

束「ずっと何処に居るか探知していたのだけど、途中で反応が消えたんだよね〜。しかもその宝石ね、地球に存在しない物質が含まれていたよ。」

小さな破片を取り出して束さんが言った。

それにたいして千冬さんが何かに気がついた。

千「もしかして・・・こいつ・・・宇宙に行っていたのか?」

束「数日間反応が無かったから、当たっていると思うよ。それにしても探知できない範囲って・・・何処まで跳んで行ってたんだろ〜ね?それに食事も。」

「IS」は宇宙空間での活動を想定して作られたマルチフォーム  
ーツだが、『製作者』の意図とは別に宇宙進出は一向に進まず兵器  
になってしまった「IS」で初めて宇宙進出した者だろう。

千「知るか・・・旅をすると言っていたが、まさか宇宙に行くか普  
通。」

もっともな言葉・・・

束「ん、いつも夕方とか朝方に大気圏まで跳んで行っていたから・  
・綺麗だから行って見たかったんじゃない？」

千「ただ純粹に行つて見たかったか・・・自由奔放ほんほんとい  
うかふき・・あと人の気持ちに鈍い。」

束「だね、だけどそれがいい所だよ。それにしても・・・」

千「それにしても何だ？」

束「まさか、ちーちゃんが・・・いっくん以外の男の子に興味を持  
つとはね。」

束さんが千冬さんを見て意味有りげな顔をして言った。

千「・・・気になるだけだ。用件はそれだけか？」

束「うん！ それじゃ〜見つかる前に退散するね〜」

千「ああ。気をつけるよ。」

そう言って束さんは帰っていった。

千「やれやれ・・・」

そして千冬さんは、俺を抱えて自室に戻った。

十話〈模擬戦（後）と断片と答え・・・と、土産の正体〉（後書き）

「人」、「命」、「生」って難しいですね・・・わかったら苦労しないか。

m この内容は人それぞれなので突っ込まないでください m（――）

実際「IS」で宇宙に行けるのでしょうか・・・わかりませんね。

・・・記憶・・・(前書き)

設定いらなんじゃない？って思い変えました。

・・・記憶・・・

・・・記憶・・・

夢を見ていた・・・何処か遠くの出来事のように見ている。

誰かが右手で持った酒瓶で誰かの頭を殴りつけた・・・酒瓶が破片と飛ばしながら半分に割れた。

再度、誰かが振りかざした。

酔っているのか気が狂っているのだろう、割れたことに気がついていない・・・

そのまま、先が尖り凶器と化した酒瓶を振り下ろした。

ズシャ！

効果音があつたらそんな感じがする位の勢いだった。

誰かを庇っているのか、頭を殴られていた者は背中を切られた。

切られた背中からは血が流れ出し、庇われている者は涙を流してい



た。

再度、殴りつけていた者は振りかざした。

切られた者は落ちている破片を両手に取った。

血が出様が構わず握り振り返った。

その者の瞳は何も映していなかった。

殴りつけていた者が振り下ろした。

それを左に避けつつ、持っていた右手の破片で手首を切りつけて、左手の破片で脇腹を突き刺した。

それだけに留まらず、落ちていた酒瓶の底の破片を右手取り・・・  
首に刺した。

場面が変わった・・・

何処かの剣道場に変わった。

試合をしているのか対戦している。

一目見てわかる実力の差。

相手の攻撃を捌いている。

だけど捌いているだけで攻撃をしない。

相手が苛立ち突きをした。

それすらも回避する。

距離をとった瞬間、相手の竹刀を弾き飛ばした。

巻き技と呼ばれる技らしい……

試合が終わり、勝ったものに誰かが近づいた。

二人は歩きながら何かを言っている。

そして近づいた者は負けた者の方に視線を移した。

気づかれないように……

勝った者も同じように視線を移した。

負けた者は泣いていた。

それを見て勝った者に近づいた者は何かを言った。

それに勝った者が何かを言い返した。

近づいた者は、勝った者の頭を撫でながら何かを言い、遠くを見た。

・・・記憶・・・(後書き)

やっと次回、登校日です。短いようで長かったです。

## 十一話　〜登校日と自己紹介〜

### 十一話

#### 【自己紹介】

目が覚めた、俺はベッドに寝かされていた。昨日千冬さんに絞め技を喰らったんだ。

ふと隣のベッドを見たら千冬さんが眠っていた。

窓を見たら・・・まだ暗かった。今、何時だ？三時・・・！？二度寝が出来ると思ったが・・・。

俺、風呂どうしたんだろう？・・・千冬さんが起きたら聞くか・・・それまでは・・・

ISを展開し、そのまま空に跳んだ。何も無いことを確認してブレードを出し素振りをした。

5時過ぎに部屋に戻り、しばらくしたら千冬さんが目を覚ました。

悠「おはようございます。」

千「おはよう。」



とても冗談に聞こえないんですが……

悠「心臓に悪いよ……ハイ朝食どうぞ。俺は先にシャワーを浴びてきます。」

千「ああ。」

シャワーを浴びて出たら、千冬さんが驚いた顔で此方を見た。

千「髪……切ってないんだな。」

悠「カツラって、言ったじゃないですか。さて俺も食べるか。」

朝食が終わり、弁当の用意をしていた。

千「悠、お前は編入という形式で学園に入ることになっている。で、制服はこれだ。あとこれを読んでおけよ。」

千冬さんが制服と……物凄い分厚い本？を渡してきた。

悠「これは……教本？しかも必読って……」

千「それを頭に入れておけ、あと学園内では織斑先生と呼べよ。」

悠「わかりました。……そろそろ行く時間ですね……着がえるので外で待っていてください。」

千「わかった。」

着がえて外に出たら、千冬さんが頭を見ていた。

悠「……どうしたのですか？」

千「どっちも似合ってるなど……」

照れながら言わなくてもね……威厳あるイメージが崩れてくる……それでも「千冬さん」は「千冬さんだ」。

悠「……ありがとうございます。千冬さんも似合ってますよ。」

俺は千冬さんがつけている首飾りを見て言った。

千「ああ……折角貰ったんだ付けないと失礼だろ。それにしても悠、宇宙に行っていたんだな。」

あ、話逸らした……

何故、宇宙に行ったのが知られてるのだが二つの可能性が思い当たる。

悠「もしかして・・・束さんですか？」

千「そうだ。束が探知していたらしいし、石の欠片も調べたらしいぞ。で？何処まで行ったんだ？束が探知の反応から消えたと言っていたぞ。」

当たりか・・・盗聴器じゃなくて探知系にしたのかよ！

あとで携帯も調べておくか・・・

悠「え」と・・・適当に跳んでいたんで、自分でもわかりません。いや、途中で帰れるか不安でしたよ。」

と言ったら、千冬さんが呆れと怒りが混じった感じの顔で睨んできた。

千「お前な・・・帰れたから良かったものの、帰れなかったらどうするつもりだったんだ！？悠、行くなら月までにしてくれ。」

悠「わかりました。」



と、話しながら歩いていたら、1 - 1に着いて千冬さんが止まった。

千「私が呼んだら入って来い。いいな」

悠「わかりました。織斑先生。」

千冬さんは少し笑った、そしたら教室内から男の声がした。

悠「一夏か・・・織斑先生、一夏の自己紹介を聞いてからにしまし  
よう。」

千「・・・そうするか。」

一「・・・」

教室内から緊張した空気がしてきた。そして一夏が喋った。

一「以上です！」

教室内からずっこける音が聞こえた。

悠「くくく・・・まさかここまでとは・・・」

千「・・・あの馬鹿」

千冬さんが教室に入ってしまった。

そして、教室内から拳骨の音・・・ここまで聞こえるってどれだけ強烈に殴ったんだ？

ー「げ、関羽!?!」

と一夏が武将の名前を出した・・・しかも男の・・・

悠「くくく・・・はーははっはははー!!」

俺は腹を抱えて笑った。一夏・・・まともな名前ぐらい浮かべるよ。

悠「あーはははははは」

教室のドアが開いて、千冬さんがこっちに歩いている。嫌な予感だ。

千「・・・五月蠅いぞ。さっさと入れ。」

千冬さんが呆れた感じで言ってきた。拳骨がこなかったただけマシか。  
入った瞬間全員の目がこつちに向いた。一夏は頭を抑えながらだが。  
・  
・

悠「久しいな、一夏。せめてマシな呼び方しろよ。」

一「・・・悠か！久しぶりだな・・・てか、悠ならどんな呼び方するんだ？」

悠「俺か・・・俺なら・・・」

呆れた感じで俺が一夏に言ったら、お返しとばかり一夏が俺に振ってきた。

ここでしくじったら、一夏2号のレッテルを貼られそうだ・・・だから真剣に考えた。

何故か全員黙り込んだ。千冬さんも何を言つか待っている。

悠「俺なら、アウロラかジャンヌ・ダルクかな。ちなみにアウロラは何処かの話で、オーロラの名の由来になった女神の名前だったはずだ。綺麗だし、凛々しいからな・・・まあ、最後には織斑先生になるんだけどな。」

と言ったら、全員が啞然とした。俺しくじったか？まさか……  
一夏2号に？

一「く……俺だけか千冬姉を関羽なんて言うのは「ズバン！」イ  
ツテエ！……」

一夏が悔しがっているのか、恥ずかしがっているのか判らないが、  
呻いている所を出席簿を持った千冬さんが一夏の頭を襲った。

千「お前もそれぐらい考えろ……あと織斑先生だ。」

よく見たら千冬さんが頬を赤くしている……調子が悪いのか？

とりあえず一夏2号にならずに済んだようだ。

悠「……多分一夏だけだろ？織斑先生。俺の自己紹介は最後で構  
いませんので、先にどうぞ。」

千「あ、ああ。」

千冬さんを含め全員の自己紹介が終わった。

ただ千冬さんのときだけ女子が異様にテンションが高かったのは……

・ご愛嬌だろ。そして最後・・・俺の番になった。

悠「御神 悠です。長いようで短い三年間ですが、宜しくお願いします。趣味は・・・料理です。」

と自己紹介したら少しざわついた。

「女の子？」「女子？」

誰かが聞いてきた。

悠「違う！男だ。」

言った瞬間荒れた。

「きゃあああああああ！！男の子が2人もクラスに！！」

「神様有難う！！」

「ひゃっほ~~~~~！！」

・・・最後の叫び方間違ってない？

五月蠅いので耳を防いだ。千冬さんを見たらやれやれって感じだった。

千「五月蠅いぞ！」

一瞬に静かになった。流石

千「わかればいい。御神の席は、織斑の隣だ。」

悠「わかりました。」

向かっている途中……

一「ちf……織斑先生、その首飾りどうしたんですか？」

一夏が目聡く気付いた……そのまま千冬さんと言えば良かったのに……

千「これは貰い物だ、似合っていないか？」

一「似合っているが……誰に貰ったんだ？」

千「聞いてどうする？ちなみに興味本意で聞いた・・・とは言わないよな。」

千冬さんが、睨みを利かせて一夏に言った。

俺は席に着いた。

一「えつと・・・その・・・」

恐らく興味本意だろう・・・焦っている。何を言っても殴られると思っから・・・

俺は焦っている一夏に言った。

悠「一夏、言ったほづが楽だぞ。」

一「・・・千冬姉にも春が「ドゴーン!!」『黙れ！そして織斑先生だ。』」

ドゴーンって・・・

思いつきり出席簿アタックが炸裂し、一夏が気絶した。

その光景に辺りは静かになっていた。

このまま静かなら有り難い。



十一話、登校日と自己紹介、（後書き）

千冬がこんな感じになってしまった。

ファンの方々、気にせず読んでくれる事を祈ります。

## 十二話〜セシリア・オルコットの自己紹介〜

### 十二話

#### 【セシリア・オルコットの自己紹介】

自己紹介が終わり、休み時間……

俺は、復活した一夏に話しかけた。

悠「まさか一夏がISを動かすとはな。」

一夏が何故「IS」を動かしたか話してくれた。

一「……で、触ったら反応したんだ。」

悠「災難だったな。」

一「まあな。そう言えば……悠は何処に居たんだ？」

悠「何処って……世界を転々と旅していたよ。一夏は俺が居ない間どうだった？」

一「俺は普通に過ごしていたよ。」

一夏と喋っていたら、黒い髪を後ろで束ねた女子がやってきて、話しかけてきた。

？「・・・少しいいか？」

一「構わないぞ、箒。それじゃあ、悠、行ってくる」

悠「ああ。行って来い。」

俺は手を振って一夏を送ってやった。

一人になったから千冬さんに渡された分厚いテキスト（俺からしたらデカイ教本）を開いた。

頬杖し、指をトントンしながら見だした。

さすがに周りに女子が居るのに、鼻歌しながら読むわけにはいかない。

その間、廊下とか教室の端のほうから「絵になるわね」やらそんな言葉が飛んでいた・・・気がする。

休み時間が終わり、早速授業が始まる。

真耶さんが教鞭をとっている。

言っている内容は、ISを動かしていたから何となく理解できる。

ふと一夏を見たら・・・何故か顔が青くなってる。

山「ISに関する説明はここまでです。この時点で何か質問はありますか？え〜と御神君、何か質問はありませんか？」

悠「ありません。」

俺は質問する事は無いので言った。

山「じゃあ織斑くん、何か質問はありますか？」

同じ男だからか一夏を指名にした。してしまった。

一「えっと・・・あの・・・その・・・」

悠「（ん？・・・まさか一夏・・・覚えていないとか？・・・それとも読まずに捨てたとかか？）」

俺が一夏の様子を見てそう思った。

質問したくても、内容が理解できていないから質問できない・・・一言で全部分かりません、みたいな感じだからだ。

観念したのか一夏は小さな声で答えた。

「全体的に解りません……」

山「へ？」

悠「おい……」

もう一夏はヤケクソ気味に言う。

「全体的に解らないんです」

ソレを聞いた真耶さんは唸るような声を上げた。

山「ぜ、全部……ですか……」

「はい……全部です……」

悠「（やっぱりか……）」

その言葉に千冬さんが一夏に語りかける。

千「織斑、お前、入学前に読むテキストを読んでいないのか？」

その質問に一夏が答える。

一「ああ、あの分厚い本？ 読まずに雑誌と一緒に捨てたけど？」

悠「……」

やっぱりかよ……ここまで当たると笑いを乗り越して呆れてくる。

その一夏の言葉を聞いた瞬間、千冬は強烈な拳骨の一撃を一夏の頭に見舞った。

一「イツ!？」

千「馬鹿者！ あれに必読と書かれていただろうが。再発行してやるから一週間以内に覚えろ、いいな。」

これを一週間以内か……何とかなるだろ。

一「一週間であの厚さは……」

千「ヤレ」

一夏が抗議しようとしたが、千冬さんの一言と睨みで撃沈した。

千「御神、読み終わっても貸さなくていいぞ。」

俺が一夏に言おうとした事を口から出る前に潰した。まさに「出る杭を打つ、出そうな杭も打つ」だ。

悠「・・・なぜ言いたい事が解るんですか・・・」

千「何となくお前なら言うと思ったからだ。」

相変わらず勘が鋭いと思った・・・

授業が終わり休み時間。

悠「なあ。一夏よ、物はちゃんと見て捨てるよ。」

一「ぐ・・・」

俺はテキストを見ながら、一夏に思った事を口にした。

「何で悠は指をトントンやってるんだ？」

一夏は俺の指を見て言ってきた。

悠「ん？ああ。音楽が聞けない時にやってたから癖になってるんだ。」

俺は再度本に目を戻した。

？「ちよつとよろしくって？」

「はあ？」

悠「・・・」

一夏が誰かの言葉に反応した。俺は・・・無視した。

？「まあ！？ 何ですの、そのお返事！？ 私に話しかけられるだけでも光栄なので、それ相応の態度と言つものがあるのではないのかしら？」



光栄ね……。

見下した感じで言われて、光栄とは思いたくない……

？「あなたにも言ってるのですよ！」

俺にも言っていたのかよ。

—「悪いな……俺、君の事知らないし……」

悠「……興味無い。」

—夏と俺が言ったら。話しかけた少女は、最初は信じられないみたいな顔をし、俺の言葉で怒りだした。

？「まあ！？ 私を知らない！？ セシリア・オルコットを！？ イギリス代表候補生、入試首席の私を！？ しかも興味がない！？」

—「なあ、一つ質問いいか？」

—夏がセシリアに質問した。何を聞くんだ？

セ「ハン、下々の者の要求に答えるのは貴族の務めですわ。よろしくてよ」

オルコットは優雅な振る舞いで一夏の質問に答えようとする。

一夏は真剣な顔で質問した。

一「代表候補生って……何？」

その瞬間、聞き耳を立てていた周囲の女子は盛大に転び、オルコットは転びそうになるのを自前の優雅さで何とか押しとどめた。

俺は無視してテキストに目を通している。

セ「し、信じられませんわ!？」

その後、オルコットが言っている事をほとんど無視した。聞いていたら怒ってしまうと思ったからだ。

セ「　　幸運なのよ。その現実をもう少し理解していただける？」

やっと終わったのか。代表候補生の説明でどれだけ時間割いている

んだ？

「そうか。それはラッキーだ。」

悠「そうか。一夏、宝くじでも買いに行こうぜ。」

一夏に言った。

「駄目だぞ、幸運を使ったから当たらない。」

悠「そうか。それは残念だ。く……一緒になる前に買っておけば……」

本を見ながら真剣に答えた。

セ「馬鹿にしていますの？」

悠「するか！これでも大真面目だ、逆に幸運返せ！」

セ「大体」

って俺の言葉無視して喋りだしたよこの人……

しかもまだ喋るつもりかよ……本でも見るか……

—「悠・・・悠」

悠「ん？・・・ってまだ話していたのか・・・でなんだ？」

俺は本を置き一夏に聞いた。

—「悠は入試のとき教官と戦ったか？」

悠「ああ。それがどうし・・・」

チャイムが鳴り響いた。助かった。

セ「お話の続きはまた改めて、よろしいですわね！」

と言いつつ席に戻っていった。

悠「俺は遠慮したいな。」

—「悠、どうした？」

悠「何でもない。」

俺は一夏に言っ  
て本を枕代わり  
にした。

十二話〈セシリア・オルコットの自己紹介〉（後書き）

やっと纏まった感じがします。

## 十三話　～クラス代表とセシリアの抗議～

十三話

【クラス代表とセシリアの抗議】

そして三限目の時間、再来週のクラス対抗戦のクラス代表を決める事になった。

クラス代表は委員会とかの出席とか、まあ面倒な役職って事だな。

悠「（俺以外がやれば問題ない。）」

「先生、代表は織斑君がいいと思います！」

一人の女子の発言に他の女子も同意しだした。

悠「（グッジョブ！良くぞ言った。）」

俺は内心ガッツポーズをした。

—「い！？ 何で俺！？」

—夏が慌ててそう言うが周りの雰囲気が一夏が代表でいいだろうと  
言う雰囲気になっていた。

慌てた一夏は苦し紛れにこう言った。

—「先生！ 俺は悠を推薦します！！」

悠「おい・・・一夏、道連れとは卑怯だぞ・・・」

—「悠・・・旅は道連れ、世は情けだ。」

悠「何が情けだ・・・一夏め・・・覚えておけよ。」

俺は一夏を睨みつつ言った、が。

周りの女子もソレもアリかも、と言う雰囲気になる。

セ「納得がいきませんわ！！」

そんな雰囲気打ち破る様にセシリアが叫ぶ。

セシリアは勢いよく立ち上がり言い放つ。



セ「その様な選出は認められませんわ！ 男がクラス代表なんていい恥曝しですわ！」

俺は少しカチンときたが我慢して、隣の一夏を見たらムスツとしていた。

さらにセシリアの言葉は続く。

セ「この様な屈辱をこのセシリア・オルコットに1年間味わえとおっしゃるのですか！？ 物珍しい理由で極東の猿にされては困ります。大体、文化としても後進的な国で過ごさなけ「誰が猿だ？ 金髪ドリル！」き、き、き」

俺は怒りを発散するため会話の途中で口を開いた。

セシリアが何か言う前に立ち上がって睨み付けて言った。

悠「さつきから黙って聞いていれば、文化としても後進的？」「  
世界一不味い飯で何年覇者になってるか分からない、イギリスの奴に言われたくないな。」「

途中で一夏が立ってハモツタ。

悠「一夏もか！」

一「悠もか！」

「考えることは一緒か　まずい飯より和食だろ。」

と俺と一夏がハイタッチをした。

俺らの態度にセリシアが切れた感じがした。

セ「あ、あ、あ、貴方達！！　我が祖国を侮辱しますの！？」

悠「・・・そこまでにしろ！」

俺が言う前に、千冬さんが止めに入った。

俺の雰囲気いち早く感じたのだろう。

千「まったくお前等はガキか・・・対戦でクラス代表を決める。」

千冬さんが解決策として提案した。

セ「私は構いませんわ」

「俺も構わないぜ。四の五の言つより解りやすい」

千冬さんの言葉にセシリアと一夏が反応して言い放つ。

「で、ハンディはどの位つける？」

一夏の質問にセシリアは鼻で笑い飛ばしながら言つ。

セ「あら、早速お願いかしら？」

その言葉を否定する様に一夏が言つ。

「あ、いや、俺がどの位ハンディをつけるのかなと」

悠「一夏、お前はIS動かしてまだ間もない、ハンデ無しでやれ。で、俺は参加しない方が良いのか？」

セ「あら、あなたは負けるのが分かっていらっしやるようですね？」

オルコットの人を見下した態度に少しカチンときた。

悠「・・・織斑先生・・・どれ位手加減したらいいのかわからないので決めてもらえませんか？」

俺の発言に周りが反応した。

「御神君それ本気で言っているの？」

「男が女より強かったのって大分昔の話よ。」

「さすがにそれは言い過ぎよ。」

その言葉にいち早く千冬さんが反応した。

千「静かにしろ！悠、抑えろ・・・織斑、お前がオルコットと戦え。御神は絶対にやるな。」

悠「わかりました。・・・織斑先生。」

千「なんだ。」

悠「ありがとう、止めてくれて。」

千「お前がやると面倒だからだ。」

俺は千冬さんに二つの意味を込めて礼を言った。

周りを止めてくれたこと、戦闘のこと・・・頭が上がらないな。

俺は気を抑えてイスに座った。

「千冬姉！何で俺だけ！？」ズバン！！」いってえ！？」

一夏が抗議の声を上げたと同時に出席簿アタックを食らった。

千冬さんは面倒な感じで説明をした。

千「織斑先生だ。御神がどんなハンデを付けてやってもオルコットは絶対に勝てない。まだ私の方が夢で勝てるだけマシだ。」

千冬さんの言葉にセリシアが噛み付いた。

セ「そ、それはどう言う意味ですの！？」

その言葉を千冬さんは無慈悲に切り捨てた。

千「言葉通りだ。御神の實力は全盛期の私以上だ。ハッキリ言ってお前では、夢の中ですら勝てない。対戦したら良くて瞬殺、悪くて廃人だ。」

どっちも最悪・・・その言葉にセシリアが顔を青くして押し黙った。

ここまで言われればいつそ清々しい・・・のか？

・・・あと最後のは、事実だが少し言い過ぎだ。

千冬さんの言葉で周りはかなり動揺している。

「う、ウソ・・・あの千冬様の全盛期より上？」

「公式試合で負けたことがない、織斑先生より・・・？」

「モンド・グロツソで総合優勝を果たした世界最強のIS操縦者、織斑先生より・・・？」

「結果どっちも最悪じゃない・・・？」

その中で一番の衝撃を受けたのが一夏だった。

一夏が俺のほうを見て千冬さんに質問した。

「そ、それは本当か！？ちふゆね「スパーン」イッテ〜！」

出席簿でスパーンって・・・スリッパの様な音になってるが、一夏

はまた叩かれた。

千「織斑先生だ。学習しろ。」

千冬さんが一夏を叩いて、オルコットに言った。

千「オルコット、機体の微調整しながら戦えるか？」

その言葉にセシリアが息を呑んだ。

セ「そ、そんなの無理ですわ！」

セシリアが俺を見ていった。

千「だが御神はそれをやっている。」

セシリアが信じられないって感じで俺を見ている。

全員は啞然としている。

戦いながら調整なんて阿呆だと思っているのだろう……

「夏が何か思い出したらしく俺を見て聞いてきた。」

「『そう言えば悠、教師との模擬戦闘は勝てたのか？』」

悠「ああ・・・昨日の模擬戦か・・・」

昨日の事を思い出した。

千「そうだ・・・」

「『ちf・・・織斑先生、結果どうだった？』」

「夏が気になる事を聞いた。」

全員が息を呑む・・・

千「対戦相手は私だ。結果は瞬殺だ。」

セ「当然ですわ。さすがに織斑先生には・・・」

千「オルコット・・・お前さっき話した事忘れたのか？私が瞬殺されたのだ。」

勘違いしているセシリアに千冬さんが言った。



「「「は?」「」」

その言葉にクラスは一斉に言った。

「ちふ「ゴン!」織斑先生・・・本当なのですか?」

「夏が拳骨を食らいつつ、俺のほうを向いて聞いてきた。

千「本当だ。ただし機密情報が入っていたので記録の方は消さして貰ったがな・・・」

千冬さんが俺の方を見て言った。

千冬さんに釣られて「夏が俺の方を見て口を開いた。

「悠・・・千冬姉より強かったのか?」

俺はその質問にどう答えたらいいか少し迷って答えた。

悠「・・・操縦技術が巧いだけだ・・・俺は・・・弱いさ・・・」

「??.??.」

千「.....」

俺の言葉に一夏は首をかしげた。

俺は未だに読み終わっていないテキストを読み出し、授業が再開されるのを待った。

#### 十四話「発言と匂い効果」(前書き)

然るお方より貴重な意見を頂きました。

決して猿お方ではないので・・・間違えの無いように

読者の方々何度も修正して申し訳ありません。

## 十四話　発言と匂い効果

### 十三話

#### 【発言と匂い効果】

その日の放課後、帰ろうとした所を一夏に捕まった。

昼の時は弁当を持ってきていたので、周りから逃げるため千冬さんのところにお邪魔していた。

一夏は……知らん。

放課後、逃げる前に見事、一夏に捕まった。愚痴を聞いていたら山田先生が入ってきた。

どうやら一夏の部屋が決まったらしい。

悠「山田先生、私の部屋はどうになりましたか？できたら一人がいいのですが……」

山「え〜と。御神君の部屋はあと2、3日待つてください。それま

「（ギロ！）一人でお願いします。」はっはい！」

山田先生が余計なことまで言いそうになったので睨みを利かせて要求を言った。

悠「ありがとうございます。山田先生・・・（ハッ！？）」「ビュン！」危ないですね。」

嫌な予感がしたから移動した。後ろから千冬さんが拳骨を放っていた。

千「教師を脅すな・・・（そんなに私と同じ部屋が嫌か？）」

千冬さんが注意しつつ、俺の耳を引っ張り小声で喋ってきた。

悠「織斑先生、耳が痛い！引っ張らないで！・・・イテテ・・・（一緒だと落ち着きませんよ！）」

耳が解放されて、俺も小声で喋った。その光景に一夏が発言をした。核爆弾なみの一言を。

一「なあ。悠と千冬姉って付き合っているのか？」

教室中が静かになった。嵐の前の静けさって感じた。

俺は千冬さんと一瞬のアイコンタクトをして、一夏に冷やかな目を  
をして言った。

悠「織斑先生。」

千「なんだ。」

悠「一夏と死合い（しあい）してもいいですか？」

千「かまわん。だが殺すな。生かさず殺さず後悔するぐらいヤレ！」

悠「わかりました。」

その言葉のやり取りに一夏がガタガタ震えて土下座しそうな勢いで  
頭を下げた。

周りも震えていたが、一夏が一番震えていた。

一「悠、千冬姉、御免！御免なさい！赦してください！！お願いし  
ます！！！」

「お前がアホな事を言うからだ！」「それと織斑先生だ！」

ゴン！

俺と千冬さんが綺麗にハモツリ、千冬さんの拳骨が炸裂した。

その後・・・食堂の時間帯、と大浴場が使えないことを聞いて一夏がまた一言。

一「え、どうして使えない？」

悠「一夏・・・同年代の女子と一緒に入りたいのか？」

一「入りたくないわ！」

その台詞に山田先生が余計な一言。

山「織斑君、女の子に興味がないんですか！？」

悠「ハア・・・織斑先生、部屋に行ってもいいですか？」

相手にするのが疲れたから千冬さんに言った。

千「ああ。用件は終わったからな。」

俺は荷物をまとめて教室を出た。後ろで女子が一夏の事で何やら言っていたが無視した。

その夜・・・

俺は部屋に戻って掃除をして、料理（煮込んでいるだけだが）をしていた。

東さんにも食べさせた、佛跳牆だ。

悠「~~~~~」

良い匂いだ・・・

千冬さんが来るのを待っていたら、廊下から・・・

スパパパーン、ドドドドドド・・・

結構な人数が叩かれる音と走り去る音が聞こえてきた。

ドアが開いて千冬さんが呆れた顔で入ってきた。



千「この匂いか・・・」

悠「どうしたんですか？」

千「この匂いに釣られて、この部屋の前に大量に人が居たぞ・・・」

悠「東さんもこの匂いで出てきたからね・・・ハイどうぞ、千冬さん。オルコットの件助かりました。」

俺は皿に盛って千冬さんに渡してあげた。

千「ああ。オルコットの件か・・・気にするな、とは言わないがこれからは我慢してくれ。それでこれは何て料理だ？」

悠「佛跳牆です。乾物を主体とする様々な高級食材を数日かけて調理する高級スープです。」

千「・・・幾ら掛かった？」

千冬さんが聞いてきた。

悠「いくらだっけ？・・・数十万は軽く掛かってますね。」

千「掛けすぎだ・・・」

千冬さんは呆れた声で言った。

悠「大丈夫ですよ、これが最後の贅沢ですから食べてください。薬膳系の物も入ってるから、疲れてる体に良いと思うよ？千冬さんは結構無理してる感じがするからね。」

千「・・・美味しいな。」

悠「口にあってよかったよ。・・・あ。」

千「どうした？」

弟思いだからな・・・言うておくか。

悠「一夏にも持って行く？」

千「・・・少しだけだぞ。」

悠「それじゃあ、一夏の分を皿に除けておいて、俺の分も・・・千冬さん速いよ。」

俺が自分の分を盛ろつとしたら、残り少ししかなかった。

千「・・・美味しいのが悪い。」

千冬さんは頬を赤くして言った……この人は……

俺は自分の分を盛り食べた。

悠「美味しいな……ご馳走様。それじゃあ一夏の所に持っていきま  
す。」

千「わかった。」

俺は一夏の部屋に行ったら、ドアに穴が開いて修羅場みたいな感じ  
だったが、無事スープを渡し部屋に戻った。

戻ったら……千冬さんがベッドに座り缶ビールを飲んでいた……

悠「千冬さんお酒飲むんですね。」

千「ん？ああ。私だって飲むさ。……悠、何か歌え。」

いきなり注文してきた。……仕方ないな。

悠「わかりましたよ。シャワー浴びてからでいいですか？」

千「わかった。早く出て来いよ。」

シャワーを浴びて髪を乾かし出てきたら・・・空の缶が3本、そして4本目の缶を開けて飲んでいた。

悠「千冬さん飲みすぎですよ。歌うからそれで最後にしてくださいよ。」

俺はキーボードを取り出しながら言った。

千「わかったから、早く歌え。」

微妙にイントネーションがおかしい、酔いが回ってるな。

悠「~~~~~」

弾きながら歌った。暫くしたら千冬さんが、目を瞑り揺れている・・・  
・寝ているのか、音楽を聴いているのか判らない・・・

悠「~~~~~（しょうがねえな）」

そのまま歌い続けた。

悠「　　」

三曲ほど歌ったら千冬さんはぐっすり眠っていた。

久しぶりに伴奏有りて歌ったから自分も満足した。

悠「（寝ていると・・・可愛いな）」

俺はキーボードを置いて、千冬さんをベッドに寝かし布団を被せた。

千「すう」

寝顔を見たらどこか満足した顔だった・・・

悠「・・・おやすみなさい。千冬さん。」

俺は厚いテキストを読んで寝た。



#### 十四話の発言と匂い効果（後書き）

ギリギリ、投稿できた・・・頑張った。

プロローグから14話＋設定まで修正しました・・・。

（主な変更・・・束フラグ潰し、IS設定を少々変更しました。○  
内の文は数日したら削除します。）

今まで読んでくれていた方々、何度も変更してしまい申し訳ありません。

## 十五話　訓練と癖

十五話

【訓練と癖】

目が覚めた・・・朝の5時過ぎ

とりあえず寮のキッチンで朝食の準備をした。

働いていた所よりも若干設備が新しいかったが使い難くはなかった。朝食の準備を終え部屋に持って行き、ヘッドホンをして音楽を聴いていた。

しばらくしたら千冬さんが起きた。

悠「・・・おはようございます。千冬さん」

千「・・・おはよう、悠」

どこか眠たそうだ・・・



悠「ご飯食べる前にシャワーでも浴びたらどうです？」

千「・・・そうする。」

悠「あと私は自分の分を作っていないので、このまま食堂に行くつもりです。」

千「・・・分かった。」

俺は千冬さんを促し、食堂に行った。

一夏と筧が飯を食べていた。

悠「一夏、篠ノ之さん、この場所いいか？」

一「いいぜ。」

筧「いいぞ。」

二人の了解を貰ったから、座り食べ始めた。

悠「・・・眠い」

夜遅くまでテキストを読んでいたから眠たかった。

「そう言えば、悠はどこで寝てるんだ？」

悠「・・・部屋が決まるまで・・・千冬さんのところだ。」

事実を言った。

「そうか千冬姉のところか・・・災難だな」

悠「そうでもないさ、ベッドがあるだけ嬉しいよ。」

篝「・・・御神、今までどこで寝ていたんだ？」

今まで黙って食べていた篠ノ之さんが口を開いた。

悠「一夏にも言ったが、世界中歩き回ったからな・・・たまに野宿  
って時もあったよ。」

篝「世界中って・・・親とかはどうした？」

誰でも気になることを言ってきた。十五歳満たない子供が世界中を  
歩いているんだ、気になるだろう。

悠「俺は・・・捨て子みたいな感じだからな・・・」

近からず遠からずみたいいな曖昧な感じで言った。

篝「すまない・・・」

篠ノ之さんは罰が悪そうな感じで謝った。

悠「気にするな。それよりも一夏、昨日のスープどうだった？」

一「美味かった。なあ篝？」

篝「あ、ああ美味しかったぞ。」

篠ノ之さんの方を見たら何故か顔を赤くしていた。

深くは追求しないでおこう。

悠「そうかよかった。よし、ご飯食べよう。」

一「そうだな。」

篠ノ之さんの方を見たらもう食べ終わっていた。

その後クラスの人に来て、入れ替わりに篠ノ之さんが先に行ってしまった。

その時一夏が篠ノ之さんと幼馴染と言う事を知り、ついでに・・・

千「私は一年の寮長だ。遅刻したらグラウンド10周させるぞ。」

ええ〜〜。

と思いつつ教室に移動した。

その日の放課後・・・第4アリーナにて

周りには誰も居ない・・・

悠「織斑先生、つき合わせてすみません。久しぶりに自主訓練したかったので助かります。」

俺は自主訓練がしたいからと言う自分勝手な理由で、アリーナに入らない様にしてもらっている。

千「気にするな、お前が旅の途中でどんな自主訓練していたか見ておきたいからな・・・始めて構わないぞ。」

悠「分かりました・・・さてと・・・」

俺はアリーナの中央に行き、ブレードを展開し構えた。

目を閉じ・・・目の前に相手が居ると、イメージし・・・

悠「・・・やるか。」

目を開き、俺はスラスター2機と展開装甲を残して、他全部のスラスターとビットをパージした。

そして、周囲を飛び廻り・・・俺目掛けて攻撃を開始した。

それを両手のブレードと足のブレードで弾き、時には回避し、装甲で受けるのを繰り返した。

S I D E I N 千冬

千「あれが・・・自主訓練だ・・・」

ビット攻撃を回避または展開装甲と手足のブレードで防いでいる悠を見て思った。

千「（何て平行処理だ・・・全部の誘導兵器を操り、しかも自分が逃げ難い所について攻撃している。）」

しかも時々余分な回避行動を取っている・・・観察していたら誰かと戦っている様な行動をしている気がする。

千「(・・・あれは私か?)」

明らかに異常・・・自身を打ち落とす攻撃をしながら、それを防ぎ回避すると言つ矛盾な行動に寒気を覚えた。

・・・アイツは一夏に・・・「それでも俺は弱い」と言っていた・

千「(それ以上強さを・・・力を求めて意味があるのか?・・・何で自分を追い詰めるんだ?・・・何で一人でやるうとするのだ?)

・・・そこまでしないと駄目なのか?)」

疑問だらけだが、喋らないから本心が分からない。

見ている方が辛い・・・だが知りたい

千「(知りたい悠の過去を・・・)」

その後どうなったのか・・・

千「（知りたい失った過去を・・・）」

何故追いつめるのか・・・

千「（知りたい悠を・・・）」

悠を・・・

・・・

束（いっくん以外の男の子に興味を持つとはね〜）

束が言ったとおり、出会った時から少々・・・気にはなっていた・・・



・

今は、気になっていると言うより・・・知りたいと思っている。

千「（「その異性を知りたいと思ったら、それは恋をしている」と、誰かが言っていたが・・・あながち間違いではないな。」）

・・・ただ知りたい。

千「（・・・ああ、これが恋か・・・）」

・・・

千「（いつか、話してくれるだろう。）」

いつか・・・

千「ふう〜・・・（アリーナを閉める前にまたデータを消さなければいけなくなっただな・・・）」

時間ぎりぎりまでやって戻ってきた悠を見て思った。

S I D E O U T 千冬

悠「・・・」

ピットに戻ったら、千冬さんが辛そうな顔をして待っていた。

悠「織斑先生どうしたのですか？」

俺は機体を待機状態に戻し話しかけた。

千「悠、いつもあんな事をやっていたのか？」

あんな事？・・・さっきの事か。

悠「いつもじゃないですよ。疲れている時とかはしませんし、ここ半年間はやってませんでしたよ。」

事実、仕事とかで疲れていてやっていなかった。

千「そうか。だが私の前であればやめてくれ・・・」

千冬さんは辛い顔をして言ってきた。

悠「・・・わかりました。そんな千冬さんの顔を見たくないですから。」

千「・・・織斑先生だ。あと何故頭を撫でる？」

俺は千冬さんの頭を撫でている。

悠「・・・癖なんでしょうね。慰めるのによくやっていたから・・・  
悲しい顔とか辛い顔とか見たくないんですよ。」

姉や妹にたいして、やっていた様に・・・

千「・・・そんなに酷い顔だったか？」

悠「少しだけです、あと・・・」

千「あと、何だ？」

悠「千冬さんを撫でたかったから？」

千「・・・殴っていいか？」

いつもの調子に戻った様だが・・・とりあえず千冬さんから離れた。

・・・どうやって收拾しよう・・・

悠「いつもの千冬さんになりましたね・・・」

千「そうか。だが一発殴らせろ。」

握り拳をしてるし・・・

悠「暴力反対ですよ。織斑先生。」

千「大丈夫だ。まだ殴ってないし、痛くないぞ。」

ドアが開いた。

山「織斑先生。こちらに居ましたか。つてみ、み、御神君!？」

俺と千冬さんが二人で居る事に驚いている感じだ。

悠「山田先生。織斑先生に用事があったのでは!？」

この状況を打破すべく山田先生の話に賭けることにした。

山「あ、そうでした。(織斑先生。織斑君の専用機の件で……)」

千「(ああ、わかった。)」

何かひそひそしている。

千「悠、今日は夕食作らなくていいぞ。」

悠「わかりました。山田先生と食べるのですか？」

とりあえず聞いてみた。

千「ああ、そうだ。お前もクラスのやつと食事でもしろ。」

悠「気が向いたら食べますよ。汗かいたのでシャワー浴びに一度部屋に戻ります。」

千「そうしろ。」

何とか危険を回避した。

シャワーを浴びに戻って夕食の時間……

ボロボロの一夏を発見……隣は不機嫌な篤が居た。

悠「何で一夏はボロボロなんだ？」

篤「軟弱だからだ。」

これまた不機嫌に答える。

悠「一夏って剣でも振っていたのか？」

一「ああ、千冬姉に齧<sup>かじ</sup>った程度。」

箒「それと私の家がやっていた道場に通っていたんだが・・・」

道場か・・・何か剣術流派みたいなものがあるのだろう。

ポロポロの一夏と箒の不機嫌を見て予想を口にする。

悠「いつの間にか弱くなっていたから不機嫌になっていると？」

箒「そうだ。」

気になる男が、気がついたら弱くなっていたか・・・箒からして嫌なのだろう。

悠「そうか・・・一夏、がんばれ。」

一「おお・・・」

なんか死んでないか？気にしないでおう。

悠「まあ、本当は二人同時に相手しろって言いたいけどな・・・」

—「そんなこととして意味あるのか？」

悠「俺も「IS」の事は詳しくないが、ボロボロの一夏を見て、篠ノ之さんの攻撃に反応できていないと予想がつく。そんな一夏が専用機に乗っても、自身の機体に翻弄されるのが目に浮かぶ。」

—「・・・これとそれは「関係あると思うぞ」「」

俺は一夏の反論を遮った。

悠「以前、千冬さんと戦った時に俺の反応に機体が追いついてなかった・・・その逆の現象が一夏にでると思ったからだ。ハッキリ言って使い辛い、まあ使っていたら慣れると思うが。もしオルコット戦当日だったら悲惨だ。と言う訳で篠ノ之さん。」

篤「なんだ？」

悠「明日からガンガン頼む。」

篤「任せておけ。一夏、ビシビシやるぞ。」

勝手に一夏の方針を決めた。



「俺は承諾してないぞ！」

勝手に決められた事に一夏が言った。

「怠けていたお前が悪い。」

珍しく篠ノ之さんと息が合った。珍しいな明日は雨か・・・

篝「悠、失礼なことを考えていなかったか？」

悠「珍しく篠ノ之さんと息が合った」と考えたか？」

最後のは省いた。

篝「そうか。」

悠「そうだ・・・篠ノ之さん」

篝「何だ？」

悠「篠ノ之さんって二人居るから篝さんって呼んで良いか？」

篠ノ之つて言い難い……

箒「……構わん。あと」「さん」「付けは要らん箒でいい。その代わり悠と呼ばせてもらおう。」

箒が少し考えて承諾した。

よかった、よかった篠ノ之つてホント言い難いから助かった。

悠「それじゃ、改めて……箒、一夏の事頼む。」

箒「わかった。悠」

悠「……ご馳走様、それじゃ部屋に戻るわ。」

—「ああ……ハア」

諦める一夏……怠けて衰えたお前が悪い……

十五話 訓練と癖 (後書き)

鳳 鈴音の事を気にしてたら、何時の間にか好きになってる自分が居ました。

浮気性ですな・・・

ついでに・・・昔の音楽は良いですね

最近洋楽にはまっています。

ヴァン・ヘインの Cant Stop Lovin' You と  
アンラの Carry On がお気に入りです。

## 十六話〱マッサージと羊〱（前書き）

現在、ネタが湧いて来ませんね・・・貯蔵庫が尽きそうです。

口調、性格、人間関係、難しいですな・・・

十六話〜マッサージと羊〜

十六話

【マッサージと羊】

一夏、箒と別れて部屋の前まで来た。

悠「さて、あの厚いやつでも読むか・・・」

部屋に入り、カツラとメガネを取った。

イスに座り一時間ぐらい本を読んだ。

さすがに一時間も本を読んでいたら疲れてきた・・・

悠「・・・あれやるか・・・」

本を片付けてから・・・どこで拾ってきたか分からない赤い宝石を取り出し・・・

ISを展開して削りだした。

しばらくして千冬さんが入ってきた・・・が。

千「何をやっている？」

悠「・・・」

集中しているから、音が言葉が耳に入っても右から左に・・・要するに聞いていない。

千「おい悠。」

悠「・・・」

千冬さんが話しかけても耳に入らない。

悠「・・・ふう」

一呼吸をした。

千「聞・い・て・い・る・の・か？」

悠「いてえ！ 誰だ！？」

ヘッドロックを仕掛けられた。

千「私だ。」

悠「千冬さん！？ 痛いですよ！ しかも当たってるから離れてください。」

柔らかい感触が頭にある。

千「嫌か？」

ギリギリギリ……

締め付けてくる、そこに在るのは天国と地獄みたいな感じだ。

悠「それは兎に角、解放してください。」

千「わかった。」

ヘッドロックから解放された。

あゝ、痛い……

悠「あゝ痛かった……千冬さん何をするのですか？」

千「制裁だ。」

制裁？あゝISSか……

悠「あゝ、規則違反ですか……」

千「そうだ。全く……やるならバレない様にしろ。」

ええ、千冬さん教師がそんな事言っただけなんですか？……バレなきゃ反則じゃないみたいなこと言っても。

千「ハア、どれだけ宝石を持ってきたんだ？」

千冬さんが呆れた感じで言った。

悠「え」と……



ポンポン・・・と机に置いていった。

千「ハア・・・気持ちは分からんでもないが場所を考える。」

悠「ハ〜イ。それじゃ今日は諦めて、と・・・シャワー浴びるか・・・」

片付けてから、シャワーを浴び髪を乾かして出た。

悠「ふう、さっぱりした。」

千「そうか。悠、軽くて良いからマッサージをしてくれ。」

悠「ええ、わかりま・・・」

固まった・・・

千「なんだどうした？」

声をかけられ即回れ右をした。

悠「千冬さん何て格好しているのですか!?!?」

下着姿にシャツ一枚という・・・まあ、過激な格好をしていた。

千「体が熱いからだ。まゝ気にしないでヤレ。」

悠「辞退させて「ヤレ」・・・ハア〜。」

拒否は認めないらしい・・・強引なんだから・・・

悠「そう言えば・・・」

後ろを向きながら言った。

昨日はいろいろあつて忘れてたが気になったことがあつた。

悠「千冬さん、気になったのですが学園と各国政府にどのような手を打ったのですか？あと俺の処遇は？」

手を打ったって聞いていたが、聞く場所が作れなかったから聞けなかった。

千冬さんが呆れながら口を開いた。

千「それはな・・・学園と各政府側に束が脅しをかけた。」

悠「どんな？」

脅しって部分が気になったので聞いてみた。

千「私も分からないが・・・束が言っていた。お前は何処にも属さないと言つ事で黙らしたと、ついでに学園生活を楽しんどさ。」

悠「どんなのか気になります但し考えただけ無駄でしょう・・・まあ、解析はできないでしょうが念には念をですからね。」

千「そつだ。」

解析できないから心配ないと思うが、どんな事も常に最悪を考えないと。

千「そんな事よりしてもらおうか・・・」

そんな事って・・・

悠「わかりましたよ。それでは・・・千冬さんやりますから。」

千冬さんのほづを向いていった。

千「ああ。」

千冬さんが仰向けになって、手をこっちに向けた。さあと言った感じに……

悠「って、千冬さんやりませんよ……」

千「冗談の通じないやつだ。」

うつぶせになった千冬さんに……

悠「冗談に見えませんでしたよ。」

マッサージを開始した。

千「ああっ！悠っ！おすぎっ！……いいっ！……」

悠「千冬さん、この辺り溜まってるね。……」

千「ああっ、いいぞ。そこ……いいっ！……」

悠「普通にしてるだけなのに・・・なんでそんな声出すんです、か？」

マッサージしながら聞いた。

千「あぁっ〜・・・声？あぁ。キモチイイからだろ？あぁ〜そこ〜あぁっ〜」

悠「ハア〜、たまには自分でマッサージしてください・・・」

千「あぁ〜いい。ん、自分で？あぁ〜そのあたり、それは無理な相談だ、そこっ、あぁっ〜」

悠「左様ですか・・・」

しばらく続けたら眠っていた。

数分後・・・

千「すう〜」

俺は千冬さんをうつぶせから仰向けにしてベッドに寝かした。

うつぶせで寝る人も居るが仰向けで寝たほうがいいと思っての事。

悠「（寝ていると・・・可愛いな）・・・!?!」

布団を被せようとしたら腕を掴まれた。そのまま引っ張られ・・・

悠「んむ　　っ!?!?」

唇を重ねてきた。しかも抱き枕の様にホールドしてきてる・・・

悠「ん　ん　っ!?!?（千冬さん!ちよっ!?!）」

千「ん　ちゅ、ちゅぱ。」

舌を滑り込ませて舌を絡ませてきた、ちよっと待て!この人起きてるだろ!?!

ジーと見ていたら・・・目を開けた。

千「んむ、ちゅ、ちゅう　　」

案の定・・・起きていた。

何とかしてこのホールド解かないと・・・

悠「んう むっ」

千「ちゅーちゅうつ、ちゅぱ。」

拘束はそのまま、唇だけが離れた。

悠「ハアハアハア……千冬さん何を……」

俺は混乱していたが千冬さんに聞いた。

千「嫌か？」

悠「嫌じゃ無い……ですが……」

千「嫌じゃないなら構わないだろ？それに私の寝顔を見ようとした罰だ。」

え……何回か見た気がするのだが……しかも……

悠「……寝顔、って寝たふりじゃないですか……」

千「過ぎた事を気にしても仕方ないぞ。」

過ぎた事を・・・か・・・

まるで・・・

千「そう言う事だ。お前は考えすぎるぞ、起こってしまった事を無かつた事にはできないのだからな。」

悠「何で分かるのですか・・・」

いつも思つが物凄く気になる。

千「それは秘密だ。んむっ、ちゅっ」

また奪われた・・・ポーとしてきそう・・・

悠「ちゅっ・・・ちゅっ・・・んちゅっ。」

千「んふう、むんむっむむ、んふうっ」

何か言っているが・・・全く解らない・・・

キスしながら喋らないでくれ・・・



悠「んむ〜ん〜ちゅう〜んん！」

いろいろ・・・特に精神的に苦しかったからタップした。

千「ちゅっぱ・・・どうした？」

何だ？って感じで聞いてきた。

悠「どうした？じゃないでしょ！理性が吹き飛ぶわ！」

千「フム・・・残念だ。」

何が残念だか・・・

悠「千冬さん、そろそろ寝たいので放してください。」

無駄と思うが一応聞いてみた。

千「・・・その前に言いたい事がある。」

悠「なんですか？」

突然、真剣に言われたから身構えた……千冬さんに前から抱き着かれている状態で……

千「お前の訓練を見て思ったが……自分を殺す事をするな。」

悠「……やり過ぎでしたか？」

千「当たり前だ馬鹿者。自分を痛めつける事はするが殺す事はしない……例えばISを展開していても、お前の行動は自殺行為だ。」

昔を思い出しながら言った。

悠「……追い詰めないとダメなんです……殺す事しか選択肢を選べなかった、弱い自分が許せないから……」

千冬さんが俺の目を見て言った。

千「お前は度が過ぎてている。少しぐらい自分を許せ。」

悠「難しいですね……」

顔を逸らして言った。

ガシ！ぐぐぐぐ．．．

両手で顔を掴まれて戻された。

千「私が言うんだ、受・け・入・れ・ろ」

悠「留めておきます．．．」

俺の言葉に千冬さんが呆れた感じで口を開いた。

千「自分で見つけて、折り合いをつけないと意味は無いが．．．お前にはこれ位が丁度いい。」

悠「まったく．．．貴女には敵いませんよ。」

俺もあきれて言った。

もう疲れた．．．

悠「ハアゝそろそろ寝ましよう。」

千「そうだな。」

納得したのは良いが・・・

悠「千冬さん放してください。」

放してくれないから言った。

千「・・・仕方の無い奴だ。」

悠「何が仕方が無いのですか・・・」

拘束が外れ・・・ず、千冬さんが少しだけ下に移動しただけだった。

悠「千冬さん・・・何をしていたらっしゃるのですか？」

俺の胸に顔を埋めた千冬さんに聞いた。

千「構わないだろ？今日ぐらい。」

悠「何を言っても無駄でしょ？・・・今日だけですよ・・・」

千「わかっているじゃないか。さて寝るか・・・」

・・・まだ感触が・・・

悠「・・・ああ・・・ファーストキスが・・・」

千「心配するな私も初めてだ。」

嬉しそうに言った・・・

悠「嬉しそうに言わないでください・・・千冬さん何時になったら俺の部屋が決まるのですか？」

気になったので聞いた。

千「明日だ。そんなに私が嫌いか？」

不機嫌に言われた。

悠「嫌いじゃないですよ。好きですよ」「そうk」「人として・・・  
千冬さん？」

さっきより不機嫌になってる気が・・・

千「・・・（こいつは〜）なんでもない、ちっちと寝るぞ。」

悠「ハイハイ・・・お休みなさい、千冬さん。」

千「お休み、悠。」

俺と千冬さんは目を瞑った。

一時間後・・・

千「すう〜」

悠「……………（眠れるか〜〜!!）」

一時間経つても一向に眠れなかった・・・

途中で羊を数えていたが・・・1200ぐらいで断念した。

密着してるせいで……………いろんな所が当たっているので眠気なんて訪れない……………

少しでも動いてくれたら外せれるが、寝てから動いていないし……………

千「zzzzz」

千冬さんを見て思う……………

悠「……度が過ぎる……許せ、か……」

この人なりに気を使ってくれたのかな？……些ちかかやり過ぎではあるが……

悠「（貴女のほうが度が過ぎますよ。」

俺は小声で言った。

千「ん……すう……」

拘束が緩んだ……

少しずつゆつくりと足と手を外す……

数分後……

ベッドから床に滑り降りた。

悠「（やっと抜け出せた……）」

立つ気力も無いから、床に寝転んだ。



悠「……疲れたな……寝るか……」

俺はそのまま床で寝た……

十六話〜マッサージと羊〜（後書き）

「自分の中」での好きなキャラトップ5

1 千冬

2 楯無

3 シャルロット

3 ラウラ

5 鈴音

シャルロットとラウラは同じぐらいなので、3で・・・

我ながら欲張りさんですな〜

十七話　オチと歌

十七話

【オチと歌】

悠「！？なんだ？体が動かない！」

両手両足を拘束具で拘束されてベッドに寝かされていた。

いくら力を入れても外せない。

しかも、いつの間にか水攻めされていた。

息ができない。

く……ここまでか……

そこで意識を失った。

悠「は！」

目が覚めた……夢才チか……

悠「何でベッドで寝ているんだ？」

確か床で寝ていたはず……

起き上がるうとした……が動かせない。

縛られていると思って見たら……千冬さんが俺を抱き枕代わりにして寝ていた。

悠「（これが拘束具……て言うか……何でまた……）」

しかもシャツ脱いでいるし……

悠「（とりあえず……この状態から脱出するか……膨らみ、肌、感触、体温が……／＼／）」

以外と簡単に抜け出せた、がいろいろきつかった……

抜け出して、俺の上着を被せた。

時計を見たら3時……

悠「……朝食と弁当の用意でもするか……」

キッチンに行つて音楽を聞きながら用意した。

5時・・・朝食と弁当を用意し終わつてやる事が無くなった・・・

イスに座つて、少しだが明るくなり始めている空を見た。

悠「・・・」

ただ空を眺めていた・・・

S I D E I N 千冬

目が覚めた・・・

抱き枕代わりにしていた悠がまた居ない・・・

夜中、目が覚め・・・床で寝ている悠を見つけてベッドに寝かせ、一緒に寝たはずなのに・・・

肌に何か当たっている感じがして見たら、制服が被せられていた・・・制服？

起き上がったら・・・イスに座って外を見ている悠が居た。

こちらに気がついていない。

どこか遠くを見ている・・・

悠「・・・折り合いか・・・」

悠が咳いている・・・私は気づかれないように布団に潜った。

悠「・・・度が過ぎる・・・極端、か・・・確かに・・・何にせよ、俺は極端過ぎるな。」

私が言ったことを言っている・・・。

悠「この力だつてそうだ・・・力が有り過ぎて上手く微調整ができない・・・制御できなければ唯の暴力・・・よく聞く言葉だが合ってるな・・・」

確かにそうだ・・・発電所で考えたら分かりやすい・・・制御できなければ周りを・・・自分を傷つけるだけだ。

悠「何をするにしても・・・人によって見かたは変わるから・・・強さも・・・も・・・も。」

千「（最後の辺り聞き取れなかった・・・だが一夏を見てみると、何となく強さという物が分かる気がする・・・）」

確かに、人によって感じ方が違うからな・・・

悠「・・・俺は俺の正しいと思った事に使う・・・だg・・・ハアアア〜もう一度寝るか・・・」

欠伸をして机に腕を置き、それをまくら代わりにして頭をおいた。

千「（いろいろ考えているのだな・・・私も寝るか・・・）」

私も眠りについた。



SIDE OUT 千冬

寝ようと思ったが寝れない……

ん〜このまま居ても良いが……千冬さんは下着姿だし……//

現在6時頃

よしさつさと学校に行こう。

着替え、着替えと……あれ？上着がない……ん〜……あ！

悠「（千冬さんに被せたやつか……持ってきてくれるだろう……）  
」

顔を見るのが恥ずかしいので書置きしておいた。

「恥ずかしいので先に行ってます。弁当は作りました。制服は持ってきてください by悠」と。

食堂のおばちゃんが来るまで待ち朝食を一番で食べて、教室に行っ  
た。

席に荷物を置いて窓際に行った。

悠「・・・いい天気だな・・・」

空を見ながら言った。

俺は量子化させたキーボードを出した。

ISには武器を量子化させて保存できるデータ領域があって、操縦者の意志で保存してある武器を呼び出せる機能がある。

キーボードを武器と考えやったらできた。

これがバレたら怒られそうだが、暇なんだ。

悠「暇なときは音楽に限る・・・」

人が来るまで歌うつもりだったんだが……

悠「……………」

全く来ない……もうすぐチャイムなるんですが……

悠「ハア〜暇だ…………………」

チャイムが鳴っても人来ないし……

悠「……………山田先生も来ないし……織斑先生を待つか……  
……………」

しばらくして

バババババババン！！

千「お前らさっさと教室に入れ！」

廊下から、ぞろぞろ頭を抑えて入ってきた……聞いていたのかよ。

俺はキーボードを量子化させた。

悠「で……誰が塞き止めていた？」

皆に聞いたが殆ど責任の擦り付け合いだった……

千「御神……」

千冬さんが上着を渡してくれた。

悠「ありがとう……」

俺は上着を羽織りつつ席に着いた。

千「悠。」

悠「なんですか？」

千「あまり……人前でするなよ。」

呆れた感じで言われた。

悠「そうしておきます。まさか全員が立ち聞きするとは思いません  
かったので・・・一夏。」

一「ん？」

悠「聞いてないで教室に入って来いよ。」

同じ男の一夏に文句を言った。

一「それがな・・・入ろうと思ったたら睨まれてな・・・」

悠「そんなもの気にするな。山田先生もさっさと入ってきてくださ  
い。」

山「え、え」と・・・聞惚れてたので「ジー」す、すみません。/  
」

教師が聞惚れてどうするよ？注意するだろ普通？

悠「ハア・・・織斑先生、授業始めましょう。」

千「そうだな。」

授業中、視線が痛かったのは気のせいではない・・・

休み時間・・・

「御神君演奏できるんだ」 「ああ」

「御神君歌うまいね」 「そうか？」

「御神君何か歌って」 「嫌」

「御神君歌っていた曲教えて」 「・・・秘密」

「み」

あまりにしつこいから殺気を出して追い払った。

悠「眠いのに煩い・・・一夏」

「なんだ？」

悠「後は任せた。」

「何を!？」

悠「女子の相手・・・。それじゃ授業始まるまで寝る。起こすなよ」

俺はタオルを出し顔を見えないようにして寝た。

一夏が何か言っていたが無視した。

その後・・・授業が始まっても起きなかったから叩き起こされた。

十七話　オチと歌　（後書き）

深夜アニメを見ていて、何が正しいか？とか考えてしまいますね。  
最近「シー」を見ています。（隠せないからカタカナで）



十八話　俺と紙（前書き）

総合PV10万アクセスいきました！  
呼んでくださる皆様、有難う御座います！

十八話　俺と紙

十八話

【俺と額の紙】

現在、昼食時・・・食堂にて

悠「我ながら美味しいな」

俺は一夏と箒の三人で飯を食っていた。

周りにも女子が居るが教室よりはマシだろ・・・多分。

一夏が俺の弁当を見ていた。

一「悠、べんと」断る「・・・」

言い終わる前に言った。

悠「一夏たまには自分で作れよ。」

一「たまには食べさせる。」

悠「オルゴットに勝ったら、弁当ぐらい作ってやる。」

一「よし！……？オルゴットじゃなかったか？」

悠「そうだったか？まあ、気にする事でもないだろ。」

それに弁当でやる気になってもな……

篝「一夏、悠は料理もできるのか？」

悠「人に食べさせるぐらいならな……ま、普通だ。」

一「何が普通だ。』あの奪い合いは』忘れないぞ……」

一夏、誘拐の時の事か……

悠「あの時は、みんな腹が減っていただけだよ。」

—「いや、あの千冬姉の反応は異常だ。」

悠「そうか？」

普通だと思うのだが？

箒「あの時？」

箒が気になったのか聞いてきた。

—「以前、千冬姉と束さんと悠が家に来た時があったんだ。」

箒「姉さんが!？」

束さんの名前が出たことで、箒が驚いて言った。

珍しいな……

—「ああ。その時、悠が夕飯を作ったのだが……美味かったから三人で飯の奪い合いって感じになったな。」

悠「ちょっと待て、—夏も料理手伝っていたらろっが。」

「俺は殆どやっていないぞ。」

悠「そうだったかな？それよりも食べよう。時間が無い。」

数分後・・・

悠「ご馳走様。それじゃ先に教室戻っているわ。」

俺はいち早く弁当を片付けて教室に戻った。

放課後・・・剣道場にて

俺は立ちながら目の前の試合を見ている。

相手は一夏と篤だが・・・

悠「・・・」

見ていて思う一方的だな・・・

また幕に一本取られてる。

悠「・・・のう、一夏。」

一「ゼエゼエゼエゼエ・・・ナンダ？」

一夏が息切れしながら喋った。

切れすぎてないか・・・？

悠「剣道やってない間って、体を動かしたりしてたか？」

一「ゼエゼエ・・・いや、全く・・・」

悠「ハア・・・ガンバレ。」

それじゃ、全体的に身体能力落ちているな・・・

「一」 箒、少し休憩させてくれ！その間、悠とやってくれ！」

この男は・・・休憩したいが為に俺を差し出すとは・・・

悠「・・・俺を生け贄に差し出すとは・・・御主、意外と悪よの〜」

少々ふざけて言った。

箒「ふざけてないで、悠！来い！」

何時の間に決定になってる！？

悠「悪い箒、試合するなって言われているんだ。」

俺は箒に言った。

「誰にー!?」

変なところで、同時発言するなよ・・・

俺は親指で自分を指し大真面目に言った。

悠「俺！」

「「ふざけるな！」」

まゝ、尤もつともな意見だが・・・

悠「ふざけてはいないのだが・・・箒も休憩しながら一夏と話でもすればいい。そっちの方が有意義だと思うぞ。」

箒「それもそうだな・・・」

納得しかけたから、俺は静かに扉まで移動した。

悠「一夏、がんばれよ。」



「おっ。」

俺は剣道場を後にした。

夕食を済ませて・・・千冬さんの部屋

シャワーを浴びて髪を乾かし、荷物を纏め、部屋移動の準備が終わって暇になった。

悠「暇だ・・・」

暇で暇で仕方ない・・・

とりあえず、ベッドに寝転んだ。

・  
・  
・  
・

悠「……ん？」

いつの間にか寝てしまった……

額に紙が張つてある……

剥がして見た。

「部屋移動の件だが、問題が発生して移動する日は一夏とセリシア戦の日になった。」

悠「……チヨイチヨイチヨイ。」

何の問題か聞きたかったが、言っても状況が変わらないので諦めた。

再度、寝ようと思いカツラを外そうとしたが無い。

それに、いつの間にか布団に入っていたが気にしない事にした。

だけど寝心地が悪い……少し体制を整えようとした。

むじゅ

……むじゅ？

何か柔らかい物を掴んだ気が・・・

「んっ・・・」

誰かの言葉とともにサ　と血の気が引いた。

悠「・・・まさか。」

がば！

布団を捲ったら千冬さんが気持ちよさそうに寝ていた。

チヨットマテ・・・こんな性格だったか？

気にしても仕方ない・・・

悠「（何故、人が使用しているベッドに入ってくる？）」

俺はベッドを滑り降り、千冬さんを抱えて俺が使用していたベッドからもう一つのベッドに移動させた。

俺は自分が使用していたベッドに戻った。

早く一人部屋になりたい・・・

と、思いながら寝た。

十八話 俺と紙 (後書き)

今のうちに、鈴をどうするか考えておくか……

十九話 求めとく (前書き)

注意・・・この回は作者の気の迷いから発生した作品です。

## 十九話　く求めとく

一夏とオルコット、対決の日の前夜……

布団が捲られて目が覚めた。

悠「……ねえ千冬さん。」

千「なんだ？」

悠「何故、下着姿で私の布団に入るのですか？」

入りながら千冬さんが口を開いた。

千「質問を質問で返すが、悠は今まで誰かと付き合ったことは無いのか？」

悠「無いですね。意識したことも無いです。」

千「そうか……こっちに来て、誰か意識した奴は居るのか？」



少し考えた。

悠「・・・分かりません。唯・・・姉のように接してくれる千冬さんは意識していると思います。」

千「姉か・・・では異性として女として私のことはどう思っている？好きか愛しているかで答える。」

千冬さんが俺に覆いかぶさり、顔を赤くして真剣な目で俺を見ながら言った。

・・・

悠「……は？　すみません、もう一度お願いします。」

一瞬理解ができなかった……聞き違いかと思ったからもう一度聞いた。

千「異性として私のことはどう思っている？　好きか愛しているかで答える、と言ったのだ。」

今度は理解できた……が。

悠「いきなり……どうしたんですか？」

千「お前が鈍感すぎるからだ。」

どこか不貞腐れた感じで言った。

悠「そうですね？」

千「そうだ・・・で、どうなんだ？」

悠「好きですよ。ただ・・・それは好意であって、好きじゃないと思いますよ・・・」

俺は正直な気持ちを千冬さんを見て言った。

千「それは判っている。だが私は違つぞ。」

違つ・・・？

悠「え・・・？」

千「お前は鈍いからハッキリ言つ。」

一呼吸をおいて、千冬さんが俺を見つめて口を開いた。

千「私は悠、お前のことが好きだ。愛していると言ってもいい。キツカケは最近なんだが・・・好きになつてしまつたら後はもう歯止めが利かなくなつてしまつた。今ではお前に愛して欲しい・・・抱

いて欲しいとさえ思っている。」

歯止めが利かないって・・・だけど・・・

悠「俺は・・・自分の気持ち判らない・・・そんな中途半端な気持ちで千冬さんの全てを奪いたい気持ちになってきてる。こんなダメな俺を・・・千冬さん、貴女は求めるのですか？」

千「私は構わない。それに悠以外の人に、私の大切なものを奪われたくないからな。」

そこまで言われた、言わせてしまった。

悠「千冬さん・・・後で傷を付ける事になりかねない・・・だけど・・・もう、貴女を抱きたいと思う気持ちを止めれない・・・だから・・・」

俺は千冬さんの頬に手を当てながら口を開いた。

悠「今この時だけ、貴女を強く想うね。」

千「気にするな、とは言わないが・・・悠は何においても極端で優しいな・・・」

俺の顔に右手を伸ばしながら続けて口を開いた。

千「だから・・・今だけでも、私を異性として女として愛してくれ  
たらいいさ。」

そして目じりに溜まった涙を拭って言った。

悠「判った。・・・おいで、千冬。」

千「ああ、悠」

千冬は今まで接してきた中で、初めて見せた笑みを浮かべて抱きついてきた。

それから俺と千冬は数時間だけど互いを求めた。

十九話く求めとく（後書き）

さて……こんなのを作ってしまったが……一応載せてみます。

この場面はもっと後！展開早すぎるだろうが！と怒り狂う人

ここでいいんじゃない？って思う人

千冬はもっとクールだろ！と憤怒の神様を召喚する人

こんな場面いらぬよさつさとセシリア潰さないの？と言う人

悩め若人よ、と悟りを開いた感じで言う人

年齢制限アウト~~~~！とセキュリティを呼ぶ人

作者的に……展開は後って感じですが……じゃあ載せるなよ！と書かないでくださいね^^；

三日ぐらい感想お待ちしております。（人が見なくなる日数って三日ぐらいなんだよね……）

（この回を載せて続けるのであれば、作って置いた続編2話分を数日間編集をします。）

感想によりセシリア戦に置き換えるかも・・・

## 二十話〜対決の日〜（前書き）

このままで良いと言う感想を頂きましたので、前回の続編をお送りいたします。

感想書いてくださった方々ありがとうございました。（名前の方は書くのをやめておきました）



## 二十話〜対決の日〜

二十話

【対決の日】

悠「ん……」

目が覚めた……

千「すう……」

寝息が聞こえた方を見たら隣に千冬が寝ていた。

そつえば……結構遅くまで起きていたな……

思い返してみたら……千冬は激しかった……

ずっと攻められ……いや、求められていた気がする……意外と俺って押しに弱いのか？と思えるほどに……激しかった。

兎に角、体が持たん……

思考を中断して時計を見た……

悠「何だ、もうこんな時間か……」

時計を確認して起き上がるとした。

……ん？

首を振り、目を擦ってから改めて時計を見た。

時計は無慈悲にも早く起きないと遅刻する時間帯だった。

というか……教師って朝方、会議みたいなのなかったっけ……  
・？

兎に角、嬉しそうな顔をしてぐっすり寝ている千冬を起こさないと・  
・・

悠「…………千冬！起きて！千冬！」

俺は千冬の肩を持って揺らし起こそうとした。

それはもうユサユサじゃなくガクガクって感じに。

ガクガク揺さぶって起こそうとした結果……

千「んゝ悠もつと〜」

起きる気配がない……しかも寝言を言っているし。

……夢の中でも続いているのか!?

諦めず呼びかける。

悠「だゝかゝらゝ千冬起きろ！遅刻する！」

千「もっと激しく〜しる〜」

駄目だ起きないこの人は……

少々強引な手を打つか……

叩いて起こすのは嫌だったので……

千冬の鼻を左手で摘まんで口を口で塞ぐ。

悠「ん~~~~」

口を手で塞いだら殺人現場みたいな感じだから口にしておいた。

ようするに人工呼吸だな。

しばらくしたら、苦しくなったのか目を開いた。

千「ん~~~~んんん！ぷはあはあはあはあ。」

悠「千冬、時間見て！早く着替えないと遅刻だからね！」

俺はベッドから降りて、服を着替えながら言った。

千冬さんは寝ぼけた目で、時計をしばらく見て固まった。

千「……危険だな……悠。」

悠「だから言ってるでしょ！？早く着替えて！」

千冬さんのはのんびり起き上がって支度をしながら口を開いた。

千「この際ゆっくり行こう。急いで行ったら怪しまれる。」

悠「どっちにしても怪しまれますよ・・・それに裏、表、逆ですよ・・・」

焦っていたのか、着替えを裏と表が逆というベタなオチが炸裂した。

千冬さんがこつちを呆れながら見ている。

千「悠・・・お前もな・・・」

言われて見たら同じ事をやっていた。

悠「・・・本当だ・・・千冬さんIS展開させて移動していい？」

服装を直しつつ、ダメもとで聞いてみた。

千「本当なら罰則扱いなのだが・・・バレない様に頼む。それと・・・」

悠「それと・・・？」

先ほど呆れながらの頼んだ態度とは、打って変わって少し恥じらいを感じる・・・

千「さ、さっき私のこと千冬って呼んだら？」

照れながら先ほど呼び捨てした事を聞いてきた。

悠「焦っていたので・・・嫌でした？」

かなりテンパっていたので言っていたが・・・

千「い、嫌じゃないが・・・人が居ない時に、た、たまにでも良いから言ってくれ／＼」

・・・滅茶苦茶照れてる。

出会った当初のクールな印象と比べて、別人と思いたくなる位印象が変わっているが・・・

・恋したら人は変わると言うし・・・多分・・・気にしないでおくか・・・

それに今は人がいないから……

悠「……ああ。準備もできたし行くよ、千冬。……あと学校では自重するので。」

千「当たり前だ。……ただし残念だな。」

マジで残念そうな顔をしなくても……

部屋のドアを閉めて、千冬さんを抱えショートカットをしつつ移動した。

規則違反したかいはあって、俺達はギリギリ間に合った……

放課後……

一夏とセリシアの対決……

現在、第3アリーナ・Aピットに居る。

近くで一夏と篤が何か言っている……

山「お、織斑君x3」

「夏を三連呼して転びそうになりながら真耶さんが来た。

悠「山田先生、落ち着いて転びますよ。」

山「す、すいません。お、織斑君！」

全く落ち着いてない……

「山田先生、全然落ち着いていないですよ。ここは深呼吸してください。」

山「あ、はい。」

す～は～す～は～

お、落ち着いてきている？

す～は～す～は～……

……やり過ぎでは……

「ハイ、そこで止めて。」



真耶さんが息を止めた。

・・・・・・・・しばらくお待ちください・・・・・・・・

だんだん息苦しくなってる・・・

危ないから止めてあげるか・・・

悠「山田先生そろそろ呼吸しないと。」

山「はあはあはあ。」

長い事、息を止めていたからハアハア言っているし・・・

一夏に何を言いたかったのかな・・・？

そんな事より・・・

悠「一夏・・・楽しんでいただけろ？」

一夏に聞いてみた。

「「つい、やりたくなくなってしまっただよな・・・・・・・・」

「年長者をからかうな。」

パン！

いつの間か一夏の後ろに立っていた千冬さんに殴られてる。

「ち「パン！」「イッテ」

「ち「で殴られてる……」

千冬姉といたかったのだろうか？

「お「と「ち」だからな……判別がつくか。」

千「織斑先生だ。学習しろ。できなければ死ぬ。」

悠「いや、死んだらだめですよ。」

とりあえず、ツッコミをいれた。

頭を押さえている一夏を見ていた千冬さんが溜息をついた。

千「愚弟にかける手間暇がなければすぐにできるぞ。」

悠「?・・・一夏頑張れ。」

何ができるのだろうか?・・・

千冬さんから視線を感じたが・・・一夏を連呼をして慌てていた真耶さんが気になったので話しかけた。

悠「山田先生、一夏を連呼していました但何か言いたかったのでは?」

話を振られた真耶さんは思い出したらしく口を開いた。

山「そ、そうでした、来ました織斑君の専用IS。」

対戦の日に届く・・・嫌な予感が当たったな・・・

だが訓練機よりマシだろ・・・

悠「やっと来たか・・・操作は実戦で慣れるよ。勝てば弁当、負ければ無しだ。まゝがんばれ。」

俺は一夏に応援?の言葉をかけてあげた。

ピット搬入口が開いている最中に千冬さんが呆れながら話しかけてきた。

千「何だそんな賭けをやったのか？」

悠「勝ってもらわないと。俺としても困ります。」

千「それもそうだな。」

苦笑いしながら千冬さんが言った。

搬入口が開いたそこには白いISがあった。

悠「それが一夏のISか……」

山「そうですね、織斑君専用IS『白式』です。」

俺は一夏の方を見た。

一夏が白式を見ている。

何だろう……白式を見た。

白式を見たけど何も変わったことは無い……わからん、再び一夏を見た。

何かを感じている気がする。

が、時間が無いので急かした。

悠「一夏、時間が惜しいすぐに装着しろ。」

「ああ。」

千「それとフォーマットとフィッティングは実戦でやれ。できなければ負けるだけだ。」

一夏が白式に触れた。

「あれ？」

悠「どうした？」

「いや・・・なんでもない。」

何か起こると思ったのかな？

それになんでもないって・・・まあ、悪い意味ではないと思うからいいか。

悠「はよ、機体に乗って来てくれ。・・・機体に背を預ける様に、

後はシステムが最適化してくれるぞ。」

一夏が言われたとおりに白式に乗り込んだ。

これで・・・一夏と白式が繋がった。

一「あ。」

一夏が何かに気づいた感じがした。

悠「ハイパーセンサーが問題なく作動している様だな。」

千「一夏、気分は悪くないか？」

心配しているのだろうな、織斑じゃなくて一夏って呼んでいるし。

一「大丈夫、千冬姉。」

千「そうか。」

さすが弟思いだな・・・

悠「……弟思いか。」

—「悠？」

眩き声が聞こえてしまったか、一夏が反応した。

悠「何でもない気にするな。それよりもオルコットが待っているぞ。」

—「あ、ああ、わかった。……箒？」

—「一夏が箒の方を向いた。」

箒が何か言いたげな視線を一夏に送っていた。

箒「行って……勝ってこい。」

—「ああ。行ってくる。」

そう言って一夏がピット・ゲートから、対戦者の待つアリーナ・ステージに行った。

悠「(さて、どうなるかな……て、言うか眠い)」

俺は壁にもたれて目を閉じた。

.....

目を開けた。

少し寝ていたらしい。

ふと視線を向けたら、まだ一夏とセシリアが戦っていた。

一夏が初期設定の白式で頑張っているな・・・

ブレード一つで動き回ってオルコットのブルーティアーズによるオ  
ールレンジ攻撃を、多少被弾していたが全弾被弾しない様回避して  
いた。

悠「・・・ふん。」

呟いたら千冬さんがこちらに気づいた・・・

悠「・・・どうしました？」

千「悠・・・寝ていただろ。」



少し怒っていらっしやる。

悠「ええ少し・・・それにしても、俺が対戦しなくてよかったですね・・・」

戦闘を見て言った。

千「そうだな・・・お前と同じタイプの装備だから・・・戦ったらオルコットが無惨な結果になっていたな・・・」

悠「あの時の状態だと否定できません・・・」

真耶さんがこちらを向いて聞いてきた。

山「織斑先生、それはどういう事ですか？」

そう言えば真耶さんは見ていないんだっとな。

千「言葉通りだ、同じ武装を持っているって事だ。私の時は使わなかったけどな・・・」

悠「そうでしたね・・・ん？やっと一夏気づいたかな？」

一夏がオルコットに接近し攻撃したが避けられる……が何かに気が付いた感じが、一夏の顔から分かる気がする。

顔に出るタイプかな？

箒「何をだ？」

悠「オルコットの欠点。」

俺が即答した。

箒「そんなものがあるのか？」

箒が信じられないみたいな感じで、画面を見ながら聞いてきた。

悠「ある。所詮動かしているのは人間だ。周りのブルー・ティアーズ……面倒だからビットって言うけど、ビットはオルコットが命令をだして動かしている。そしてビットを制御している時、オルコットはほとんど攻撃できない。」

一夏が一つ破壊した。

篤「なぜ？」

悠「制御に意識を集中してるからだろ。」

二つ目を破壊した。

「夏も同じ事をオルコットに言っている。

オルコットは……凶星って感じだな、顔が少し引き曇ってる。

悠「と、言う事だ。そしてあのド阿呆、調子に乗っているな。」

千「ああ……浮かれているな。」

相手の欠点分かり、勝利の可能性が出た事で油断している……

それに……欠点教えてるんじゃないやねえよ……

対戦終わってから教えればいいだろうが！ちなみに俺ならそうして  
る。

山「え、どうしてですか？」

千「左手を閉じたり開いたりしているだろ。あれをする時は大抵ミ  
スをする。」

癖かよ！っとツッコミをしたくなっただが自重した。

悠「そんなクセがあったのか・・・よくそんな細かいところが分かりますね。」

千「まあ、なんだ、一応私の弟だからな・・・」

一応って・・・弟でしょ・・・

それに千冬さん照れてるし・・・

山「あ、照れているんですか？照れているんですね？」

と、真耶さんがからかっている・・・

事実だが・・・不穏な空気がしてきた。

千冬さんが真耶さんに近づき・・・

ガシ！とヘッドロックをかました。

あれ痛いんだよな・・・

真耶さんが痛い痛いときゃあぎゃあ言っているが無視して画面を見

た。

悠「オルコットの武器・・・まだ残っているな。」

何か狙っている感じがオルコットからする・・・

予想があっていたら、後二つ、三つ使っていないな・・・

しばらく見ていたら案の定、一夏が迫った所でオルコットが餌にかかったって感じで笑った。

オルコットのスカート状のアーマーの突起が外れ、動いた。

悠「<sup>ミサイル</sup>弾道型か・・・回避は無理だな。」

・  
・  
ビーム系の直線攻撃ではなく対象を追尾するミサイル系だからな・・・

叩き切って防ぐか、高速移動で避けてオルコットに接近し攻撃そのまま勝負をつけるしかないと思うがエネルギー残量が足りるかどうか・・・

と、考えていたら一夏にミサイルが被弾していた。

しばらく煙で見えなかったが・・・

千「機体に救われたな、馬鹿者が。」

千冬さんを見たらどこか安堵の感じがする。

心配しているんだな。

画面に視線を戻した。

そこにはファースト・シフト一次移行した白式があった。

凸凹したデザインから、鎧を思わせるデザインに変わっている。

一夏が武器を見て呟いた。

一「雪片式型……？」

さらに独り言のように喋る。

一「千冬姉と同じ武器か……最高の姉さんを持ったよ。」

画面の一夏から、何かを思い出している、振り返っている感じがする。

「俺は・・・家族を守る。」

一夏から覚悟みたいなのが伝わってきた。

悠「・・・守るか・・・千冬さん。」

俺は画面を見ながら千冬さんに話しかけた。

千「なんだ？」

悠「守れるといいですね。」

千「・・・そうだな。」

そして一次移行が終わったことにより、一夏の動きが良くなった。

一夏がビットを切り裂き、オルコットに迫り雪片を振りかざし攻撃した。

当たると思われた直前、試合終了のブザーが鳴った。

『試合終了・・・勝者セシリア・オルコット』

「は？」

観客含め全員が啞然としている、対戦していた二人も啞然としている。

悠「（最後、雪片が光った気がしたが・・・何か発動したか・・・それが原因だろう恐らく）」

俺はそう考えた。

被弾もしていなかったしな・・・それぐらいしか思いつかない・・・みんな何故負けたのか分かっていないみたいな感じだ。

ただ千冬さんを除いて。

ただ負けは負け・・・

悠「これで勝てたら良かったのにな。」

「」「」そうだな。（ですね）」「」「」

俺の何気ない言葉に、篝と千冬さんと真耶さんがハモった・・・



悠「・・・それじゃ、お先に失礼します。」

俺はそう言ってピットを出た。

二十一話 不届き至極な事

二十一話 【不届き至極な事】

一夏とオルコットの決戦が終わった日の夜。

俺はシャワーを浴び、荷物を纏め部屋で待っていた。

.....

ついに訪れた部屋移動の日！

暫くしたら、鍵を持った千冬さんが部屋に入ってきた。

千「悠、これが部屋の鍵だ。」

千冬さんが部屋の鍵を差し出してくれた。

悠「ありがとうございます。……って何故、躊躇ためらっているのですか？」

渡してくれると思ったら、渡さず持っている。

千「気のせいだ。悠、渡す前に一つ言っておく。」

悠「なんででしょう？」

真面目な顔で言ってきたのでこちらも身構えた。

なんだ？

千「一人だからって女を連れ込むなよ。」

……

真面目な顔で言うことか？

悠「……連れ込みませんよ。相手が居ないんだから、心配する必要はないと思いますが？」

千「それもそうだな。少し考えすぎて……ん？……その言い方だと女が出来たら連れ込むと言っ事か？悠よ。」

言い方が拙かったか変な感じに捉えられてしまった……

目が徐々に鋭くなってきている……

悠「相手が居ても居なくても連れ込みませんよ。……心配性ですね。」

呆れながら言い直した。

千冬さんは呆れながら頷いた。

千「心配もするさ……まあ、分かればいい。」

そう言って鍵を渡してくれた。

鍵を受け取り礼を言おうとし、俺は千冬さんの顔を見た。

悠「千冬さん。」

千「なんだ？」

悠「嬉しそうですね？」

どこか嬉しそうな顔をしていた。

千「・・・気のせいだ。」

気のせいか？

まゝいいか。

悠「さてと、千冬さん部屋の件ありがとうございます。」

俺は部屋を出る前に礼を言った。

千「気にするな。・・・くぞ。」

小声で言ったのか聞こえなかった。

悠「聞き取りづらかったのですが、最後何て言いました？」

千「聞こえなかったらそれでいい／＼。」

少し照れた感じで言った。

何を言ったか分からないし・・・考えても仕方ないか。

悠「それじゃ明日教室で。」

千「ああ。夜更かししないで寝ろよ。」

茶化した感じで言ってきた。

悠「千冬もね。」

俺は少し笑って部屋を出た。

少し歩いて自室に着いた。

同じ作り・・・だが・・・一人だ!!!

念願の一人部屋だ、山田先生を睨んでよかった。

感謝しつつ、荷物を解いてベッドに入った。

そして数秒で寝た。

翌日、朝のSHR・・・

山「一年一組代表は、織斑一夏君に決定です。「よし！」・・・」

真耶さんが言い終わる前に俺が右手でガッツポーズをして言った。

山田先生がシヨンボリとしているが何か言いたかったのかな？

周りが盛り上がっているし気にしないで措おくか。

だが一夏は喜んでいない・・・これも気にしない。

あれ？一夏が代表？

悠「山田先生、質問です。」

俺は手を挙げて言った。

山「どうぞ、御神君。」

真耶さんは気を持ち直して言った。

悠「先ほど喜んだのですが、何故一夏は負けたのに代表になっているんですか？」

山「それは・・・」

セ「それは、わたくしが辞退したからですわ！」

山田先生の説明を遮り、オルコットが優雅に立ち上がって言った。

山田先生がまた言いそびれてるし・・・残念だな。

オルコットの説明は長いし、授業がまだ始まらないから・・・

悠「寝るか・・・」



腕を枕にして目を閉じた。

オルコットの一夏にたいしての態度が柔らかくなっている気がする・

セ「『一夏さん』に代表を譲ることにしましたわ。」

一夏さん？・・・人の心は分からんな、気にしても仕方ないし寝るか。

悠「ZZZZZ」

スパアン！

「・・・・・・・・」

ゴン！

悠「イッテく・・・織斑先生、最近殴りすぎですよ。」

千「起きろ馬鹿者、だが面白いな・・・よし今日の放課後でもいいから対戦しろ。」

昨日に続き、また誰か対戦するのか・・・

俺は手を挙げ誰が対戦するか聞いてみた。

悠「織斑先生、誰と誰が？」

千冬さんが俺を指差しながら言った。

千「御神と・・・」

一夏に指を移動して・・・

千「織斑だ。」

誰がそんな不届きなことを言ったんだ？

悠「織斑先生、誰がそんな不届き至極な事を提案したんですか？」

「「お前だ！」」

一夏と千冬さんがハモった。

はて・・・思い当たる事が無い。

悠「俺が？・・・何で？」

「寝ぼけながら言っていたぞ・・・」俺と試合するか？」って・・・」

一夏が呆れて教えてくれた・・・

悠「・・・知らんなそんな事は、私は「認めんぞ」・・・（えへ）」

俺が何を言うか分かっていた千冬さんが遮り即答した。

千「拒否は認めん。寝ぼけていたとはいえ、言い出したからな。寝ていた罰と思え、それに周りも拒否を認めない感じだぞ？」

悠「周り？」

周りを見たら「拒否なんてさせない」「やってくれるよね」「見てみたい」という感じの視線が送られてきていた。

言葉を視線で感じるとは・・・凄まじいな・・・

俺は呆れている一夏に頼んでみた。

悠「一夏・・・何とかしてくれ・・・」

俺の救いの言葉に一夏は・・・

一「無理だ・・・織斑先生、俺が負け「変わらないぞ」そうですか・・・」

即答して・・・拳句クラス代表すら押し付けようとしていたが、一夏の僅かな期待すら千冬さんは粉碎した。

「厄日だ」

俺と一夏が脱力した。

脱力している俺たちを千冬さんが確認して口を開いた。

千「クラス代表は織斑一夏で決定だ。放課後は御神と織斑の模擬戦。異議はないな。」

「ハイ」

と、みんな（俺と一夏を除いて）で返事した。

放課後……第3アリーナにて……

俺はアリーナ上空にて一夏を待っていた。

悠「さてどうするか……」

オルコットの様に遠距離でやるか、それとも接近戦で戦うか……

と、考えていたらISのセンサーが白式を展開した一夏……とブルーティアーズを展開したオルコットを捕らえた。

俺は訝しげに聞いてみた。

悠「・・・なあ、何でオルコットが？」

セ「それは織斑先生が・・・一夏さんだけだと勝負にならないからと仰っていましたわ。」

あの人は・・・

だが・・・遠距離型と近距離型の二人相手か、一応想定して自主訓練やっていたけど所詮制御し攻撃していたのは自分だ。

実際戦闘はもつと複雑にそして常に状況が変化するものだ。

それに・・・思考が分からない他人相手での実戦はどうなるか？と試してみたかったのも事実。

気を引き締めてかからないと負けてしまうかもな・・・

—「それが悠のIS「アポロン」か・・・」

展開されている俺のISを見て言った。

悠「ああ。一夏、オルコット・・・やるか。」

—「そうだな。」

セ」そうですわね。」

俺の言葉に一夏は雪片をオルコットがライフルを展開して身構えた。

悠「・・・本気で来いよ？」

俺は近接ブレードを右手に展開して構えつつ二人に言った。

『御神悠 対 織斑一夏 セシリア・オルコット ペアの模擬戦闘を開始します』

アナウンスの合図と同時に模擬戦闘が始まった。

近距離専門と遠距離専門が組むと作戦は大方予想がつく。

近距離が囷になって隙を作りそこを遠距離が狙い打つ、かその逆がセオリーだろう・・・

て、言うか協力戦なんて一夏達初めてだからな・・・経験が浅い一夏が突っ込んで、それを動かし慣れたオルコットが援護するみたいな感じに成りうるだろう。

案の定、一夏が雪片式型を俺に見えないよう右に構えて突っ込んで、オルコットがライフル『スターライトMK-?』で狙い打ちながら目が見えない死角に高速移動している・・・

それにたいし俺がとつた行動は……

悠「……（やってみるか）」

俺はブレードを左手に持ち替え、居合いの様に構えてオルコットの射撃を避けながら一夏に突っ込んだ。

一夏の右薙ぎを俺は右斬り上げで対応しそのまま上段に構え一夏の肩に振り下ろした。

一「!？」

一夏が驚きの顔をして後方に回避したが避けきれず、破損まで至らなかったが装甲に傷が付いた。

一夏が俺から距離を離そうと後退した。俺は一夏を追撃しようとしたら、オルコットが追撃させまいと俺と一夏の間をライフルを二発打って牽制してくる。

オルコットが何か言っていた気がするが、俺は無視して深追いせず少し距離をとった。

一「何でそれを悠が知っている？」



さっきの攻撃の事を聞いてきた。

悠「千冬さんに一度食らったからな。避けれないから無理やり攻撃当てて引き分けになっただけど・・・やっぱり知っていたから避けられたか。」

離れながら聞いてきた一夏の問いに正直に答えてあげた。ウン、優しいね俺。

俺と一夏が離れたことにオルコットがブルーティアーズ・・・面倒だからBTを展開して攻撃してきた。

ハイパーセンサーが教えてくれるが一応自分の目で確認した。

信じていない訳ではないが、何事も自分の目で見ないと気に入らない。

俺は一度、一夏と同じ体験してみたかったからあえてBTを攻撃せずに回避に専念した。

悠「一夏との戦闘画面を見ていたがやはり避けやすいな・・・」  
避けながら思った。何か単調過ぎる気がする・・・先読みの攻撃や相手を誘導する攻撃みたいな事をしてこない・・・。

意識の外からの攻撃がほとんどだな、だから一夏にも避けられる。

B Tの攻撃を避けながら、二つ目のブレードを展開し二刀流にして再度一夏に突っ込んだ。

一夏もそれに応えるかのように突っ込んで来てくれた。

一方、モニタールームでは……

クラスの連中がモニタールームに集合させられていた。

予定がある者は来なくてよかった筈だが……あつた者はキャンセル、または後回しに来ている。

「織斑先生、御神君一人で大丈夫だったんですか？」

「御神君、最初の攻撃だけで後は避けるのと防御で精一杯ですよ？」

と、言う感じの言葉が飛び交っていたが千冬さんがそれを一蹴した。

千「黙って見ている。」

「ハイ……」

全員が黙った……

千「全く……手加減しすぎだ。」

一夏の攻撃を捌き、オルコットの射撃を回避している。

その画面を見ながら千冬さんが呆れながら言った。

その言葉に全員が千冬さんを見た。

「……は？」

全員が啞然とした。

実力を知っている千冬さんから見たら、手加減していると言えない。

が、戦闘を見ていないクラスの者からしたら、あれで手一杯だと感じるのだろう。

「手加減って……」

「あれで手を抜いてるって事？……」

所々信じられないと言つ感じの言葉が出ている。

千「そうだ、そろそろ戦局が変わるぞ。」

その言葉に全員がモニター画面を見た。

二刀流で一夏とオルコットの攻撃を捌き、時に回避する。

その行動をしばらく続けていた。

悠「……（そろそろ頃合か）」

戦い始めてから、約二十分程経っている。

俺は仕切り直す為に、一夏から離れた。

それにたいして、一夏が逃がさないと言わんばかりに追いかけてきた。

悠「ちっ。」

俺は離れるのを諦めて、一夏を迎え撃つ為に一夏に突っ込んだ。

一夏の袈裟切りにたいして左のブレードで受け止めて、右のブレードで胴に叩き飛ばした。

悠「な!？」

飛ばされた一夏の後方にBTが隙を突いて俺を攻撃していた。

隙を突いた攻撃に防御が間に合わず腕に一撃喰らった。

絶対防御が発動しなかったがエネルギーが削られてしまう事になった。

油断していた・・・まさかここで一夏が囷になるとはな。

オルコットが終始援護するとはかり思っていたツケがここで響くと

は……

悠「一夏、オルコット。」

俺は二人に話しかけた。

一応は言っておかないといけないと思うからな……

「なんだ(ですの)?」

悠「一撃当てたから攻撃に転じるわ。……頑張つて耐えるよ?」

俺が言い終わつたと同時にビットを三基パージした。

二基を一夏に、一基をオルコットに飛ばした。

「セシリア(わたくし)のブルーティーズと同じ!？」

二人の驚きの声と同時に攻撃した。

俺は先に一夏を沈めるべく、二基のビットで逃げる方向に牽制射撃しつつ追いかけた。

「く！セシリアより回避しにくい……！？」

回避していた一夏が俺の接近に気づいた。

一夏に接近する事をさせない為に、オルコットが射撃体勢に入るがビットで狙い撃つ。

オルコットが回避しつつ撃つが狙いが外れる。

セ「高速移動しながら制御するなんて……！？」

狙いをつけようにもビットが悉く邪魔して狙いがつけられない。

しかもオルコットはBTを展開できない、と言うか……してこない……1基だけならBTを展開できると思うのだが、やってこない辺り冷静さを欠いているな。

その際に、ビットの回避に専念していた一夏の肩と胸にブレードを叩き込んだ。

「ぐわー！」

さらにビットで追撃攻撃をしてやっと一夏のエネルギーが切れた。

こっちも、先程食らった一撃とビットを撃っているからエネルギー

が65%位まで減っている。

あとはオルコットだけか……

俺は一夏に使っていたビットを戻し、残っているオルコットを潰しにかかった。

オルコットが接近戦だけは避けたいのか、俺から離れながらライフルを撃ってきた。

俺はそれを避けつつ、オルコットに使っていたビットを戻す。

さっさと終わらせるために、再度ビット三基を飛ばして一つは回避先に、一つはフェイント、最後は狙い撃ちで逃げるオルコットを攻撃しかけた。

回避に一杯一杯のオルコットの左側面からライフルを右ブレードで袈裟切りして破壊し、背中を回転を加えた左のブレードで叩き付け、そのまま振り抜き飛ばした。

さらにビットで追撃し数発当たったところでエネルギーが切れて試合が終了した。

悠「……ふう、疲れた。（思いつきりブレードを叩きつけたら、絶対防御があっても骨とか危なさそうだから……今度はもうちょい強くヤルか）」

力加減が分からないから、ブレード攻撃を加減してビットで仕留め



る事にしていた。

悠「あいつ等、この戦闘で自分の欠点とか分かってくれたら良いのだがな・・・」

俺は空を見上げながら思った。

二十一話 不届き至極な事 (後書き)

書いていてふと思った・・・主人公普通じゃねえ？

誤字、脱字、何かしら感じたら感想お願いします。

## 二十二話 称賛と花見

二十二話

【称賛と花見】

俺は寮の自室でシャワーを浴びて、食堂に行き飯を一人で黙々食べていた。

いきなり周りが煩くなった。

「キヤー」とか「お姉様」とか聞こえてきた・・・

視線を向けて見たら、食堂で食べないとされる千冬さんがトレイを持ってこっちに歩いてきている。

誰も座っていない俺の所でトレイを置き座った。

千「やはり周りが煩いな・・・」

呆れながら言った。

当たり前でしょ・・・

悠「そうですね。とりあえず食べましょーう。」

暫く食べる事に集中した。

食べ終わり食器を片付けて席に戻った。

千冬さんが席に着いた瞬間こっちを見た。

千「あの一撃油断しただろ。」

一夏とオルコットの一撃の事を聞いてきた。

その時の事を思い出しながら、当てはまる言葉を考えて口を開いた。

悠「ええ、悔って・・・イヤ自惚れていたのかな・・・あいつ等  
伸びが良さそうだから追いつかれるかもね。」

千「それはお前が手加減しての事だろう？ブルーティアーズを破壊  
せずに織斑の相手をして、近接攻撃は加減してビットで攻撃だしな。」

呆れながら言われた。

さすが千冬さん、全部お見通しだな。

千「お前の事だ、全力でやったら立ち直れない事になるから手加減していたのだろう？」

悠「よく分かっていますね・・・ん？」

数分前・・・

一夏と箒とセシリアが食堂に向かっていた。

一「まさか悠があそこまで出来るとは・・・」

箒「扱い慣れしていた様だが、いったいどれ程動かしているのか・・・」

二人のつぶやきにオルコットが一夏に訪ねた。

セ「一夏さんと悠さんは知り合いの様でしたが、一夏さんは悠さんの事をご存知ではありませんの？」

一「んゝ悠と初めて会ったのが五年前だ・・・それから暫く会って

なくて……二年位前に何回か家に来てまたフラリと出て行ったな。」

オルコットの質問に一夏が思い出しながら余計な事を省き答えた。

篤「それでは知らないと変わらないだろ？」

一「そうなんだよな。始めてあった時に千冬姉と東さんが一緒にいたから詳しい事を知っていると思うのだが……」

東さんの名前で篤とオルコットが反応した。

篤「姉さんか……」

セ「篠ノ之博士と!？」

一「聞いても教えてくれないぞ。少し前に聞こうとしたら睨みながら『知る必要のないことだ』って言われたから。」

少し前に一夏が千冬さんに聞いていたが怖かったとは言えない……

一「兎に角、食堂にいますと思うから何かしら聞いてみよっぜ。」

篤「そうだな。」

セ「そうですね。」

結局分らないから本人に聞くという事になった。

食堂に近づくとつれて騒がしくなってきた・・・

三人は首を傾げながら食堂に着いた。

とりあえず三人は料理をトレイに載せて悠を探した。

着いた時に思ったが違和感があった・・・

女子全員とまでは言わないけど、殆どが一定方向に視線を向けている。

視線を追うと悠と千冬さんが話をしていた。

一「居たけど・・・どうする?」

一夏が二人に聞いた。

第「それでも行くしかない。」

セ「そうですね、行くしか選択肢はありませんわ。」

「それじゃ、行くか。」

三人は悠と千冬さんの居るところに向かった。

ふと見たら一夏がトレイを持ってきていた。

ついでに箸とオルコットも一緒に……

「悠……織斑先生、ここで食べてもよろしいでしょうか？」

「一夏がおずおずと聞いてきた。」

千冬さんが居る事で少し硬い。

周りは……「キヤー」とか言ってる人、拍手している人がいる。

悠「俺は構わないが織斑先生は？」

俺の言葉に千冬さんが頷いて三人が席に着いた。



話があるから来たと思うから、話かけられる前に俺は一言。

悠「ちなみに話は食べ終わってからだ。」

その言葉に三人はギクッて感じになった。

やっぱり話しかけようとしていたのかよ……

一夏が飯を食べて終わるのを待たず千冬さんに話しかけた。

悠「それにしても織斑先生、いきなり二人相手は酷いですね。」

千「全く酷くないな、お前が相手だから二人にしたが、それでも不十分なぐらいだ。私が参加して丁度いいぐらいだ。」

さも当然の事のように言い返された。

連携の取れてないところに指揮官が入る訳か……

悠「そしたら最初から加減の無しの全力でいきますよ。上手く事を運べる指揮官がいたら厄介としか言葉が出ませんからね。」

千「そうか……」

ふと見たら箸が食べ終わっていた。

食べるの早くない？

食器を片付け戻ってきて席に着き即話しかけてきた。

箸「悠、動かし慣れていた感じがしたんだが、どれ程ISを動かしていたんだ？」

悠「五年。」

即答した。

.....

辺りがシーンとした・・・

何か変な事言ったか？

「「五年!？」」「」

俺と千冬さん以外が全員一緒に言った。煩いな・・・

周りで聞き耳を立てていた者達がこっちに来て聞いてきた。

「五年前って・・・御神君の事ニュースとかに出てなかったよ？」

「それに最近もなかったよ？」

痛いところを突いてきた・・・

俺は当然のように振舞って言った。

悠「五年前は男の俺がISを動かせることを隠しての事だ。それが続いていて、最近のニュースにも出ていないと思う。」

嘘はついていない、肝心な部分は言っていないが・・・最近の事については適当に言った。

一夏とセシリアがトレイを持って立ち上がり戻しに行った。

やっと食べ終わったのか・・・箸と比べてだけど。

戻ってきた一夏が躊躇いながら聞いてきた。

一「もしかしてあの時に使い始めたのか・・・」

悠「ああ、そつだ。」

俺は肯定した。

あの時……一夏にとって最悪の日、俺にとって始まりの日。  
続けて一夏が聞いてきた。

一「じゃあ、て……いつ織斑先生に一閃二段の構えを喰らったのだ？」

悠「一閃二段の構え？」

初めて聞く言葉だ……

千「試合の最初にお前が織斑に喰らわせたやつだ、最初の私との試合でお前に一番最後喰らわせたやつと言えば分かるだろ？」

と千冬さんが教えてくれた。

俺は思い出しながら言った。

悠「ああ、あれか……その後少し経ってから一戦して喰らわされたよ。」

一「そうだったのか……って動かして間もない時に千冬姉と引き分けたのか!？」

驚いた声で聞いてきたが・・・

ゴス！

「「イッテエ〜！蹴りはないだろ!？」」

一夏が千冬さんに抗議した。

ゴス！

千「織斑先生だ、馬鹿者。そして言葉遣いにも気をつける。」

「「すいませんでした。」

千「わかればいい。」

手が届かないからって蹴りか・・・容赦ないな。

一夏がイッテエ〜と言って足を擦っている・・・かなりの威力だったんだな。

周りに居た一人の女子が一言。

「言葉遣いって言えば、御神君気軽に織斑先生と話していたよね？」

「うんうん、それに織斑先生、御神君の事理解しているみたいなきじだったし……」

「もしかしてネックレスをプレゼントしたのって御神君？」

最初の一言が原因で徐々に伝播していった……

引き分けに関しては誰も関心がないのか……？

これ以上変な事を聞かれる前に俺は両手を挙げて言った。

悠「分かった。教えるから落ち着いてくれ。」

俺の言葉に全員が黙った……が目が「早く言ってよ」と言う様な感じで睨んでいる。

千冬さんが適切な事を言ってくれると思うが変な誤解をされると思い、俺が言う事にした。

悠「機密情報もあるから言える範囲内で話す。だから追求も調べたりもするなよ、いいな？」

全員が頷いた。

悠「まず何故言葉遣いが砕けた感じになるかだが・・・俺にISを持たせて良いか織斑先生が2ヶ月ぐらい監視していたからだ。何で監視していたかと言うと、一言で言えば俺の性格に問題があったからだ。2ヶ月も監視していたから俺の事も理解しているのだろう。ネットクスは旅の土産だ・・・ISを持たせてくれた事に感謝していたからな。」

・・・大雑把に言ったけど。

悠「織斑先生こんな感じで合っていましたか？」

千冬さんに聞いてみた・・・というか話を合わせて。

そして出来る事ならこれ以上の伝播を防いで欲しい。

千「フム・・・妥当な回答だな。先程も言ったが重要機密情報があるから要らぬ詮索するなよ。」

少し考えた素振りをして全員に言った。

ふと時計を見たら、結構な時間が経っていた。

短い話だったのにな・・・

悠「・・・さてと、話し込んだしそろそろ部屋に戻るとするよ。」

俺は席を立ちながら言った。

これ以上説明を求められたら面倒なので切り上げる事にした。

千「そうだな、話は終わりだ。さっさと部屋に戻って寝ろ。」

千冬さんも立ちながら言い放った。

たぶん同じ気持ちだろう。

皆は不満気な感じで「え〜」と言った。

千「お前等、今からグラウンド二十周30キロの重り持って走るか  
今すぐ部屋に戻って寝る、どちらか好きなものを選ばせてやる。」

と千冬さんが言ったらオルコットが手を挙げた。

セ「最後に一つだけ悠さんに聞きたいことがありますわ。」



オルコットが喰らいついてきた。

周りから「おお」という称賛の声が聞こえる。

明日になっても聞けるのに・・・仕方ないか。

悠「何？」

セ「機体を調整しながら戦ったお相手は誰でしたの？」

この人、千冬さんが言った事疑っていたよ・・・

口に出して良いのか迷ったので千冬さんに任せた。

悠「はあ、まさかここまで根に持っているとは・・・織斑先生言わなければ良かったですね。」

千「そうだな・・・オルコット対戦相手は私だ。」

俺は脱力しながら、千冬さんは諦めた感じで言った。

その言葉に逸早く一夏が反応した。

「それは本当か！？悠！その時の千冬姉は全盛期だろ！それで引

き分けたのか!？」

一夏のおかげで全員が出鼻を挫かれた。

助かった・・・一夏が言わなければまた荒れることになるどころだった。

だけど一夏のマジな顔は少し引くぞ・・・

悠「ああ、織斑先生が近接ブレード一つだけだったから引き分けに出来たんだよ。銃器系があったら確実に負けていたな。」

箒「なぜそんな事をしたのだ？」

箒が若干呆れた感じで聞いてきた。

箒の質問に全員が「教えて教えて」と言わんばかりにウンウンと頷いた。

こいつ等は・・・そんなに聞きたいのか？

悠「その時は専用機じゃなくて、用意してもらったりヴァイブだったんだよ。それで機体の反応速度が遅かったから、そこだけ調整したんだよ。」

箒「あの時に言った、使い難いってこの時の事だったのか・・・」

篤が何時ぞやの時に言った事を思い出しながら口にした。

悠「そうだ。それに俺の実力が分からないのに、織斑先生が相手なんて誰も信じないだろ？だから言わなかったんだよ。」

千「お前等これで分かっただろ。これ以上の質問は許さん、さっさと部屋に戻れ。」

千冬さんの言葉で全員部屋に散っていった・・・

さすが千冬さんだな・・・

皆が散って俺も部屋に戻った。

部屋に戻ってある事を思い出した。

時期的に間に合うか分からないけど・・・

悠「さてと・・・久しぶりに見に行くか。」

ペットボトルを持って跳ぼうとした・・・

・・・ん？

使用できない・・・？

使えるときと使えないときの違い・・・ああ、恐らくアレか。

そう言えば一夏とオルコット戦のために切っていたからな。

システムを起動した。

月に照らされて花を散らしている樹・・・桜が咲いている所にきている。

悠「アレが無いと使えない設定か・・・連動しているのか、エネルギーを使うからか？・・・考えてもしかたないか。」

桜を見ながら一人愚痴を言った。

悠「まだ散ってないな・・・散っていたら花見の意味が無いからな。」

近くのベンチに座った。

花を散らしている桜を見ながら飲み物を飲んで隣に置いた。

悠「花はいい。何か落ち着く・・・気が済むまで見ていたいな。」

桜を見ながら言った。

・・・暫く桜を見て部屋に戻った。

再度シャワーを浴びベッドに入って眠りについた。

二十二話 称賛と花見 (後書き)

最後の辺りを寝ぼけながら作成したせいで、変な感じになっていました。

投稿した日の13時頃に修正致しました、呼んで下さった方々誠に申し訳ございません。

二十三話「改造と改良とカマ」(前書き)

暇つぶしに作成したらこのような物が出来上がりました・・・

あの人の登場は次回かその次に頑張らせてさせていただきます。

二十三話 改造と改良とカマ

二十三話

【改造と改良とカマ】

花見をした次の日のある時間・・・

千「悠、何をしている？」

悠「げげ！・・・千冬さん。」

現在・・・人が居なくなった整備室に勝手に入ってアポロンを改造している所を千冬さんに発見された。

俺は開き直り作業を続けながら言った。

悠「何故ここに・・・」

千「見回りだ。で何をしている。」

見て分からないかという感じで言い聞いてきた。



悠「ビットの改良と使う機会が少ないと思った両肩の2対ある装甲を1対を改造、1対を改良してみました・・・」

千「ほう、答える。」

ビットはオルコットのビットが一夏に破壊されたのを見て、銃型からダガー型に変えて肩の装甲と同じようにブレード兼シールドを展開出来るように改良した。

その分、展開したらエネルギーの消費も増えるが、常時使うわけではないから問題ないだろう・・・

肩の装甲は、刀型のブレードを破壊されたら足とビットしか攻撃手段が無くなると感じたので、1対を両刃型の長剣二本に改造して、もう1対の装甲はブレードに展開できるのを破棄してシールド兼スラスターにした。

足りない資材は・・・勝手に拝借した。

悠「と、こんな感じです・・・」

資材拝借を除いて千冬さんに説明した。

千「はぁ・・・使うのは構わないが無断使用は許さん。」

悠「すみませんでした。」

溜息をつき呆れながら言った千冬さんに頭を下げて謝罪した。

悠「さてと・・・痕跡を消して寮に戻ります。」

千「さっさとしろ。」

俺は言われたとおりにさっさと痕跡を消した。

悠「これでよしと・・・ではこゝ待て・・・ナンデシヨウ?」

立ち去ろうとしたら肩に手を置かれ止められた。

千「何のために待ったと思っている。」

悠「監視?」

千「違う。無断使用の罰(マッサージをして貰うだけだがな)を与えるために待っていたんだ。」

千冬さんの言葉に即答で答えたら即答で返された。

なんか別の意味が含まれている気がするのだが・・・

悠「織斑先生・・・マッサージですか・・・」

千「・・・気のせいだ。（何でわかった？）」

まあ俺のせいで精神的に疲れが出たのは事実だと思うが・・・

それにしてもマッサージって、前にも言ったけどたまには自分でしてよ。

千「人にして貰った方が気持ち良いのだ。」

悠「また読心術を・・・山田先生に『却下』・・・拒『認めん』・・・い『却下』・・・分かりましたよ。」

千「分かればいい。」

俺が言うことを悉く遮られ最終的に諦めた。

最後なんてフェイントで一夏の「い」しか言ってないのに・・・イエスだったら如何していたんだらう？

悠「それで何時部屋に行けば？」

まだ千冬さんはスーツ姿なので、いろいろする事があると思いい聞いてみた。

千「今から1時間後ぐらいに部屋に來い。」

悠「分かりました。マッサージが終わったら部屋に戻りますからね。」

千「・・・ちつ。」

釘を刺したら舌打ちされた・・・何故に・・・

そして別れてから部屋でシャワーを浴びて、一時間経つのを待って・・・千冬さんの部屋に行った。

ドアをノックし俺という事を言ったら「入れ」と言われたので入った。

つて、あの時声どうしたんだ？駄々漏れだったのでは・・・

ドアを閉めてイスに座り、ベッドに腰掛けている千冬さんに聞いた。

悠「千冬さん、ドアに防音効果無いですよね？」

千「他の部屋には無いがここはあるぞ。」

ええ〜・・・嘘っぱい・・・

千「信じてないようだな。」

悠「当たり前でしょ。」

千「しょうがない奴だな。」

千冬さんが壁にあるボタンを押した。

入り口付近にスライド式の壁が出た。

いつの間に改造したんだよ・・・

千「と言う訳だ。何をしょうが問題ないぞ。」

悠「ですか・・・そういえば昨日、食堂での女子達による質問攻めにたいしての対応はあれで良かったかな？あ当たらずと雖も遠いからこらずで言ったけど。」

ちなみに「当たらずとも遠からず」は誤りだった。

俺はいつもと同じだったから気にしなかったが、千冬さんはどうだったかと思ひ聞いてみた。

千冬さんは少し考えて評価を下した。

千「監視か・・・当たってるし間違ったことは言っていないからな。それに特に変わった事は無いから問題ない・・・と思いたい。」

昨日の今日だし、まだ分からないからな・・・

悠「何が起こるか分かりませんからね・・・それじゃあ、マッサージをしますか。」

ベッドに腰掛けてマッサージをしばらく無言でしていた。

千冬さんに昨日考えていたことを聞いてみる事にした。

悠「千冬さん聞きたい事があるのですが？」

肩をマッサージをしながら千冬さんに尋ねた。

千「何だ？」

マッサージを止めて少し手を首に移動しつつ小声で言った。

悠「(貴女が

」。

ピク。

千「知らんな。」

悠「一瞬、脈が乱れましたよ。」

ベタな鎌<sup>カマ</sup>を掛けた。

うん、ベタだね。

千「・・・誰にも言うなよ。」

悠「分かっていますよ。」

意外とアツサリ認めたな・・・知らぬ存ぜぬを通すと思ったが・・・

千「何で知った。」

悠「昨日花見をしていて、その時に思い出し予想をして、鎌<sup>カマ</sup>を掛けました。」

と首から手を離しながら言った。

昨日、花見をしていて気になっていた。

そういえば、あれはどうなったのかと。

国、企業にも無いのは（違法行為で）知っているので、残っているのは東さんの所か千冬さんのどちらかだ。

学園の為か、一夏の為か分からないけど、可能性として千冬さんなら有りと思った……

奪われたって可能性もあるけど、無いと思って除外していた。

千「ハア……私はつまらない手に引っ掛かったのか……」

千冬さんは溜息を吐きながら脱力した。

悠「まあまあ。」

ベッドに腰掛けながら言った。

千冬さんは不貞腐れた感じで文句を言った。



千「何がまあまあだ。全く・・・で何が望みだ。」

悠「望みは無いですよ。ただ役に立てるか分からないけど・・・」

俺はアポロンの待機形態の指輪をとって千冬さんの手に持たせた。

悠「使える所があるか分かりませんが使ってください。」

千「・・・分かった。何故そこまでする？」

千冬さんの言葉に少し考えて答えた。

悠「そうですね・・・与えて貰ってばかりなのは嫌なんですよ。それに・・・」

恥ずかしいから言うのを躊躇った。

なかなか言わない俺に千冬さんが少し強めの口調で言った。

千「それに？何だハッキリ言ってみろ。」

悠「分かりましたよ。・・・（俺のことを愛していると言った貴女がどんな形でも傷付くのを見たくないから。」

と小声で言っただけだ。

千冬さんの反応を待たずにベッドから立ち上がって普通に言った。

悠「政治関係や外交関係は無理でも、武力関係なら出来る限り何とかするよ。一夏が対処できるなら任せて頑張らせるが無理なら手伝うよ。例え周りに危険視されてもね。」

物凄く恥ずかしく寒いことを言ってしまったから部屋を出ようとした。

カチャ！カチャ！

・・・カチャ？ふと見たら手錠が俺の右手に掛けてあった。

そしてもう一つは千冬さんの左手に掛かっていた。

何時の間に手錠を用意したんだよ！？

悠「千冬さんいったい何をするつもりですか！？」

千「・・・十五歳位の若造が・・・人のことを考えてないで自分のことを考える・・・」

と、言いながら俺をベッドに仰向けにして馬乗りになった。

俺は切羽詰った感じで言った。

悠「そうですね、今が考える時ですよ。で？何をするのですか？」

千「何をするのだろうか……」

悠「あれはダメですからね……俺は行為を誘う為に渡したのではなく、「力があれば何か出来たのに」って後悔して欲しくないから渡したのです。それに千冬さんなら間違った事には使わないと思っているので。」

と、言ったら残念そうな、嬉しそうな複雑な顔をした。

そしてすぐに呆れた感じで言ってきた。

千「……全く他の女子にも同じようなことをするなよ？」

悠「どんな事かは知りませんがしませんよ。それより手錠外してください。」

千冬さんの言葉に即答し外してくれるようお願いした。

千「諦める。今夜はこのまま寝るぞ。」

即答に即答で返してきた・・・諦めろという言葉で・・・

いいさ・・・後で部分展開して外すから・・・

千「ちなみにこれを外したら、罰として一週間私との組み手と、この部屋での生活と説教だ。」

悠「・・・卑怯だ、横暴だ、分かりましたよ。それじゃ寝ますよ、千冬。」

いろいろ諦め、ヤケクソ気味に言った。

千「もっと優しく私の名前を言えないのか？」

悠「・・・寝る前になら言ってあげるよ。」

呆れながら、上半身を起こし千冬さんを引き寄せて言った。

俺はベッドに横になって千冬さんは顔を埋め電気を消して言った。

千「明日も早いし寝るぞ。悠。」

悠「・・・分かりましたよ。千冬。」

そして千冬さんに抱かれたままの状態で眠りについた。

千「・・・悠。」

悠「何？」

と思ったら、いきなり話しかけられた。

何故か不機嫌な感じで喋りだした。

千「昨日いつ花見に行ったのだ？私が部屋に行ったら居なかったがその時か？」

悠「……さあ何時だったか……って何時来たのですか？まさか・  
・勝手に部屋に侵入したのですか？」

とりあえず慌けて話を逸らした。

千「そんな事はどうでもいい。さあ、吐け。抜け出したのだから？言  
ったほうが楽になれるぞ。さあ。」

どっかの尋問官の感じで言ってきた。

しかもそんな事って……自分のことは棚に上げてですか……

ここで迂闊に答えたら何をされるか予想が出来ない……

どう答えようか迷っていたら、千冬さんがどこか勝ち誇った感じで  
言った。

千「沈黙は肯定と受け取って良いのかな？」

悠「いや・・・」

千「心拍数が上がっているぞ。」

胸に顔を埋めているのでバレバレだった・・・

諦めて千冬さんに聞いてみた。

悠「・・・で、何が望みですか？」

千「花見に行くぞ。」

千冬さんの言葉に呆れながら答えた。

悠「今からですか？それに勝手に抜け出したりして良いのですか？」

千「今からだ。教師の私が許可する。」

悠「職権乱用・・・」

ボソツと言ったら頬をつねられた。

千「黙れ。違反の常習者が文句を言つな。」

悠「分かった。分かりましたから手と手錠を放してください。」

頬の手を離し、手錠を外そうとして千冬さんがこっちを見た。

悠「どうかしたの？」

千「逃げるなよ？」

悠「逃げませんよ。」

即答した。

何をされるか分からないからな……

千冬さんは満足した感じで頷いた。

千「ならいい。」

手錠を外してもらってベッドから出てISを装備し、千冬さんを抱えて昨日の所に行った。



昨日に比べて桜の花が減っていたが、まだ残っていた。

今は、迷彩とPICを使って千冬さんを抱えながら浮いている。

悠「散ってなくて良かったですね。」

千「そうだな。」

しばらく無言で眺めていたら千冬さんが満足した感じで小声で言った。

千「（悠、もういいぞ。」

俺は頷くだけにして戻った。

部屋に戻り千冬さんを降ろしISを解除した。

カチャ！カチャ！

・・・

悠「・・・またですか？」

千「当たり前だ。」

ベッドに入り千冬さんに尋ねた。

悠「そういえば、千冬さん何時俺の部屋に侵入したのです？」

千「私は「行った」とは言ったけど、「入った」とは一言も言っていないぞ。あと「居なかった」は呼んでも返事がなかったからだ。悠がうるたえた顔、見ていて楽しかったぞ。」

どこか嬉しそうな感じで千冬さんが言った。

俺が間違った解釈しただけか・・・

しかし何故楽しいのかは分からないが・・・

気にするだけ無駄か・・・

悠「そうですね・・・明日も早いから寝よ？」

眠いから千冬さんに促した。

千「そうだな。」

千冬さんは顔を埋めながら言った。

悠「おやすみ千冬。」

千「おやすみ悠。」

今度こそ俺は眠りにつけた。

深い眠りに……

S I D E   I N   千冬

悠「ZZZZZZZ」

千「（全く……一夏以上に恥ずかしい事を口走る……）」

思い出しただけでも恥ずかしい。

だが悠の言っていた事は、的を得ていない訳でもない。

確かに一夏が学園に居ることによって、何かしら外部からの介入があるかもしれない。

一夏に任せると言っていたが一夏の事も一応考えているのだな・・・面倒だからかも知れないが。

その時に対応できなければ、後悔もするし悲しみもする・・・見たくないのだな。

だが与えて貰ってばかりとは・・・居場所か？・・・分からない。

それに・・・

千「使える所があれば・・・まさかあの事を言われるとは思いませんでした。しかも首に手を回して脈まで計って言うのだからな。」

首に手を回した時に違和感があったが、「あれ」を言われた瞬間に少なからず動揺してしまった。

それに知らぬ存ぜぬを通して悠はこれを渡してきただろうな。

あれがあると確信して・・・

溜息を吐き悠を見た。

千「（誰にも渡したくはないな・・・）」

そう小声で言って眠りについた。

S I D E O U T 千冬

二十三話「改造と改良とカマ」(後書き)

ベタな鎌掛けでしたね・・・だが気にしない。

調べたら「カマを掛ける」って「鎌を掛ける」なんだと知りました。

作者はずっと何のカマか分かりませんでした・・・オカマじゃないことは分かっていますが・・・勉強になりました。

ご感想お待ちしております。

## 二十四話 飛行と墜落

### 二十四話

### 【飛行と墜落】

四月下旬・・・桜の花が全部散ったころ。

クラス全員がISを装着する際に基礎となる衣装、ISスーツを着ていた。

一夏も俺も例外ではない。

教師側は着ていないけど・・・千冬さんは全員が居ることを確認して言った。

千「これよりISの基本的な飛行操縦を実践してもらっ、織斑、オルコット試しに飛んでみせろ。」

オルコットが展開しISを装備した・・・あれ？一夏は？

ふと見たらまだ展開できず苦戦している。

千冬さんが「集中しろ」と急せかしている・・・そろそろ手が出そつで危ないな。

二度の千冬さんの言葉で白式を展開、装備した。

一夏とオルコットがP.I.Cで浮いている。

千「よし、飛べ。」

二人が飛んだ。

セシリアが一夏の先を行った。一夏は遅れてセシリアを追っている。

千冬さんがインカムを持ち一夏を見て言った。

千「織斑、何をやっている。スペック上の数値ではオルコットより早いぞ。」

さすが千冬さんだな、飢無し鞭打ちをする人だ。

視線を感じて見たら、いつの間にか千冬さんが近くに居てこちらを見ている。

悠「どうしましたか？織斑先生？」

千「何か失礼な事を考えてなかったか？」

悠「全くこれっぽっちも考えていませんよ。・・・（私は飛ばなく



て良かったのですか？」

気になったので小声で聞いた。

千冬さんが小声で言ってきた。

千「（悠、戻しても構わないぞ。」

言われたので頷いて遠隔コールした。

右の中指に指輪が現れた。

現れたのを確認したら千冬さんが言った。

千「御神、お前も飛んで見せる。」

悠「アイアイサー。」

ゴス！

頭を殴られた。

千「真面目に返事をしろ。」

悠「失礼しました。では。」

ISを展開し装備した。

機体が多少変わっている事に周りが気付き聞いてきた。

「御神君の機体以前と少し変わってない？」

「うん、腰と肩の装甲が変わっているね。」

とりあえず説明した。

悠「人知れず改造していたからな。」

千「そうだったな、『無断』で『勝手』に『侵入』して改造していたからな。」

ダメな所を強調して周りに聞こえるように言った。

本「かみゆ〜ダメだぞ〜」

のほほんさんに言われた。

本名が「布のほとけ仏 本音ほんね」だけど・・・微妙に癒しのんびり系の人だし、苗字と名前の頭の部分をとって「のほほんさん」と呼んでいる。

ちなみに「かみゆ〜」はあだ名。最初は「みかゆ〜」だったけど「みかん〜」に聞こえたので違うのにしてもらったら「かみゆ〜」になった。

悠「次からは気をつけるよ。それにその事で織斑先生にこっ酷く叱られた・・・様な気がする。」

千「こいつの真似はするなよ？分かったら返事をしろ。」

「ハイ」

とクラス全員（飛んでいる一夏とオルコット・・・と二人を見ていた箒を除く）が返事をした。

千「よし、御神飛んで見せろ。」

悠「分かりました。」

俺は地面を蹴って飛んだ。

こっちの方が早く飛べるからだ・・・気づいたのは一番会いたくない者と遭遇してしまった時だ。

・・・なんで存在しているのかも理解したくないぐらいの生物、まさに悪魔<sup>デビル</sup>、モンスターだ。

出会わないよう避けて通っていたが、運悪く出会ってしまった。

異常気象のせいかわからないが・・・突然、空からそいつ等が大量に降り立った瞬間、俺はISを瞬時に展開し地面を蹴っ飛ばしてその場から逃げた。

その時に地面を蹴った方が早く飛べるのに気づいた。

・・・と、思い出したくもない昔のことを思い出していた。

俺は一夏の速度に合わせて話しながら飛んでいる二人に追いついた。

追いついたらセシリアが俺のほうを見て話しかけてきた。

セ「悠さんはPICを使って飛ぶのではなく、地面を蹴って跳躍して飛ぶんですね。跳躍する事でPICの起動を待たずそのまま加速して飛べるからでしょうか？・・・悠さん、顔色が優れないようですが？」

悠「ああ、蹴った方が早いし慣れた・・・さすがに五年も使っていたから何かに気付くし扱いも上手くなる。セシリアもブルーティーズを制御しながら自身も高速移動しつつ攻撃できるようになるさ。顔色は・・・気にしないでくれ、すぐ治る。」

俺は遠くを見ながらセシリアに言った。

ちなみに少し前にオルコットからセシリアと呼んでくださいと言われたので呼ぶ事になっている。

セシリアの会話が終わったら一夏が不満そうな声で言った。

「悠は何で模擬戦だけしかやってくれないんだ？」

試合が終わってから一夏にISの事で教えているのは、筭とそこに居るセシリアだ。

セシリアは優等生であるから知識的に豊富なのだが・・・筭の説明は・・・擬音ばかりだった。

俺のように教えて貰わずに使っている者としたら確かにその擬音も分からないでもないが・・・やっぱり慣れだな。

それに横槍入れたら睨まれたからな・・・だけどちゃんとした理由もある。

悠「俺は独学だったから教えるのは苦手というか無理なんだよ、俺も教えて欲しい所もあるんだ。だから模擬戦での訓練しかできないんだよ。」

俺が言い終わったらセシリアが一夏と話した。

邪魔したら後が面倒なので無視した。

ふと下を見たら、千冬さんが腕を組んでこっちを睨んでいた。

箒も怖い顔で一夏の方を睨んでいた。

クラスの者は二人が怖いのか千冬さんと箒から離れている・・・真耶さんもだし。

悠「(どれだけ目が良いんだよ・・・)」

俺は寝転んで飛びながら青空を見た。

悠「・・・いい天気だ。」

箒が一夏にたいして早く降りて来いと怒鳴っていたが無視した。

千「織斑、オルコット、御神、急降下と完全停止をやってみせる。目標は十センチだ。御神は一センチだ。」

・・・は？

俺は一夏とオルコットに聞いてみた。

悠「なあ、何で俺だけ一センチ？」

一「五年も動かしていたからだろ？」

セ「恐らくそうかと思えますわ。」

悠「だよなあ。」

俺は溜息をつきながら急降下した。

そのまま地表から一センチで停止した。

千冬さんならミリ単位で調整できると思うが俺はそんなシビアな事をしたくない。

と思っていたら、オルコットが降りてきて丁度十センチで停止した。

さすが代表候補生、ちゃんと完全停止ができています。

俺とオルコットが一夏を見た。

一夏が降りてきているが・・・嫌な予感がする。

ズドーーーーーン!!!!

予感的中した・・・停止が出来ずそのまま突っ込み、小さなクレイターが出来ていた。

心配な者はクレーターを見ている。

あと少々だが笑い声が聞こえてくる……

悠「……笑う事に文句を言う訳ではないが、自分が動かしてこうなる可能性がある事も理解しておいた方がいいぞ……さすがにここまで無いと思うが。」

少し冷めた感じで回りに聞こえるように言った。

ゴン！

千「私の言葉をとるな。墜落した馬鹿者、誰がグラウンドにクレーターを作れと言った。」

千冬さんが呆れた感じで俺の頭を軽く殴り、一夏が降り……もとい落ちたところを見ながら言った。

「……すみません。」

姿勢制御をし上昇してクレーターから出てきた。

筈が一夏の所に向かっている。



篝「情けないぞ、一夏。昨日私が教えたばかりだろう。」

一夏に昨日のことを言っている。

セシリアも遅れてだが一夏の方に向かってる。

俺は向かわず見ている。

本「かみゆゝは行かないの？」

と後ろから、のほほんさんが聞いてきた。

悠「行っても意味ないでしょ？」

本「それもそうだね。」

と受け答えも、のほほんとしている。

俺も、のほほんとしていたら、千冬さんが篝とセシリアが睨み合っている方に歩いていった。

千「御神、布仏と話をしないでついて来い。」

悠「わかりました。それじゃ、のほほんさん。」

本「がんばってね〜」

千冬さんに言われ、のほほんさんに一言言って千冬さんの後に続いた。

千「馬鹿ども、授業の邪魔だ。他所でやっている。」

一夏の前で睨み合っていた、二人を押しつけて一夏の前に立った。

さすが千冬さんだな、箒とセシリアを馬鹿どもだからな・・・

千「織斑、武装の展開をしろ。それくらいは自在にできるようになつただろ。」

一「は、はあ。」

確か一夏は展開はできるけど自在とは言えるレベルでは無かった筈。

ここで突っ込んで殴られるだけだし黙っておこうか・・・

千「返事は『ハイ』だ。」

「は、はい。」

千「よし、はじめろ。」

言われて人が居ない事を確認してから、数秒かかって雪片を出した。

千「遅い0.5秒で出せるようにしろ。」

確かに遅いけどこれでも早くなった方だ。

千「オルコット、御神、武装を展開しろ」

「はい」

俺は手を少し前に出し展開した。

もちろんセシリアの様に、横に武器を向けて展開せずに地面に向けて展開している。

千「さすが代表候補生と放浪癖所持者だな。ただしオルコットそのポーズをやめろ、横に銃身を展開して誰を打つ気か。正面に展開できるようにしろ。」

セ「これはイメージを「直せ。いいな。」はい……」

セシリアの抗議を言葉二つと睨み一つで黙らし……調教した。

確かに横に人が居たら危ないからな……

それと何故に放浪癖なんだ……確かに約五年も旅していたし、学園に来てからも度々抜け出しているのだが……

千「オルコット、接近用の武装を、御神ももう一つ武装を展開しろ。」

悠「はい。」

セ「え、あ、はい。」

俺は普通に、だがセシリアは慌てて返事した。

刀型のブレードを収納し、展開した。  
クローズ

先程の物とは違い両刃の長剣を二刀展開した。

武器名称「月光」と「月影」

—「何時の間に……」

悠「ああ、この部分の兵装を改造して造った。」

この部分と言いつつ、両肩の装甲を指した。

「そう言えば一対装甲が無いな・・・気づかなかった。」

悠「折角こっそり造っていたのにな、織斑先生にバレてしまったんだよ・・・」

俺が言ったら千冬さんが呆れた感じで言ってきた。

千「織斑も真似するなよ・・・オルコットまだか？」

長い会話をしていたがまだ展開ができずにいた。

セ「ああ、もう『インターセプター』！」

武器の名前をヤケクソ気味に言った。

確かこれは教科書の頭のほうに書いてあった『初心者用の手段』だった筈。

候補生のセシリアとしては屈辱だろうな・・・

千「・・・何秒かかっている。相手にも待ってもらおうのか？」

セ「実戦では間合いに入らせません。問題ありませんわ！」

つて一夏に懐に入られたのか・・・？

と思っていたら千冬さんも同じ事をセシリアに言った。

言われたセシリアは数秒経ったら、一夏を睨んだ。

プライベート・チャンネル  
個人間秘匿通信でもやっているのか、一瞬だけ一夏に変化があった気がする。

千「時間だな、今日の授業はここまでだ。織斑はグラウンドを綺麗にしておけよ。」

俺はISを解除してさっさと帰った。

恐らく手伝ってくれと言ってくるからな・・・

俺は、真耶さんと歩いている千冬さんに追いついた。

悠「織斑先生。少し時間頂けますか？」

千「・・・二分だけだぞ。山田君は先に行ってくれ。」

山「わ、わかりました。」

山田先生が何を勘違いしたのか恥ずかしがって先に行った・・・

俺は呆れながら千冬さんに言った。

悠「何を妄想したのか・・・これ以上預けなくて良かったですか？」

千「ああ、僅かしか使える所がなかったが・・・助かった。それだけか？」

悠「あと山田先生が向こうで待っているようなので、早めに行かれた方が無難ですよ・・・」

山田先生が歩いては止まり、歩いては止まりを繰り返しながらこちらを見ている・・・

千冬さんは呆れた感じで歩きながら言った。

千「そうさせて貰う・・・」

千冬さんが山田先生に追いつき何かを話している。

しばらくしたら千冬さんがヘッドロックを山田先生に仕掛けている・

悠「また何か言ったのかな・・・まあ・・・自業自得って事で無視しよう。」

言葉通り無視して俺は歩き出した。



二十四話 飛行と墜落 (後書き)

武器に名前を付けてみました・・・安直過ぎるが気にしない。

感想お待ちしております。

二十五話 案内と逃走 (前書き)

やっと出番が来ました。

二十五話 案内と逃走

二十五話

【案内と逃走】

一夏がグラウンドに墜落した日の夜の8時頃……

夕食を食べて中庭に来ていた。

夕食後の自由時間に一夏クラス代表決定おめでとうパーティーみたいなのをするらしい。

面倒と思いつつ後で行くつもりだ……

それに……

悠「この時間は誰も居ないだろう。」

最近はゴタゴタしていて演奏していない……

一回部屋で歌って居たら、ドアがミシミシと音がしたことがあった。

何事かと思いいドアを開けたら……人が……結構な人が居た事があった。

そんな事があり歌を歌うなら、人が居ない外にすることだなと思っ  
た。

キーボードを展開して何の曲にしようか考えた。

ちなみにキーボードは千冬さんに注意されていたがまだ量子化して  
いる。

だって便利だろ？

・・・よし、あれにするか。

数十秒かけて曲を選んで弾き始めた。

悠「　　」

・・・

S I D E I N ?

学園校門前に着いた。

？「ふん……ここがそうなんだ。」

ポケットから紙を取り出しながら辺りをとりあえず見回した。

？「受付って何処にあるのよ？迎えがないって聞いていたけど……  
本当にいないし。」

取り出した紙を見て、さらに文句を言った。

？「本校舎総合事務受付って……だから何処にあるのよ。」

紙をポケットに押し込めて歩き始めた。

？「探せばいいんでしょ……探せばさあ。」

改めて見回してみたがどの校舎にも灯りが無い。

夜遅いし学生は寮に居ると思うから誰も居ない。

？「生徒とか・・・教師・・・居ないかな・・・ん？」

声がした・・・歩いていくと誰かが歌っている。

高い声・・・女性かな？

私に気付いてないし、歌い終わったら受付が何処にあるか聞いてみるか。

そう思っていたら歌い終わった。

さて訊いてみるか・・・

？「ねえ、本校舎一階総合事務受付って何処にあるか知らない？」

話しかけたら驚いたかビクツとした。

驚いた者は恐る恐る私のほうを向いた。

振り向いた顔を見て今度は私が驚くほうだった。

S I D E O U T ？

歌い終わったら、誰か知らないがいきなり話しかけられた。

この時間なら居ないと思ったのに……油断していた。

後ろを向いたらカバンを持ったツインテールの女子が驚いて……

サイドアップテールだっけ……？ダメだ思い出せない……後で調べるか。

？「男！？」

悠「……ハア、またか。」

思いつきり脱力……凹んだ。

女と思っていたのか……高音で歌っていたからな、仕方ないか。

女子が呆れた感じで聞いてきた。

？「またって何がよ？」

悠「自己紹介のときにクラスの女子に同じ事を言われたんだよ。で、本校舎総合事務受付だっけ？不審者じゃないと思うから・・・編入生？・・・転校生？ってどっちも一緒か、ついて来て教えるの面倒だから。」

俺も呆れて受け答えし、キーボードを量子化させて歩き出した。

カバンを持った女子が何かに気付いて慌ててついて来た。

？「ちょっとアンタ！さっき量子化させたけど専用機持ち？」

悠「・・・御神 悠、専用機持ち。君は？」

名前が分からないから、先に名を名乗ってついでに相手の事も聞く。

名前を覚えてくれたら一石二鳥だ・・・教えてくれなかったら・・・どうしよう・・・。

？「中国代表候補生、<sup>ファン</sup>鳳 <sup>リンイン</sup>鈴音 同じく専用機持ちよ。」

悠「あゝ良かった。」

歩きながら安堵した。



訝しげに鳳<sup>ファン</sup>が聞いてきた。

鈴「何がよかったのよ？」

悠「名前を名乗ったのに、教えてくれなかったらどうしようかと思っ  
っていたんだよ。……ん？」

鈴「いきなり止まってどうし……」

ふと見たら訓練施設から一夏と箒が歩いている。

つい足が止まってしまった。

悠「まだあいつ等やっていたのか……鳳<sup>ファン</sup>どうした？」

振り返ったら鳳<sup>ファン</sup>が物凄い不機嫌な目で一夏を睨んでいた……

一夏の知り合いか？

一夏達が見えなくなったら、こつちを向いた。不機嫌な顔で……

鈴「……御神、織斑一夏がどのクラスか知ってる？」

悠「ああ、同じクラス……一組だ。あと一夏はクラス代表だぞ。」

少し引きつつ、再び歩き出した。

不機嫌な感じが何処にいったか、いきなり驚いた声で聞いてきた。

鈴「同じクラスって同じ歳なの!？」

悠「そっだよ・・・全く何歳に見えたんだよ？」

呆れながら聞いて見た。

鳳<sup>ファン</sup>が申し訳ない感じで口を開いた。

鈴「あたし達より上・・・」

悠「まあ、出会ったばかりだから仕方ないさ。」

俺は呆れながら言った。

気を取り直して鳳<sup>ファン</sup>が話しかけてきた。

鈴「そういえば、御神は専用機持っているんだから何処の候補生なの?」

どう答えたらいいか迷ったが、色々省いて説明した。

どうせ分かることだし。

悠「俺のISが特殊だから何処にも属さないって教えられたぞ。それについて国、政府から抗議があったらしいけど、どっかの誰か（束さん）が脅して黙らしたって。所属したくない俺としては有難い事だ。」

鈴「アンタ・・・普通は何処かに所属しないとISを与えられないのに、何で持っているのよ？」

確かISのコアは467個しか存在していない・・・しかも作れるのは篠ノ之博士だけだ。

しかもそれ以上作るのを拒否しているとの事だ・・・理由は分からないけど。

その467のコアを国家、企業、組織、機関に振り分けて開発なり研究なりしている。

そのコアを国家、企業等に所属していない俺が持っているのを疑問に思っているらしい・・・しょうがないでしょ、俺も知らないんだから。

悠「俺のISが篠ノ之博士が作った物だからじゃないかな？」

この際、嘘も方便で通す。

まともに説明なんて出来るものではないからな。

鈴「篠ノ之博士って……あの!？」

驚くか……まあISの生みの親だし。

ここで締めにはいる。

悠「と、言う事だ。あまり詳しくは言えないからな……事情を酌<sup>く</sup>んでくれると助かる。」

鈴「分かったわよ……て、何時になったら受付につくのよ!？」

どこか納得がいかないって感じで言っ、受付に着かないことに腹を立ててる。

悠「ここ、本校舎一階総合事務受付。」

すぐ下を指差して言った。

受付に連れて来ていたが話に集中していたらしく、<sup>ファン</sup>鳳は気づいてなかった。

鈴「アンタね・・・早く言いなさいよ！」

悠「ごめん。言うつもりだったけど、話が長引いてしまっていて言いそびれてた。次からは気をつける。」

素直に非を認めた。

鈴「いいわよ謝らなくて・・・案内してくれたんだし、それにあたしも聞きそびれてた。」

悠「それじゃ、お互い様って事で・・・さっさと受付を済ませよう。」

鈴「そうしょ。」

ん〜面白い性格だな・・・アップダウンが激しい・・・

受付の人が<sup>ファン</sup>鳳に受付が終わったことを告げた。

悠「<sup>ファン</sup>鳳は何組なんだ？」

鈴「二組。」

悠「そうか・・・一夏と同じにならなかったか・・・」

言って気づいた・・・さつき一夏を睨んでいたのでは？と・・・

案の定、鳳<sup>ファン</sup>が受付の人に不機嫌な感じで聞いた。

鈴「二組のクラス代表って、決まっていますか？」

「決まってるわよ。」

鈴「名前は？」

「え、ええと、聞いてどうするの？」

明らかに態度が変わっているから、戸惑いつつ鳳<sup>ファン</sup>に尋ねた。

鈴「お願いしようと思って。代表あたしに譲ってって」

言い終わってこっちに振り向いた。

打って変わってどこかスッキリした感じで鳳が口を開いた。

鈴「御神、案内ありがと。」

悠「気にするな。またな鳳<sup>ファン</sup>。」

鈴「またね、御神。」

受付を済ました鳳<sup>ファン</sup> 鈴音<sup>リンイン</sup>と別れた。

受付の人が二組のクラス代表を教えている・・・

受付の人、可哀相だな・・・とぼつちりにあつて。

それにしても、クラス代表が変わるのか・・・一夏よ成仏してくれ、と歩きつつ右手で十字に切った。

鳳<sup>ファン</sup>と別れて、食堂に行った。

一夏には一応、釘を刺してあつたが監視の為に参加した。

一夏クラス代表就任パーティーが始まっていて盛り上がっている。

本「かみゆゝ遅い。」

のほほんさんが俺に気づいて近づいてきた。

俺は頬を掻きながら言葉を濁した。

悠「夕食を食べ過ぎたから風に当たっていたんだ。それにしても人が多くないか？」

何かクラスメイトじゃ無い人もいる・・・気がする。

本「気にしちゃダメだぞ。」

悠「そんなものか？」

本「そんなものだよ。」

と、のほほんさんと軽いやり取りして見回した。

「夏がないな・・・聞いてみるか。」

悠「のほほんさん、主賓の夏は？」

「悠、助けてくれ。」



俺の声に反応してか女子の大軍団の中から声が聞こえた。

「ご愁傷様だな……」

俺は呆れながら近くの空いている席に着いた。

悠「無理だ。俺にそんな力量は無い。」

と一夏に言ったら軍団の中からリボンの色が違う人が出てきた。

二年生か？

黛「やっと来た。君が五年も旅していた御神君ね？私は黛まゆずみ薫子。  
よろしくね。新聞部副部長をやつてます。はい名刺。」

自己紹介と共に名刺を出してきた。

悠「よろしく。」

差し出された名刺を受け取りつつ言った。

黛「ではさっそく、五年間どこを旅してたの？」

ボイスレコーダーを俺に突き出し聞いてきた。

あんまり話すことは無いのだが・・・無難に言っておくか。

悠「全国各地を食べ歩いてた・・・あんまり質問しないで下さい。  
織斑先生に釘刺されているんだから。」

あまり人に言える話ではないからな。

黛「織斑君と同じ事を・・・だけどそれもそうね。それじゃ、あと  
二つ・・・まず、これ！この人について何か知ってる？」

言いつつ出したのは携帯の画面。

写っていたのは・・・

うん、俺だな・・・三年ぐらい前の。

俺は平然と言った。

悠「知らないけど、この人が何かしたの？」

黛「知らなければいいの。最後に何か一曲歌って。」

携帯を仕舞いつつ聞いてきた。

何で俺の画像があるかは言ってくれなかったが気にしないでおくか。それに何で学年違うのに歌の事を知っているのか、呆れながら聞いた。

悠「何で知っているのですか？」

黛「学園中で有名じゃない？SHLを潰す歌唱力って噂になってるし。」

ああ・・・確かに一回潰し(省略し)てしまったな。

だが学園中で噂って・・・

悠「マジ？」

黛「マジ。ではでは一曲どうぞ。ちなみに歌わないと帰れないから。」

黛先輩の言葉に周りの者が賛同した。

「うんうん。」

本「かみゆゝがんばって。」

—「頑張れ、悠。」

ドサクサに紛れて一夏め・・・

いつか覚えておけよ。

悠「本当は本格的にしたいが出来ないから・・・文句を言わないのと曲の詳細を聞かないという条件なら。」

黛「それでいいよ。」

悠「わかった。」

キーボードを出して弾き始めた。

約四分半の曲を引き終わって黛さんが一言。

黛「・・・確かに潰れるわね。」

悠「そうか？」

周りに聞いてみたら全員が頷いた。

って、関心が無さそうな筈まで頷くな。

控えなければな・・・

しばらくして手洗いに行くと、嘘を言って食堂から逃走した。

二十五話 案内と逃走 (後書き)

ベタな出会いでした。

鈴は友達としてやるかそれとも引っ付けるか・・難しい所ですが、惹かれるように頑張ってみます。

最近確認していなかったけど、総合PVが20万超えてました。

見てくださる方、評価をしてくださっている方ありがとうございます。

感想お待ちしております。

## 二十六話 鳳 鈴音の紹介

### 二十六話

【鳳<sup>ファン</sup> 鈴音<sup>リンイン</sup>の紹介】

目が覚めた・・・昨日は早く寝たから弁当を作る時間がある。

今ある食材を見て、しばらく考えた・・・

悠「・・・以外に少ない、だがそれでも作る。足りない分は食堂で追加すればいいかな。」

と、凝って作ったせいで出るのが遅くなった。

朝食をとって急いで教室に向かった。

本当は走ったら怒られるがこの際仕方ない。

教室の近くで、昨日見た顔がこそこそしている。

何をやっているのか・・・

教室から見えない位置から話しかけた。

悠「鳳、<sup>フアン</sup>時間が無いから早く出たほうがいいぞ。」

出る機会を待っていた鳳が驚いて小声で文句を言った。<sup>フアン</sup>

鈴「う、うるさいわね。わかってるわよ。」

悠「そうか。」

俺は小声で会話して教室に入った。

悠「ハア・・・間に合った。」

教室に入るなり溜息をついた。

教室は転校生の話をしている。

そこにいた者の事を言っているのだろうか。

まあ、出る機会を待っているのだろうか。

席に着くなり一夏が話しかけてきた。



「悠、遅かったな。」

悠「ああ……それより何かあったのか？」

「転校生が来るらしいってよ。中国の代表候補生だって。」

悠「まあ、時間が経てば分かるさ。」

「それもそうだ。悠、昨日逃げただろ？」

悠「当たり前だ。眠いのにはベッドで寝たいわ。」

一夏と俺の会話をよそに、周りは、いつの間にか転校生の話から、クラス対抗戦の話に変わり盛り上がっている。

話変わるの早いなと思って聞いていた。

「織斑君がんばってね。」

「今の所クラス代表で専用機持っているの一組と四組だけだから、余裕だよ。」

二組に候補生が転校してきているのだから……

と思っていたら隠れていた者が現れた。

だが出るの遅いな……そろそろSHLショートホームルームの時間だぞ……

鈴「その情報古いよ。」

格好良く参上したつもりだが・・・先程の格好を見ている俺からしたら面白い・・・

鈴「二組も専用機持ちがクラス代表になったから、そう簡単には優勝できないわよ?」

腕を組み、片膝を立ててドアにもたれつつ言い放った。

オイオイあれでは誰も入れないぞ・・・

いろいろツツコミが出来る状況だな・・・ネタに困らないだろう。

「夏が何かに気づいた感じで鳳<sup>ファン</sup>に言った。

「お前・・・鈴、鈴か?」

鈴「そうよ、中国代表候補生。鳳<sup>ファン</sup>鈴音よ。宣戦布告に来たってわけ。」

ふっと小さく笑みを漏らす。ツインテールが軽く揺れる。

ちなみに調べて見たら、ツーサイドアップだった・・・危うく恥をかく所だった。

そんな事は措おいとして・・・やはり知り合いだったか。

ただど気取った喋り方より昨日の砕けた感じのほうが似合っているのだが・・・それは本人の勝手だ。

そんな事よりやばいな・・・

—「なに格好つけてるんだ。似合わないぞ。」

鈴「な・・・なんて事を言うのよアンタは！」

俺は鳳ファンを退かす為に言った。

悠「鳳ファンSHLの時間だから教室に戻ったほうがいいぞ。」

千「そうだ。そこから退け。邪魔だ。」

俺と千冬さんの言葉がダブった。

鈴「なによ!？」

悠「げ。」

鳳<sup>ファン</sup>が声に反応して後ろを向きながら言った。

俺は、鳳<sup>ファン</sup>が千冬さんに反応した言葉にたいして言った。

オイオイ・・・千冬さんにその返答のしかたは自殺行為だぞ。

案の定、出席簿アタックが発動する。

バシン！

鈴「イッタ〜・・・ち、千冬さん・・・」

頭を抑えながら千冬さんを見て・・・怯えている？

一夏と知り合いだし、千冬さんとも知り合いなのだろう。

ん〜苦手なのかな？

千「織斑先生と呼べ。さっさと教室にもどれ、馬鹿者。」

鈴「す、すみません。」

千冬さんに謝りながらドアから離れる。

鈴「また来るからね！逃げないでよ、一夏！悠！」

バシン！

再度、出席簿攻撃が炸裂した。

何故か今回は威力が上がっている感じがする。

千「・・・さっさと戻れ。」

怒っている気がするんですが・・・

鳳<sup>ファン</sup>は震えながら返事をした。

鈴「は、はい！」

頭を抑えながら走っていった。

廊下は走ったらダメだぞ

って、さっき名前で呼ばなかったか？

ん〜気軽に話せる者って思っているのだろうか。

と思っていたら。

第「……一夏。今は誰だ？知り合いか？えらく親しそうだったな？」

セ「い、一夏さん。あの子とはどういう関係で……」

第とセシリアが一夏に質問攻めしている。

さっきの惨劇が遭ったのにだ……他の女子達も一夏の周りに居る。

おお、凄い猛者達だ、賞賛に値するぞ。

そこに千冬さんが呆れ半分、怒り半分で近づいた。

バシバシバシバシ！ゴン！

そこに居た者たちと俺が叩かれた。

千「さつさと席に着け、馬鹿ども。」

いや……俺座っていたし、何故に拳骨……

全員が席に戻った。

俺は数分間、頭を擦りながら授業を受けた。

昼休み・・・

篤「お前のせいだ！」

セ「あなたのせいですわ！」

と、二人が一夏に文句を言った。

何故かと言つと・・・

授業中、恐らくだが鳳ファンの事を気にしてか二人が殆ど聞いていなかった為である。

二人とも真耶さんの注意が五回か六回受けて、千冬さんの出席簿アタックが三、四回喰らっていた。

自業自得でもあるんだが、一夏のせいでもある。

難しい判定だな。

「何で悠は、鈴の事を知っていたんだ？」

「一夏が俺のほうを向いて聞いてきた。」

「それよりも俺は腹が減っているの・・・」

悠「それよりも学食に行こう。歩きながらも話せる。」

「それもそうだな。聞きたい事は食べながらもできるしな。」

「箒とセシリアとクラスメイト数名が俺と一夏の後を付いてくる。」

「俺は弁当を持って歩きながら説明した。」

「外に居たら鳳ファンと会って、受付に連れて行ったことを。」

「説明を聞いた一夏が一言。」

「「知っているなら、何で教えてくれなかったんだ？」」

悠「一夏の事を知っているみたいだし、教えたら怒ってきそつ  
だった。」



と言つて学食に辿り着いた。

俺は券売機で今日の弁当に合う物を選んだ。

一夏は日替わりランチ、箸はきつね？うどん、セシリアは洋食ランチだな・・・

鈴「待っていたわよ、一夏！悠！」

鳳<sup>ファン</sup>が道を塞いでいたが、何とか食券を出して一言。

悠「鳳<sup>ファン</sup>そこに居たら食券出し難いし、通行人の邪魔になるぞ。」

一「そつだぞ、鈴。」

箸「そつだな。」

セ「そつですわね。」

オイオイ・・・俺に続くな。

鈴「う、うるさいわね。わかっているわよ。」

四人に言われて鳳<sup>ファン</sup>が不貞腐れながら退いた。

分かっているなら立たなければいいのに……

それに……鳳ファンが持っている物を見て一言。

悠「ラーメンのびるぞ。っと。」

一「のびるな。ん？」

一言いって頼んだ物が出てきた。

一夏が出てきた物を見て口を開いた。

一「悠もラーメンか。」

悠「ああ、これだけでは足りないからな。」

俺は視線を手持ちの弁当に移た。

鳳ファンが持っているものに気がついて聞いてきた。

鈴「アンタ何もっているのよ？」

悠「弁当。略さず言つと、俺の手作り弁当だ。」

鈴「料理もできるんだ……」

呆れた感じで言った。

料理も、って……他何かあったか？

「あっちのテーブルが空いてるな。行こうぜ。」

考えていたら席を見つけた一夏が皆に促した。

テーブルについて、俺は会話に参加せずにまず食べる。

ラーメンがのびるからな。

一夏が鳳<sup>ファン</sup>に質問攻めして、それに鳳<sup>ファン</sup>が怒った。

鳳<sup>ファン</sup>も一夏に言った。

鈴「アンタ、何IS使ってるのよ。ニュースで見たときびっくりしたじゃない。」

言い終わったら箒とセシリアが一夏に詰め寄った。

説明を求めている。

セシリアの付き合っているかの質問に鳳<sup>ファン</sup>がトギマギしながら否定した。

鳳<sup>ファン</sup>の言葉に一夏も幼なじみと言った。

幼なじみと言われた鳳<sup>ファン</sup>は一夏を睨んでいる。

幼なじみだろうか？

俺はラーメンを食べながら、突っ込まず見ていた。

ズルズルズル・・・ラーメン美味いな。

そして弁当を開けた。

一夏が目聡く見た。

一「餃子が・・・」

悠「無臭ニンニク使用とニラ抜きだ。・・・頑張っ  
て説明し終わっ  
たら一個やる。」

一夏が早口で言い始めた瞬間、周りに怒られた。

誰も聞き取れないしわからんぞ・・・

気を取り直して鳳<sup>ファン</sup>の事を説明しだした。

一「鳳<sup>ファン</sup> 鈴音<sup>リンイン</sup>。小四の終わりに箒が引越して、入れ違いで小五の初めに転校してきたんだ。鈴とは中二の頃まで一緒だったんだ。」

周りに鳳<sup>ファン</sup>の事を説明してから鳳<sup>ファン</sup>に話しかけた。

一「こつちが箒、前話した事があつただろ。小学校からの幼なじみで、俺が通っていた剣術道場の娘。」

幼なじみって事で箒<sup>ファン</sup>と鳳<sup>ファン</sup>が睨みながら挨拶した。

鈴「ふうん・・・初めまして。これからもよろしくね。」

箒「ああ、こちらこそ。」

握手しながら火花が飛び交っている気がする・・・

大変だな、一夏よ。

何か忘れていている感じがするが、気のせいかな。

うん、気のせいだ。

セ、ン、ン、ッ！わたくしの事を忘れてはいませんか？中国代表候補生、

鳳<sup>ファン</sup> 鈴音<sup>リンイン</sup>さん？

おお、鳳<sup>ファン</sup>の衝撃があつてかすっかり忘れていた。

すまんなセシリア……

だけど自己紹介していないのに知っているのか？

鈴「……誰？」

やっぱり知らないよな……

悠「セシリア、自己紹介もしていないのに知ってるわけがないって……俺と一夏の時がいい例でしょ？」

セ「う……」

セシリアがショックを受けたか黙った……

仕方ないか……俺はセシリアに手を出しながら紹介した。

悠「えーと。こっちがセシリア・オルコット。イギリス代表候補生でクラスメイト。」

鈴「ふ〜ん、知らない。あたし他の国とか興味がないから。」

セ「な、な、な・・・」

セ「シリアよ今度からは自己紹介をする事だな・・・」

それに誰も人のことを知る暇なんて無いんだから。

鈴「で、一夏。悠って専用機持っているけど強いのか？」

おお。セ「シリアの話の途中でぶった切った話を変えた。」

自由奔放って言うか何と言うか・・・とりあえず行動って感じたな。

で、俺の事を聞かれた一夏が説明しだした。

どんな感じで俺を見ているのかな？

「ああ、強いぞ。俺とセ「シリア」の急造ペアで負けたし・・・それに全盛期の千冬姉と引き分けた、だってよ。」

千冬さんと互角って事で驚いている。

鈴「全盛期の千冬さんと引き分け！？あの千冬さんと！？ってアン

夕その時いくつよ?」

驚きの言葉と質問に一夏が答える。

「一 篤が転校して行った、後のことだからな・・・十歳ぐらいか? 千冬姉が肯定して言ったんだ。あと悠はそれからISを動かしてるって。」

鈴「そんな歳で引き分けて・・・どれだけ強かったのよ。さらにその時からだから・・・五年も動かしてたの!??」

呆れ驚き俺に質問してきた。

悠「ああ。だけど操縦技術が上手いだけだぞ。戦略とか誰かと組んでの連携はアウト、お手上げた。」

「一応ドイツで訓練していたから知識としてはあるのだが苦手だった。

味方と敵部隊の武装、配置、状態、陣、戦力差、地形とか・・・いろいろ考えなくてはならないから面倒だ。

鈴「それじゃ、悠から見て一夏は強い?」



鳳ファンがこっちを見て聞いてきた。

その言葉に俺は即答した。

悠「動かして間もないんだ。それぐらい察してやってくれ。」

要するにまだまだ、だ。

悠「だが伸びはいいからな期待できるぞ。」

と付け足して上げた。貶けなしてばかりだと凹むでしょ。

察ファンした鳳が一夏を見て恥じらいながら言った。

鈴「そ、それじゃ。一夏、あたしがISの操縦教えてあげようか？」

その言葉に箒とセシリアが反応した。

思いつきりテーブルを叩き二人が立ち上がった。

あゝ弁当が跳ねたぞ。

俺はこれ以上被害が出ないようにするために食べ始めた。

一夏達の話は続いていて、二組の者が一組の一夏を教えるな、から一夏と一緒に食事をしていたって話に変わっている。

コロコロとまあ、話が弾むな・・・

俺は弁当を食べ終わり、ラーメンのスープを飲んでいる。

一「・・・鈴とは幼なじみで、実家の中華料理屋に食べに行っていた関係だ。」

おお、面倒だからって簡潔に答えたよ。

さすがにスープ全部を一气には飲み干せないので一度置いた。

箒「な、何？店なのか。」

セ「あら、そうでしたの。お店なら不自然な事は何一つありませんわね。」

周りの者達もホツとしている。

一「親父さん、元気にしてるか？まあ、あの人は病気に縁が無いよな。」

親父ね・・・

鈴「あ……うん、元気……だと思つ。」

歯切れが悪いなと思ひ見た。

表情に陰りがある……

それに……だと思つて、長い時間会っていないのか？

何かあったのだろうか……触れないでおくか。

一夏も恐らく違和感を感じているな……

それにしても……嫌な事を思い出した。

俺は気分を変えるために残りのスープを飲みにかかった。

その間にも話は進んでいて、一夏の放課後の争奪をやっている。

箒とセシリアは一夏の訓練を持ち出して鳳ファンに一夏を渡さない？様にしている。

その事に鳳ファンが一言。

鈴「じゃあそれが終わったら行くから。空けといてね。一夏！」

と言いスープを飲み干して片付けに行った。

もちろん箒とセシリアも釘を刺す。

特訓が先と……

—「……悠。」

悠「何だ？」

—「一緒に訓練してくれ……」

脱力していないか……

—夏が言った瞬間、箒とセシリアが睨んできた……

とりあえず無難な事を言っておくか。

悠「ついて行くだけだ。訓練は箒とセシリアに任せるぞ。」

俺も片付けに行った。

早足で……

さすがに遅刻は避けたかったからな。

余談・・・・・・・・

教室に戻ってきた一夏が席につき一言。

一「そういえば、説明終わったのに弁当くれなかったな。」

悠「欲しかったのか？」

一「欲しかったわ。」

ふむ・・・そんなに欲しかったとは・・・

食べ物の恨みは恐ろしいからな。

悠「分かった。夜作って持って行ってやる。」

一「おお、やっと食べれる。」

そんなので喜ぶなよ・・・

それなら・・・

悠「一夏がクラス対抗で優勝したらクラスにも作ってやる、って言うて欲しいか一夏？」

一「・・・悠、俺をどこまで追い込むんだ？」

と一夏の恨めしい言葉に。

千「ほう、面白い事を・・・。織斑、クラス対抗戦、優勝しろ。安心しろ私も時間があれば鍛えてやる。」

悠「・・・よかったな、一夏。織斑先生に鍛えて貰えるなんて。」

俺は空笑いしつつ言っただけだ。

まさか千冬さんが聞いていたとは・・・絶対に一回は一夏を鍛えようだろうな。

まあ、一夏も強くなるし、優勝できたら飯も食べれる、正に一石二鳥だ。

一「・・・やれば・・・やればいいんだろう！やってやるな。やって

やるとも。」

おお、一夏がどこか壊れた・・・

若干、狂戦士化しているが放課後までには直るだろう。

一夏のヤル気にみんなが拍手で答えた。

いいのか、こんなので？

ちなみに、放課後には一夏は元に戻っていた。

二十六話 鳳 鈴音の紹介 (後書き)

雑になってしまった気が……ま……いいか。

こんな感じに出来上がりました。

口調とか違和感がある気はしますが、気にしないでください。

感想お待ちしております。



二十七話 訓練と力づく (前書き)

やっと話がまとまりかけてきた・・・

鈴の性格と口調把握、難しいぜ・・・

## 二十七話 訓練と力づく

二十七話

【訓練と力づく】

放課後・・・第3アリーナ・・・

いつもは一夏とセシリアと俺で訓練しているのだが・・・

新たに登場した顔を見て、一夏が呆けた顔をしている。

箒が打鉄うちがねを装着しているからだ・・・

箒「・・・おかしいか？」

「いや、おかしいっていつか・・・」

セ「篠ノ之さん！？ど、どうしてここにいますの！？」

箒「どうしてもなにも・・・一夏に頼まれたからだ。」

「「そっなのか？悠？」

変なところで俺に振るな。

箒に睨まれただろ……

だが箒が打鉄を装備していることは僥倖だ。

悠「そうだと思え。だが一夏の近接格闘戦の訓練が疎かだからな……  
これなら……」

一夏の訓練のことを考えた。

どうせ箒とセリシアが一夏の取り合いをするんだ、片方を立てたら片方が怒り出すからな……と考えている最中に言い争いが始まっていた。

箒とセリシアが言い争っているのを止めないで、一夏が話しかけてきた。

「何がこれならなんだよ？」

悠「一夏の訓練だよ……箒、セリシア黙って聞け。」

……無視された……

……ブーッ！

ビットを2基パージし、二人の手前を撃ってこちらを向かせた。

箒「悠！何をする！？」

セ「悠さん！何をしますの！？」

突然の攻撃に二人が文句を言った。

これぐらいしないと聞かないからな。

悠「お前たちが無視したからだろうが！よく聞け、箒は近接格闘で一夏と戦闘しろ。」

箒「さすが悠だ。適切な対応だ。」

箒はどこか嬉しそうに賛同した。

だが・・・箒に一夏の相手を任されたのが気に入らなかったのかセシリアが抗議をしてきた。

セ「悠さん！なぜ「まあ、待てセシリア。対応は考えてある。」何のですの？」

抗議の途中だが遮った。

言いたいことは予想ができたからな。

俺はセシリアにその対応を教えた。

悠「セシリアはブルーティアーズを制御しながら攻撃出来るようにする為、一夏を的にして訓練しろ。」

一「何で俺が二人を相手にしないとイケないんだよ!？」

俺の提案に一夏が反抗した。

一夏の言葉を無視して箒とセシリアに諭す様に言った。

悠「箒もセシリアも一夏と訓練したいんだから、二人同時に相手をするしか手が無いんだよ。分かってくれ二人とも。納得いかなければ俺と一夏のペアで対戦するぞ?」

箒「それしか、手が無いか・・・」

セ「そうですね・・・仕方ありませんわ。」

二人は渋々だが納得してくれたな。

丸く収まってよかったぜ。

俺が満足な感じで浸っていたら、一夏がまた文句を言ってきた。

「俺に説明無しか!？」

言っても意味がないし・・・それにどう転んでも二人と戦闘する羽目になるんだ。

悠「それぐらい乗り越えられる・・・筈だ頑張れ。」

二人が一夏の方を向き臨戦態勢をとった。

篝「一夏、覚悟!」

セ「一夏さん、お覚悟を!」

「悠!覚えてろよ!」

二人がお命頂戴みたいな感じで言い攻撃しだした。

一夏よ頑張つて、千冬さんの肩の荷を少しでも楽にしてあげな。

と思いつつながら、ビットを飛ばしつつ戦闘を見ていた。

どこにビットを飛ばして援護をすれば、戦局が一夏に傾くかを思考

する。

俺にとって、人との連携の経験無さと力加減を何とかしないといけないからな……

まあ、実際にやらないと分からないがイメージしないよりはマシだろう。

それに見ておいて損は無い、分かることもあるしな。

……箒は訓練機だが、白式の一夏より近接格闘戦は上だ。

一夏は無駄な動きが多いが、箒は一夏より無駄な動きが少ない。

自分で気づいて修正していかないとな。

白式も一夏に合わせてくれてるらしいし……何とかなるだろう。

セシリアはビット二基が限界か……慣れたら全部使えるだろう。あと曲げることも。

代表候補生って事で若干？だが驕おこっていたのだろう。

これから精進すればいいさ。

一夏は動かして間もないが、あの時豪語したからな……実現できたらいいな……言った言葉を……起こってからでは遅いんだからな。

しばらく癖とかが無いか観察して、空を見たら一夏に飯を持ってい

く準備をしたい時間帯になってる気がする・・・

とりあえず三人に一言だけでも言っておくか。

悠「おゝい。俺は先に帰るけどお前たちは残るだろう?」

「「もちろん(ですわ)」「」

一夏を攻撃していた二人は当たり前だと言わんばかりに言ってきた。

箒とセシリアは残るつもりだ・・・ということは自然に一夏も残ることになるから・・・帰るか。

俺は寮に帰るため、ピットに向かった。

「「俺を無視するな~~~~」」

と後ろから声が聞こえてきたが・・・二人が残るんだ、逃げられないぞ。

そう思っ<sup>て</sup>寮に向った。

向っている最中に鳳<sup>ファン</sup>がこっちに向って来ていた。

タオルとドリンクを持っている・・・一夏に渡しに行くのか?



ここまでするのだから、一夏の事が気になると言つより恐らく好きなのだろう。

筈とセシリアも恐らく一夏の事が好きだと思つから・・・修羅場確定だな。

寮に向つてゐる俺に気づいて鳳<sup>ファン</sup>が立ち止まった。

鈴「あれ？悠はもう訓練終わったの？」

悠「ああ、一夏の夜に何か作つて持つて行くと言つたから、先に中断してきた・・・」

鳳<sup>ファン</sup>を見て思考した・・・中華だし・・・杏仁豆腐にするか？材料は・・・無かつた気がする。

見つめていたらしく鳳<sup>ファン</sup>が訝しげな顔で口を開いた。

鈴「何こつちの顔をじろじろ見ているのよ？」

悠「一夏に持つて行くものを考えていたんだ。夜だし軽いデザートにしようとな・・・一夏達の所に行くんだろ？それ持つて行ってやれ。」

杏仁豆腐って軽かつたっけ・・・まっいいか。

取り敢えず、前回の事を踏まえて言っておいた。

鈴「わ、わかってるわよ。教えてくれてありがとう。」

そう言っただけでアリーナの方に走って行った。

忙しい奴だな・・・だが笑っていたほうがいいな。

だが一夏は俺以上に朴念仁みたいだからな・・・

あの人の様に率直に言わないと伝わらないぞ。

まあ、そんな事はしないか・・・多分。

それよりもさっさと寮に戻って材料買いに急ぐか。

俺は急いで戻った。

~~~~~

夕食を食べて戻ってから、料理の準備をした。

準備が終わってからシャワーを浴びて少しのんびりした。

夜の八時頃……

時間的に出来上がる頃だろう……早めに買いに行つてよかった。

一夏達も部屋に戻っているだろう。

俺はデザートに乗せた皿を持って一夏達の部屋に向つた。

部屋に近づいたら……言い争う声が聞こえてきた。

……居るのは鳳か？……物凄く嫌な予感がする。

様子見るついでにデザートを置くか……

俺は意を決してドアを開けた。

悠「一夏持ってきてやったぞ。」

部屋に入ってきた俺に一夏は視線を移し、一夏と箸を見ていた鳳は振り返つた。

一夏は俺と知るや助けを求める感じになって、鳳は持っていた皿の中身に気づいた。

「悠。助け『無理だ。』言い終わってないぞ。」

鈴「あ、杏仁豆腐。美味しそう・・・」

一夏と鳳フアンがそれぞれ言いたい事を言った。

一夏は途中で遮った、思い切り「助け」って言葉が聞こえたからな。人間関係ぐらい自分で何とかしてくれ・・・

皿を置きつつ箸を見たら何か怒りが爆発しそうな感じだ。

箸「む、無視をするな！こうなったら力づくで・・・」

箸が物騒な事を言って、近くにあった竹刀を取った。

悠「！」

箸は剣術を習っている・・・竹刀でも十分凶器と化すし、鳳フアンは余所見をしていて全く気付いていない、つまり無防備だから余計危ない。

注意するよりも先に体が動いた。

俺は鳳フアンに近寄り、腕を取って引き寄せ回り込み庇った。

ガス！

当たり方が悪かったか、音が鈍かった。

木刀だったらやばかったな・・・

突然で何が起こったか把握していない鳳ファンを見て言った。

悠「鈴、大丈夫か？」

言われた鈴は状況を理解したらしい、俺を見て驚いた感じで言った。

鈴「あんたこそ・・・ってあんた・・・誰？」

あんた誰って・・・酷くないか？

二十七話 訓練と力づく (後書き)

ちよつと長くなったので、話を途中で区切りました。

二十八話 約束と唐変木 (前書き)

前回の続きです。

二十八話 約束と唐変木

二十八話

【約束と唐変木】

箒の竹刀による鳳<sup>ファン</sup>への攻撃を庇った。

まあ竹刀だし、爆発物ではないから怪我はしていないだろう。

あのまま叩かれていたら、危なかったからな。

それに・・・嫌なことを・・・

俺はゆっくり振り返って箒を睨んだ。

悠「篠ノ之・・・何のために剣道をやっている？心構えは何だ？思い返せ。」

箒はいつもと違う俺の態度に怯<sup>ひる</sup>みながら頷いた。

一夏も若干怯んでいたが、驚き戸惑いながら俺に指を刺し言った。



「悠……その髪。」

ん？髪……？

いつも通りカツラを被っているだろう？

ふと見たら竹刀の弦にカツラの毛が絡まって……取れている。

打ち所が拙ますかったのか、怒りにより打ち方が鈍ったのか分からないが、絡まとまってしまっている。

俺は溜息を吐きながら手で髪を梳すかし、竹刀からカツラを取って言った。

悠「面倒なことを……説明してほしいか？」

教えて欲しいのか全員が頷いた。

俺はカツラを被りながら、言える範囲で簡潔に説明した。

悠「俺が旅をしていた時に、どこかのISの施設みたいな所に侵入してしまっただよ……で、変装をした。」

鈴「ISの施設に侵入って……アンタそれやばいよ！」

鳳<sup>ファン</sup>が事の重大さに気づいて言った。

どこの国もISに関係する事は重要機密だからな・・・少しでも情報とかが洩れたら、それだけでも大事だからな。

国家代表候補生ならそれぐらいは分かるだろう。

あの時は若かったと思った・・・今でも十分若いが、行って良かったとも思える。

一夏が何かを思い出したらしく口を開いた。

一「黛先輩が見せていた画像って、やっぱり悠だったのか。」

俺は溜息を吐きながら言った。

悠「そう言うこと。何であの人が持っていたかは分からないが、知り合い辺りに関係者が居るんだろう？だからこの事は秘密にしてくれると助かる。」

IS使える男って事もそうだし、尋問も口止めもしたいだろう・・・いい加減諦めてくれ。

一「あ、ああ、分かった。変装の事って千冬姉は知っているのか？」

悠「知っているに決まっているだろ。部屋が決まるまでの一週間、同じ部屋だったんだぞ。」

同じ部屋と聞いて一夏と篤は納得した。

鈴は千冬さんと聞いて驚いた。

鈴「あの千冬さんと同じ部屋！？・・・あたしは耐えられないな。」

悠「そうか？普通にしていたら良いだけだぞ？・・・それよりも何でこんな事になったんだ？俺も事の経緯を説明して欲しいものだな。」

一夏が事の経緯を説明しだした。

本人曰く、地獄の訓練が終わってピットに入り、汗を拭いていたら鳳ファンが来て、その時に篤から部屋のシャワーの話があり、一夏と篤が一緒に部屋って事を鳳ファンが知って、部屋を代わってくれと言いに進入してきた・・・

それで鳳ファンと篤が言い争って、最終的に鳳ファンが篤の事を軽くあしらって一夏と話をしようとしていたら篤が怒って力づくに出たと・・・

聞き終わった俺は一言。

悠「篤は少し考えて行動したほうがいいぞ。」

箒「う、うるさい！」

凶星なんだろう、箒が怒った。

俺は意に介せず呆れながら説明した。

悠「いいか、よく考えてみる。勝手に部屋を代わることなんて出来ないんだから、鳳ファンに説明するなり・・・鳳ファンは聞かないか・・・千冬さんか山田先生に言いに行けば済むことだ。それに他の女子が一夏の部屋に泊まったら、嚴重注意か罰則だろ？確か。」

「・・・なるほど、その手があったか。」

その事に気がついた二人は納得がいった感じで頷いた。

俺の部屋が決まるまで一週間待ったんだ。

要するにそれだけ手間がかかるんだ、それを無視して勝手に代わっていたら千冬さんが怒るだろう・・・恐らく。

そういえば・・・まだ話の途中の様な気がしたから俺は三人を見て言った。

悠「で、まだ話があるのか？一応、暴走防止として俺は居させてもらおう。」

鈴「あ、あるわよ。一夏、約束覚えている？」

約束か・・・どんな事を言ったんだ？

一「鈴、約束ってというのは・・・」

鈴「う、うん。覚えている・・・よね？」

鳳<sup>ファン</sup>が恥じらいながら、顔を伏せて時々上目遣いで一夏を見ている。

余程恥ずかしいことを言ったのか？

一夏が思い出したらしく口を開いた。

その表情は俺の記憶力は凄くなって感じが伝わってくる。

一「えーと、あれか？鈴の料理の腕が上がったら毎日酢豚を・・・」

鈴「そ、そう。それ！」

一夏が覚えていたと思い、鈴が嬉しそうに言った。

俺は少し考えた。

毎日酢豚を・・・何だ？

恥ずかしい・・・毎日酢豚・・・まだ分からんな。

「・・・おじつてくれるってやつだろ？」

それまた凄いな、毎日酢豚って・・・幾らになるんだ？

ふと鈴を見たら・・・正解では無いらしいな。

物凄く負の感情があふれ出ている・・・目にはうつすら涙も見える。

一夏の性格を考慮して考えてみるか・・・

ん～・・・女から男・・・鈍感・・・おごるじゃなくて・・・あげるか？・・・恥ずかしい・・・酢豚・・・中国だし・・・

もしや「毎日味噌汁を食べさしてあげる」って感じのを、中国版で酢豚を・・・って言ったのか・・・？

味噌汁でも伝わるか分からないのに・・・酢豚なんて絶対にわからんのだろ。

で、一夏は持ち前の鈍感で「毎日食べさしてあげる」を「毎日おじつてくれる」と解釈したのか・・・

よく考えるよ一夏、「毎日」メシを「タダ」で食べさせてくれる奴なんて居ないぞ・・・余程金持ちか、お人よしか、実験台にしてる

か、阿呆だ。

悠「（それでも鳳は信じていたんだな・・・約束を。）」

と考えていたら鳳が動いて・・・

バアン！！！！

鳳が一夏の頬を思いつ切りひっぱたいた。

一夏は何故叩かれたか理解できてない感じだ。

自信満々に言ったのに叩かれたのだからな・・・鈴の行動が答えと受け取って欲しいな。

一夏が何か言う前に、鈴が我慢出来なかったのか涙を流しながら力バンを持って部屋を出て行った。

忘れていた事が相当ショックがだったんだろう・・・とりあえず行動するか。

何ができるかわからないが、一人よりはマシだ。だが一発もらつ覚悟しないと・・・もしかしたらグーで殴ってきそつだからな。

だが一夏の唐変木ぶりは流石に頭が痛くなる。

呆けている一夏に・・・

悠「あゝもう一夏！死ぬ！」

と毒づいて、急いで部屋を出た。

鳳<sup>ファン</sup>を見つけたが、結構先・・・俺の部屋の方向に走っている。

さすが代表候補生だ、速いな・・・ついでに好都合と思いつつ追いかけた。

ポストンバッグを持っているか、多少走ったら追いついた。

鳳<sup>ファン</sup>の腕を取り言った。

悠「鳳<sup>ファン</sup>。」

バチン！

腕を振り払い鳳<sup>ファン</sup>は俺の頬を叩いて睨みながら言った。

殴られるのは想定していたが痛い・・・

鈴「放っておいてよ！」

悠「放っておけるか！」



叩かれたからではなく、鳳フアンの言葉にカチンときたから、つい大きな声を出してしまった。

俺の怒鳴り声に近い声に鳳フアンがビクツとした。

俺は思ったことを言った。

悠「泣いているのに放っておけるか。それに・・・」

鈴「・・・？」

俺は袖で鈴の涙を拭って、まくし立てる様に言った。

悠「今ここで鈴を放っておいたら後悔する。それに廊下で泣くよりは一人部屋の俺の部屋で気が済むまで泣いたらいい。それと・・・話なら聞いてやる、言いたくなければ言わなくて良い。・・・一人で抱え込むよりはマシだ。」

どんな性格が分からないが一人でいるよりはマシだろう。

一人で居ても深みに嵌っていくからな・・・経験談として。まあ、違ったらそれでいいけど。

だが一夏、面倒な事をしないでくれよ。

あいつの周りはいつも争いごとが起こるんだが・・・宿命か？

鳳<sup>ファン</sup>が少し考えて首を縦に振って、恥ずかしいのか少し上目遣いで口を開いた。

鈴「悠・・・言ってるで恥ずかしくない？」

・・・これ位言わないと、こっちの気持ちが伝わらないと思ったからな・・・

だが恥ずかしい事には変わらない・・・

俺は恥ずかしいからカバンを引ったくり、鳳<sup>ファン</sup>の手を持って歩きながら言った。

悠「・・・言っな・・・行くぞ。」

鈴「・・・うん。」

かなり強引だったが・・・これ以上話をして周辺住民が千冬さんに見つかったら面倒だからな・・・

見つかる前に部屋につきたい・・・そう思って移動した。

S I D E    I N    鈴

一夏を殴る少し前……

悠が持ってきた杏仁豆腐に視線を移していた時。

悠にいきなり腕を引かれて、何かから守るように抱かれた……

突然の事に対応が遅れた。

ガス！

鈍い音が聞こえた。

鈴「（え……ガスって……）」

悠「鈴、大丈夫か？」

……訓練してきたし、ほとんどの人なら今おかれている状況が理

解できる。

今、庇われたんだ……って何か直撃しなかった!?

鈴「あんたの方こそ……ってあんた……誰？」

あたしは庇ってくれた悠に視線を移しながら言って……固まった。

青髪から赤毛の髪に変わっていたからだ。

誰だってそう思うだろう……別人みたいだったから、つい言ってしまうた。

あたしに怪我が無い事を確認して、先ほど殴ったと思われる竹刀を持った篠ノ之 箒に振り向いた。

箒って呼んでいるのに篠ノ之って言うぐらい怒ってる……こいつにもこんな一面があるんだ。

それに余程心配してたんだ……名前で呼んでたし。

鈴「(……それよりも何でカツラ?)」

カツラが取れた事も気づかないぐらい怒っている……

あたしは昨日の今日だし……多少の変化は大丈夫だけど、一夏と箒

は豹変したと思わんばかりの怒り方に少しばかり怯えている・・・

一夏が指を刺して髪のことを教えた。

竹刀に絡みついた、カツラを見て面倒なのか呆れながら、説明してほしいかと言った。

多分、一夏達も同じことを思っているらしく頷いた。

覚えていないのか伏せているのか判らないが、どっかのISに關係する施設に侵入したと言った。

その中で起こった事は言えない出来事だったのか、強引に話を終わらせた感じだった。

その後、箒をたしなめて、二人に説明しだした。

確かに、一夏が居る部屋に勝手に泊まったら、千冬さんなら怒りかねない・・・いや、間違いなく怒るであろう。

力だけで解決しようとした、箒に怒ったのも頷ける。

もしその事を一夏たちが口に出しても、あたしはあの事を一夏に聞く予定だった。

あの約束を・・・

悠「で、まだ話があるのか？一応、暴走防止として俺は居させてもらう。」

先ほどの事を考慮してか、悠が話が終わるまで居るらしい。

代表候補生のあたしが遅れを取るって思っているのか分からないが・

・  
・

話しかけられて戸惑ったし、覚えていたら恥ずかしいから、俯いて少し上目遣いで一夏を見て聞いた。

鈴「あ、あるわよ。い、一夏、約束覚えている?」

一「鈴、約束ってというのは・・・」

鈴「う、うん。覚えている・・・よね?」

まさか忘れた?

いくら鈍感でも・・・

一「えーと、あれか?鈴の料理の腕が上がったら毎日酢豚を・・・」

鈴「そ、そう。それ!」

覚えてくれてたんだ!

「……おじつてくれるってやつだろ？」

……？

鈴「……はい？」

「だから、鈴が料理をできるようにしたら、メシをご馳走してくれるって約束だろ？」

……全然違う。

全然違うのに一夏は思い出した気でいる……

「いやしかし、俺は自分の記憶力に感心……」

そこまで言ったら、感情の赴くまま体が動いていた。

思いつきり一夏の頬を叩いた。

バチン！！！！

何か文句を言う前に我慢が出来なくなり、少し涙が流れた。

折角再会したのに、折角覚えていると思ったのに……

間違つて覚えていた……いくら鈍感で唐変木でも……ショックだった。

あたしはカバンを引つ手繰る様に掴んで部屋を出た。

もしかしたら一夏が追いかけてくれると思つたが、追いかけてこないし、声もかけてくれなかつた……

後で「一夏、死ぬ」って一夏じゃない男の声が聞こえた。さすがに自分のことを言う馬鹿はいないか……

少し後ろを見たら、青髪のカツラを被つた悠が追いかけてきている。

しばらくしたら追いつかれて腕を掴まれた。

あたしは腕を振り解いて勢いに任せて頬を叩く。

今は放つておいて欲しい感じだった。

それを言つたら……

悠「放つておけるか！」

怒鳴り声に近い声で言われた。

思わず驚いてしまった。



勢いで叩いてしまったからそのことに怒ると思っていたし、最悪、叩き返してくるとさえ思っていた。

それから悠は涙を拭ってきて、身近な者にたいする感じで恥ずかしい台詞を口走る。

たしかに、このまま部屋に戻ったら同居人に聞かれるし、人が来ないとは断言できない廊下に、一人で居るわけにもいけないから頷いた。

言われて恥ずかしいのに、本人はどうなのか聞いてみる。

悠も恥ずかしかったらしく、ぶっきらぼうにカバンを奪いあたしの手を取って歩き出した。

鈴「一夏もこれぐらい優しくして強引だったら・・・」

と思った。

しばらくあたしは、恥ずかしいのか無言で歩いている悠を見ていた。

・・・悠が恥ずかしい台詞を言っている時、格好つけて言っているのではなくて、あたしの事を考えて言ってくれていた事は感じ取れた。だが嬉しくもあり恥ずかしかったが気になることがあった。

鈴「・・・悠は、何で鳳フマインって呼ぶときと鈴って呼ぶときがあるのよ？」

悠「あいつも呼んでいたし・・・それに切羽詰っていたからな。次から気をつける。」

気をつかってか一夏の名前を出さなかった。

それに鳳ファンって他人行儀みたいな感じだし、あたしが悠って呼んでいいんだから・・・

鈴「・・・鈴でいい。」

悠「・・・分かった。」

表情までは分からないが歩きながら言った。

S I D E O U T 鈴

何度もコロコロ呼び名が変わったら嫌なのだろう・・・そう解釈し、  
鈴を連れ部屋に向かった。

二十八話 約束と唐変木 (後書き)

とうへんぼく、と打って変換を押しても、唐変木にならない・・・  
打ち辛かった。

感想お待ちしております。

追伸・・・お気に入りが300を超えてました。

呼んでくださっている方々、有難うございます。

二十九話 関係は堅く、時に脆い (前書き)

投稿が遅くなり申し訳ありません。

二十九話 関係は堅く、時に脆い

二十九話

【関係は堅く、時に脆い】

部屋に鈴を招き入れた。

鈴は床にカバンを置いてベッドに腰掛けた。

俺はイスにいろいろ置いてから、向かいのベッドに腰掛けた。

俺を見ていた鈴は若干呆れながら口を開いた。

鈴「・・・メガネにカラーコンタクトまで・・・」

悠「念のためだ・・・骨格とか変えれないから・・・効果なんて無いと思うが無いよりは・・・って感じだよ。鈴、一夏って昔から鈍感なのか？」

言って後悔した。

それから鈴の愚痴が始まった・・・主に一夏の鈍感っぷりにたいしての愚痴を・・・

だが話している途中も、どこか顔に陰りが見えた・・・主に家の事で。

しばらくして鈴の話が終わった。

鈴「ふう・・・これぐらいかな一夏の事は。」

どこかすっきりした感じで言った。

悠「なあ、鈴。一夏との約束って、毎日味噌汁を食べさせてあげられてやつの中国版だろ？」

鈴「そ、そうよ！それなのに一夏は・・・」

知られて恥ずかしがり、先程の事を思い出してまた悲しんだ。

悠「一夏の鈍感は何以上だからな・・・それを知ってて言ったんだろ？」

鈴「う、うん・・・だけど・・・」

「あげる」を「おごる」だからな・・・

確かに意味は合っているとも言えるし、違うとも言える。

一夏の性格を把握していながら、伝わったと勘違いしていた鈴にも落ち度はあるが・・・今言ったら余計傷つくだろう。

悠「それでも鈴は、覚えていた意味は違えど、言った言葉は覚えておいて欲しかったのか・・・」

鈴「うん・・・」

そこまで言っただけでまた泣きそうになった・・・

一夏の性格を考えて言ってあげた。

悠「一夏も馬鹿ではないさ。近いうちに思い出してくれるよ。それ



にまだ鈴は一夏を嫌いになつては無いのだから？」

鈴「……」

……変化がない。

おいおい……ここは肯定すべきだろう？

悠「それじゃ嫌いになつたのか？」

鈴「……」

また変化がない……つまりは分からないと？

余程、あの約束を大事にしていたか……些細なことで瓦解する感じだ。

人の関係なんて、ダイヤよりも堅<sup>かた</sup>く、時に氷よりも脆<sup>もろ</sup>いからな……  
最悪、仲違いだけは避けて欲しい。

悠「そ……ねえ」ん？」

鈴「悠は何で昨日知り合っただばかりのあたしに優しくするの？何で？」

いきなり鈴が話しかけてきた。

同情が哀れんでいるかと思っているのか最後のほうは涙声だった。

沈黙していたのは、これを疑問に思っただけの沈黙だったのか？

だけど鈴がそう思うのも不思議ではないか・・・

俺は俯き、可能な限り言える範囲を考えてから鈴に聞こえるように言った。

悠「そうだな・・・俺には姉と妹が居たんだ。」

鈴「居たんだ・・・って。」

悠「今は居ない。」

別世界からきたなんて言えないから・・・

自然と「そういう」解釈されることになるだろう・・・

鈴が申し訳ない感じで謝った・

鈴「ゴメン・・・」

悠「謝らなくていい。話を戻そう・・・妹がよく泣いていたんだよ・  
理由は聞かないでくれ。」

理由は言わない・・・言えない。

いろいろあったからな・・・

顔を上げて聞いている鈴の表情を見たが読み取れない・・・

悠「俺は泣いてる姿を見るのは嫌いだし、何とかしたいと思う。だから鈴が泣いていて放っておけなかった。」

鈴「・・・」

悠「鈴、一つ聞いていいか？」

俺が聞いたらこっちを向いて頷いた。

悠「言いたくなかったら言わなくていいから。・・・何で家のことになると悲しい顔をするんだ？」

言った瞬間、鈴が一瞬震えた。

何かあったんだな・・・

俺と同じ状況じゃないことを祈りたい。

鈴がこっちを見据えて聞いてきた。

鈴「・・・何で気づいたの？」

悠「昼食の時に一夏が親父さんの話をした時だ。明らかに歯切れが悪かったし表情も暗かった。それに鈴が元気だと思っつて言った時、長い間会っていないと俺は感じた。あと、さっきの愚痴の時も表情が暗かったぞ。」

鈴「うん・・・両親が離婚しちゃったんだ・・・そのせいで国に帰ることになったんだ。」

どこか観念した感じで言った。

なんとなくだが約束事で、あれ程怒ったのかがわかった気がした。

国に戻って何でISの適正を受けて、ISを動かす事になったかは判らないが、一年で代表候補生になれた程に頑張ったんだ・・・

ドイツで二ヶ月だが体験したけど結構過酷だったからな・・・俺は普通にやっていたが周りは疲れていたな。

そういえば、みんなは何のために頑張るのかと思ったりはしたが聞かなかつたな・・・

脱線した気がしたが・・・その国の代表候補生になるまでに辛い時もあつたと思うし、諦めようとしたこともあつたと思う。

そんな時、鈴は約束を支えに頑張ってきたと思う・・・才能も関係していると思うが、目的とかがないとそこまで頑張れないからな。

悠「ゴメン・・・無神経だった。」

鈴「いい・・・家族って難しいね・・・悠・・・」

俺には・・・いや、誰にも鈴の悲しみはわからない・・・

俺は泣きそうになっている鈴を引き寄せ抱きしめながら、そのまま

ベッドに背中から倒れた。

悠「ゴメン・・・鈴、今は泣いていいんだ。」

そう言ったら「謝らなくて良いわよ・・・」と涙声で言い、胸を叩きながら泣き始めた。

鈴がどう乗り越えてくれるか判らないがこの一件が終わるまで付き合ってやるか。

そう思いながら鈴の頭を撫でてやった。

悠「（そういえば・・・どのドアも防音じゃなかった筈では・・・）」

確かドアの防音は完全じゃないから・・・

鈴が泣いている事を聞かれてしまうかもしれない・・・と言っことは。

近くを誰かが通ったら聞かれてしまっつて事だ・・・つまり。

明日になったら質問攻めと女泣かせの噂が広がってしまう・・・  
非常に危うい・・・選べる選択肢は限られてくる。

一、誰も聞いていないことを祈りつつ、鈴が泣き止むのを待つ。

二、この際、どんな事も甘んじて受ける。

通常はそれしかないが・・・って、考え方によって一と二って同じ  
だろ！

俺は第三の選択を取りたいがどうしようか迷った。

面倒だし・・・祈るか。

・・・

しばらくしたら静かになり、泣き止んだと思ったら泣き疲れ寝てい  
た。

しよつがないなと思えばベッドに寝かそうとした。

布団をめくりベッドに寝かせた。

悠「・・・ん？」

ふと見たら鈴の腕が服に伸びている。

・・・寝かせた所、まではよかったが服を握り締めてる。

ゆっくり指を開かせて外し布団を被せてあげた。

思いつ切り握っていて外せなかったら、どうしようかと思ったが外せてホツとした。

~~~~~

次の日・・・

朝方4時30分頃、目が覚めた。隣のベッドを見たら鈴がパジャマ姿で寝ていた。

一回起きたのか・・・鈴を起こさないように、俺は静かに布団から出る。

とりあえず・・・朝シャンする事にした。



シャワーを浴びて何を作ろうか迷って数分。

昨日、材料を買いに行った時に他の物も買っておいでよかったと思  
いながら、下準備しておいた物を取り出して朝食と昼食の弁当を作  
り始めた。

ついでに鈴の朝食と弁当もこの際作ることにした。

苦手なもの聞いてなかったが・・・後で聞いて外すか。

要らなかったら千冬さんに・・・この際、山田先生で手を打とうか。

と余計なことを考えながら作った。

作り終わって・・・朝6時30分頃。

鈴「ん・・・」

やっと眠り姫？が覚めた・・・と思い朝飯を食べていた。

悠「おはよう。鈴。」

鈴「おはよう・・・んあ!？」

俺を見るなり変な声を出した。

朝から元気だな・・・

悠「どうした？変な声出して。」

鈴「ど、どうしたじゃ無いわよ！」

昨日の暗い感じは何処にいったか・・・ちょっと回りを見渡してしま  
った。

このまま怒りを向けられても困るので・・・机に置いた朝食を指差  
し言った。

悠「一応、朝飯作ったが食うか？」

鈴「・・・食べる。」

泣いて体力を使ったのか、渋タイスに座って「いただきます」と言

い食べ始めた。

食べた瞬間に「負けた」って聞こえたが、あえて無視した。

鈴が食べながら話しかけてきた。

鈴「あんた、何もしなかったわよね？」

もちろん目は疑っている。

俺も食べながら言い返した。

行儀悪いが、話をしたかったから仕方ない。

悠「何をだよ……。あと昼の弁当欲しいか？要らなかったら先生にあげるつもりだが？」

鈴「欲しい……。あんた何時作ったのよ？」

悠「5時頃作り始めて、少し前に食べ始めてた。」

聞いた鈴は呆れながら口を開いた。

鈴「ハア・・・あんた主夫になれるよ。」

悠「どこかで同じこと言われた。」

鈴「そうなんだ・・・」

悠「ズズズ・・・そうなのです。」

と、俺はお茶を啜りながら言った。

思い出したか鈴は俯きながら口を開いた。

鈴「・・・悠、昨日はありがとう。」

悠「いや。気の利いたことを言えなくてゴメン。」

気の利いたこと何て思いつかなかったからな。

思ったことをそのまま言ったほうが相手に伝わりやすいからな・・・  
・多分。

鈴「あ、謝らなくていいわよ・・・（嬉しかったし。）」

悠「ん？すまない、最後のほう聞き取れなかった。何て言ったんだ？」

最初はハッキリ言っただけ聞いて聞こえたが、最後のほうはボソっとしていたから殆ど聞こえなかった。

それに最後のほうは恥ずかしがっていた。

何を言ったか聞いてみたら、鈴が慌てた。

鈴「な、何でも無い！何でも無いわよ。」

悠「そうか・・・鈴、今だから言うが一夏の事を考慮していたか？」

鈴「悠の言いたい事は分かっているわよ・・・確かにあたしにも落ち度はあったし、叩いたのは少しやり過ぎたと思っている。」

落ち着いていたと思い聞いてみたが、一度起きたときに考えていたのか、自分の行動を見直していた。

あとは鈴が自分で考えて行動するだろう。

悠「そこまで考えていたら俺からは何も言わない、鈴の判断に任せる。」

俺は話を変えるべく、もうすぐ食べ終わる鈴に昨日作った杏仁豆腐を出しつつ聞いた。

悠「これ食べるか？」

鈴「食べる。」

中身を確認した瞬間即答した。

食べている鈴を見て思った・・・デザートは別腹と言つが食べるの速い。

全部食べきり満足した顔をした。

鈴「美味しかった。」

悠「そうか、口にあってよかったよ。」

自分が食べて料理が無くなった皿を洗いながら言った。

途中で鈴が皿を持ってきて洗おうとしたが拒否した。

俺が洗っているんだから洗わなくていいのに・・・それに。

悠「皿洗いはいいから、部屋に戻る時間なくなるぞ?」

鈴「シ、シャワー浴びたいけど・・・こ、ここで浴びていい?」

時間を見た鈴は恥じらいながら言った。

確かに周りの住民を気にして戻ったら、シャワーを浴びる時間が無くなるし怪しまれる・・・と思う。

このままシャワーを浴びて、夜にゆっくり戻ったほうが怪しまれない気がしないでもない。

同居人が居たら質問攻めだと思うが、そこは代表候補生になった実力で何とか切り抜けれると考えた。

それにここで拒否して、鈴に何かあったら嫌だから皿を洗いながら承諾してあげた。

悠「待つててあげるから、浴びてきな。」

鈴「うん。」

そういつてカバンを漁りだした。

見てはいけない物も入っているので皿洗いに集中することにする。

見たら見たで何されるか分かったものじゃない・・・最悪、IS展開して殴り掛かって来そうだ。

そう思っていたらシャワー室前で立ち止まった。

鈴「覗かないわよね？」

悠「覗くか！」

と、突っ込みをいれてあげた。





二十九話〜関係は堅く、時に脆い〜（後書き）

設定をチヨイチヨイと変えてしまったので、一話から所々修正して  
ました……

原作を1巻から7巻まで読み、投稿した物を最初から読んで違和感  
があつたので、

プロローグ、三話、八話、記憶、二十六話、二十八話「以外」を誤  
字と設定を修正してしまいました……

何度も修正を重ねてしまい申し訳ありません……これ以上は設定  
を変更する事は無いと思います……と言いつつ変える予感がす  
るのは気のせいかな。

総合PV31万超えてました。皆様ありがとうございます！

皆様……修正、変更を気にせずに読んで下さる事を願います。

三十話〜友達と特訓という名の・・・

三十話

【友達と特訓という名の・・・】

鈴が泣き疲れ俺の部屋で寝てしまつて次の日の朝。

朝食をとつた後にシャワー室を使わせて欲しいと言つてきたので承諾してあげた。

そして鈴がシャワー室に入つて数分が経つた。

そして、やる事がない俺は暇なのである・・・ん？

携帯が鳴っていた・・・旅の途中で知り合つた宝石の専門家の人だから電話にでてあげた。

悠「フィーアさん・・・こんな朝早くに何かあつたのですか？」

？「あら、ゴメンなさいね。こっちの都合でかけて。」

記憶に残るような綺麗な声で話しかけてきた。

フィーア・アルマ・・・自称二十七歳との事。宝石業界で最高峰の実績があり、信用が高い女性。

体格は・・・思わず見惚れてしまうような綺麗な顔立ちでほっそりとした体系。他は想像でお願いします。

性格は思慮深く、しかも掴みどころが無く周りを良く見る。

知り合ったのが漂流から戻って数ヶ月した時だ。

どんな鉱石か分からなかったから、専門家に頼もうとして先ほど説明した人に行き着いた。

この人の所はカットに研磨、デザインに鑑定から販売、買取まで幅広く宝石に関して、やっている。

普通に商品として売り出している物の値段を見た時は驚いたが、本人曰く「私は自分が信用出来ると思う人として、取引しないし扱わない。信用が無かったら誰も来ないわよ。」と言っていた。

それなりの物を扱っているって事だな・・・

ちなみにこの人には、記憶の事と家族の事とISを使えることは言っている。

もちろんISの事は秘密にしてもらっている。

あと、この人に関わっているうちに宝石についての知識と研磨技術

が自然と身についた。

悠「気にはしませんが・・・何のようだったのですか？」

フ「あなたが持っていた宝石の額が出たのと・・・あれに出していた宝石が全部落札された事の報告よ。」

・・・頼んでおいたな確か。

あんまり値がいかないわよと言われて、「あれ」・・・オークションに出す事しておいた。

あと付き合いは、これが終わったら切ると言う事だ。

IS使える俺が関係しているから、最悪、軍が出てきそつと言う理由からだ。

フィーアさんもその辺り理解しているので納得している。

話を戻して・・・その値段が出た事と落札された事で電話をかけてきたらしい。

そして俺は落札された事で、少しばかり心が弾んだ。

悠「やっとですか。それで総合いくらになったのです?」

フ「・・・ゴメンね。電話では言えないのよ。」

どこか真剣な感じで言った。

余程の事なのか・・・もしや軍が介入してきたとか?

少し不安になった。

悠「厄介事じゃないですよね?」

フ「ええ。その辺は安心していいわよ。単に値段の問題だから。」

悠「そうでしたか。」

フ「そうそう、3ヶ月以内に日本に行くことがあるから、その時また連絡するわ。」

悠「え!?」「ブチ!」ちよ、ちよっと!・・・あの人は・・・」

それだけ言って切っていった。

とりあえず、政治関係じゃないから気にしないでおこう。

・・・それにしても鈴の・・・いや女性のシャワーは長い・・・俺も長いから人のことは言えないが。

時間が危なくなってきたが、待つと言ったので音楽を聞くことにした。

癖なのだろうか・・・聞いていたら歌いたくなってくる。

悠「・・・」

やっぱり我慢できないので、サビの部分から歌いだした。

曲が終わってしばらくしたら鈴が出てきた。

俺はそれを確認して、俺はいつもの格好を شدした。

その間に鈴は荷物を片付けて登校の用意をし、俺を見て呆れながら一言。

鈴「・・・赤毛と比べて印象が変わるわね。」

悠「まあな。それよりも出るときに注意しないと・・・」

一番の難関、廊下に出て誰かとバッタリなんて勘弁してほしいからな。

俺はドアを少し開けて人が居ないか確認して出た。

さらに人が来ないかどうか見極めて鈴に合図した。

合図を確認した鈴も俺と同じように確認して出てきた。

そして歩きながら俺は溜息を吐いた。

悠「ふう……夜には戻ってくれよ。心臓に悪い。」

鈴「う、うん……」

悠「ならいい。」

それっきり会話が続かなかった。

しばらく歩いて生徒玄関前廊下に着いたら紙が貼ってあった。

近づき見たらクラス対抗戦リーグマッチの日程表が書いてある紙だった。

一組の対戦相手は……二組……鈴のところだ。



鈴の様子が気になったので隣を見たら、少し楽しそうな、腕試しがしたい感じがしている。

険悪な感じはしていないから、取り敢えず安心した。

だが今はそれどころではない……

悠「鈴、遅刻するぞ。」

鈴「わ、わかってる。」

絶対に忘れてただろ、そう思い教室に向かった。

席についたら、俺より先に登校していた一夏が話しかけてきた。

一「悠、昨日どうなった？」

悠「それを言う前に、一夏（殴られた原因は何か理解しているのか）？」

昨日のことを気にしてか聞いてきた。

その前に一夏の発言が一番の原因という事を理解しているのか聞いてみた。

当たり前だが、周りクラスメイトが居るので最後のほうは小声で話しかけた。

「俺が間違っ  
て覚えていたことが原因だと思っ  
つのだが・・・」

悠「元の言葉が思い出せないと・・・だが間違えた事を分かっているだけマシだ。その事を休み時間にもいいから謝罪して来い。」

あの鈍感の一夏が間違っ  
て覚えていたと言っ  
た時には驚いたが、一夏なりに思い出していたのだろうか・・・

まあ、理解していたら何とかなるだろうと思っ  
て、謝りに行く事を薦め  
めた。

「わ、わかつた。・・・悠。」

悠「しょうがねえな・・・ついて行くだけで、口出ししないぞ。」

「助かる。」

そして付き添いして欲しい感じだったので了承してあげた。

その日の休み時間……一夏が（筈とセシリアが後ろに居たが）謝りに行くのであった。

二組に居る鈴を一夏が廊下に呼び出した。

鈴は若干怒っている感じがするが、一夏が何を言つか理解したらしく黙っていた。

一「鈴、俺、勘違いして覚えていた事しか分からなかったけど、大事な事だったんだろ？忘れていて、ゴメンな。」

鈴「い、いいわよ別に……あたしも叩くのはやり過ぎたと思ってる……それにもう思い出さなくていいから。」

二人ともお互いの非を認めて、謝罪と反省をしている？

このまま、仲直りできたらいいんだが……ん？思い出さなくていい？

一夏も不思議に思っている。

……ああ、もし承諾されたら返答をどうするか迷っているのか……  
年齢からしてまだ早いからな。

それに友達からという意味だろう。

篤とセシリアは少し離れた所でヒソヒソと話をしている。

「思い出さなくていいの？」

鈴「あたしがいいと言っているんだから、いいのよ。これからは幼馴染として、友達として接してあげるから。」

「お、おお。」

一夏は鈴の押しに怯<sup>ひる</sup>みながら頷いた。

予想通り友達からだったな・・・

そして仲違いにならなくて良かったと思った。

最悪、一夏と鈴の「試合」が「死合い」になる所だったからな。

俺は休み時間ということを出して二人に話しかけた。

悠「一夏、鈴、仲直りできたところ悪いが、そろそろ休み時間が終わるぞ。」

「お、そうか。それじゃ、鈴、リーグマッチ対抗戦お互いベストを尽くそうぜ。」

鈴「望むところよ。それまで頑張んなさいよ。」

一夏と鈴が教室に入っっていった。

二人の姿を確認して、溜息を吐いた。

悠「ハア〜・・・やっと終わった。」

篤「悠、もっと頑張れ。」

セ「悠さん、ファイトですわ。」

篤とセシリアが俺にそれだけ言って教室に入っっていった。

・・・何で俺に言うんだ？

そこは対抗戦に出る一夏に言うところだと思っただが？

悠「ハア・・・意味が分からん。」

「随分と疲れているようだな。」

悠「！?・・・織斑先生、何時から居たんですか？心臓に悪いですよ。」

千「少し前だ。」

いきなり後ろから声がしたので、振り向いたら千冬さんが立っていた。

全く気配が感じられなかったが、この人は忍者か暗殺者か？今度からは気をつけねば・・・

それより、まだ休み時間は終わっていないのに・・・何で居るんだ？

千「そんな事より、・・・いつの間に鳳ファンの事を名前で呼ぶほど親しくなったのだ？悠よ。」

何か怖い・・・冷や汗が出てきた。

黙秘をさせてくれる気ではない様だ。

恐らく授業が終わっても、吐くまで尋問されそうな気がする。

ここは言える範囲は簡潔に、かつ内容は遠まわしに説明する事にした。

悠「・・・昨日ですけど。」

千「ふん・・・何があった？」

悠「それは言えませんが・・・一言で纏めると、全部一夏のせいです。（一夏許せ）」

千「ほうっ・・・一夏のせいか・・・わかった。（一夏め・・・鳳がファン悠に惹かれたらどうする・・・）」

それだけ言って教室に入っていった。

あゝ怖かった。浮気が発覚した夫の気持ちを経験した気がした。

だが何で不機嫌だったんだ？・・・友達として話をしていただけなのに？

そんな事は記憶の隅に押し込めて、俺は千冬さんに続いて教室に戻った。

授業が始まって、千冬さんが一言。

千「織斑、早速今週の土曜、第2アリーナで直々に鍛えてやる。」

一「……お、織斑先生、俺何かしましたか？」

一夏は千冬さんから何かを感じ取ったのか、嫌な汗を流している。

千「お前が気にする事ではない。クラス対抗戦リーグマッチの為の特訓だ。それ以外何がある？」

一「いや普通気にするし、それに特訓という名の拷問にかける気だろ。俺にはわかるぞ。」

悠「一夏、それは違うぞ。特訓という名の気遣いだろ。有難く受けておけ。」

千「悠の言つとおりだぞ。有難く特訓（拷問）を受ける。」

俺の事を名前で呼んでいる時点で違和感を感じた。

恐らく一夏に地獄のような特訓を与えるつもりだろうと思えてきた。

鈴の事を口に出すわけにはいかず、尋問？から逃れるには、一夏の



せいにするしかなかったんだ。

俺は口に出さず気持ちだけ一夏に謝罪をした。

そして土曜日……

案の如く、夕飯時一夏が「やっぱり拷問だった」と言って突っ伏していた。

三十話〜友達と特訓という名の・・・（後書き）

一時的オリキャラを出しました・・・

案の如く、とは・・・思ったとおり。予測したとおり、という意味です。

案の定とは意味が違う気がしたのでこちらを使いました。

呼んでくれている方々は、修正の事をあまり気にしていないようなので、このまま投稿を続行します。

三十一話 全力疾走

三十一話 「全力疾走」

一夏が特訓という名の拷問を受けた次の日の朝……つまり日曜日だ。

現在、午前11時30分俺は……

「御神。フレーズ・バニーユ、三名。」

悠「了解。」

入学が決まる前、働いていた職場にいる。

事の発端は朝方……それは突然のことだった。折角の日曜日もう

少し寝たい気分なのに、携帯の音で起こされた。電話の相手は働いていた所の料理長だった。

女尊男卑のご時世、料理長の座に立っている男だ。フロアチーフとの仲が噂されているらしいが、その話は今すべき話ではない。

「……と、言う訳なんだ。助っ人として頼む！」

働いているスタッフの家の人が怪我をしたので病院に付き添うらしく、出勤時間が遅れると連絡があったらしい。それで一時的な助っ人として朝っぱらから連絡があった。俺は今日、誰かと約束をしていない……つまり暇なので了解することにした。

539

悠「わかりました。それで何時にそちらに出勤すればいいのですか？」

「九時。」

悠「……ギリギリ、間に合うか間に合わないかの瀬戸際なので急いで向かいます。」

「助かる！普段着で来てくれて構わない。全スタッフには伝えておくから。」

悠「わかりました。」

そう言つて電話を切つた。現時刻、7時30分。ここから職場まで1時間ちよつと。服・・・あ、忘れてた。

現在、男でISを動かせると世間に知られているのは一夏だけだ。俺のことは学園の生徒と教師しか知らない。もし俺がIS学園の制服姿で外を出歩いたら、明らかに周りからは異端者扱いされると思う。最悪、マスコミやら出現しそうで怖い。そういう理由で制服姿で学園外を出歩くのは極力控えることにしなければならぬと、俺自身は思う。

部屋から着替えていかないといけないが・・・こんな朝早くにどこに行くのか聞かれると思うので、絶対に見つかりたくない。だが時間が無いので、ここは覚悟を決めて行かねばならないことになる。全神経を集中して挑まなければならない。

普段着に着替えて・・・いざ！出陣！俺は腕一本が通るぐらい少しだけ部屋のドアを開けた。

正面に人は・・・居ない。足音を確認・・・聞こえないな。手に手鏡を持ちドアの隙間から左右を確認する・・・居ない。誰も居ないことを確認して部屋から出た。廊下に出てからは全力で疾走した。

そこからはあんまり覚えていない・・・誰かとすれ違った気がするが立ち止まっていられなかった。何しろ時間が無いのだ。

学園から街中についても全力疾走・・・そして職場に着いた。

悠「ぜえ・・・ぜえ・・・ぜえ・・・ぜえ・・・おはよう・・・じやい  
ます。」

「おはよう。御神、助かるよ。あゝ・・・少し休んでから手伝って  
くれ。」

悠「助かり・・・ます。ハアハア・・・」

料理長が俺の姿を見て気を利かせてくれたらしい。

客が来たら、戦場と化す所（厨房）に疲弊した兵士（息が乱れ  
ている俺）を投入する。という愚かな事はしなかった。もし料理に支障  
が出たら店の質が問われるからな。それに俺もこんな状態で出たく  
ないから有難かった。

そして5分後に、厨房に立ち今に至る・・・という事だ。・・・  
そして怪我は軽い捻挫で済んだらしく、12時までには出勤でき  
ると連絡があった。

それに・・・俺が行かなくても、とか、高がスタッフ一人と思う人  
が居ると思うが、それは大間違いだ。必要以上に人を使うと人件費  
が掛かる、効率も収入も下がるのだ。だから客が少ない様な平日は  
若干少なくしたり、休日は平日より少し多くしたりして、対応でき  
るギリギリの人数を決めているのだ。

そして今日は日曜日。客が多い日だ。その人が居なかつたら、その人の分を誰かがカバーしなくてはいけない。客を待たせる事も、混乱する事も可能性としてある。最悪、難癖つけてくるクレーマーも出現するかもしれない。俺が居なかつたら、危ない状況だったという事だ。

そして昼前11時40分頃に連絡があつたスタッフが来た。

そのスタッフと交代して職場から解放された。

・・・やる事がなくなった。このまま学園に戻るという選択肢があるがどうしようか？・・・考えた末、しばらく街を散歩することにした。

しばらく街を散歩していたら腹がなつた。そういえば朝から何も食べていなかったのだ。忙しすぎて、それどころではなかつたからな。そして・・・職場で食べてこればよかったと後悔したが時既に遅し。

我慢しながら少し歩いていたら喫茶店があつたので、そこで食事を済まし学園に戻った。

~~~~~

夕刻・・・食堂の時間帯

寮の住民が外に出歩かない時間帯・・・俺は刃渡り2尺7寸の模擬刀を持ち、学園内にある池のところに来ていた。抜刀してから神経精神を水面に集中して、水面に刃を垂直に立て、ゆっくり波紋を立てず沈め始めた。

今この瞬間、誰かに話しかけられても、その声は耳に入らないだろう。それぐらい俺は集中してた。

刀身の半分ぐらい沈めてからゆっくり抜き、抜き終わったら水滴が落ちて一つの波紋を作った。俺は刀身についた水気を拭き取って鞘に収めた。沈め抜き終わるまで約10分程の出来事だった。

悠「・・・ふう。」

「波紋を立てず、水面に刀を刺すか・・・」

その声からは、技量にたいする感心と珍しいことをやっている関心が伝わってきた。

声が出た方を向いたら、腕を組んで立っている千冬さんがいた。

千「それができるまで、どれ程かった？」

悠「3年と半月ほどかかりました。・・・以前、誰かに教えてもら



ってやっていた気がしたんです。簡単そうと思っていたが……いざやると凄まじく集中力と技量がいるのに気付かされましたよ。」

実際にやろうとしたら、腕が強張ったり、震えたりして波紋を立ててしまう事になった。それに雑念があるほとんど失敗に終わっていたのだ。それ故にかなりの集中力が必要だった。

そして初めてできた時、終わったら汗が吹き出てきたのは嫌な思い出だ。今では少しの汗で収まるぐらいになったがそれでもキツイ。

察しが付いたらしく千冬さんが口を開いた。

千「……少し思い出したのか？」

悠「……ええ。」

千「そうか。」

ただ……誰に教えてもらい、何のためにやっていたのか、分からない……思い出せない。その事は口に出さなかった。

やる事を終えたので寮のほうに一步、足を踏み出して立ち止まり、千冬さんのほうに振り返った。



声が聞こえた瞬間、嫌な予感がして壁際に避けた。避けたと同時に俺が歩いていた場所を、鈴が跳び蹴りで通り過ぎていった。通り過ぎて綺麗に着地した鈴に何て声をかければいいのか分からなかったの  
で、とりあえず……

悠「……………」

鈴「待・ち・な・さいよ！」

無視して通り過ぎようとしたら、前に回りこまれた。要するに通せんぼ状態だ。だが何で怒っているかわからないし、怒られる覚えが無いので理由を聞いてみた。

悠「鈴、何をそんなに怒っている？というか怒らせることをしたのか？」

鈴「した。あたしが朝、すれ違ったあんたに話しかけたら、立ち止まらずにそのまま無視して走り去って行った。あんなに急いで何処に出かけてたのよ？」

悠「ちよっと待てよ。朝……すれ違った……」

俺は鈴の方に片手を出しつつ、首を傾げた。朝の出来事を思い返している……。誰かとすれ違った気がしていたが……。もしや鈴だったのか？だがそれが事実でも、そんな事でここまで怒るとは……。と口に出したら、キックか、パンチが飛んできそうなので口にはしない。

悠「もしかして全力疾走している時か？」

鈴「そうよ。で、どこに行ってたのよ？」

悠「……。それよりも食堂行くから通らせてくれ。空腹のまま自室に戻りたくない。」

鈴「あ、あたしも夕食まだだから、歩きながら教えなさいよ。」

……。何故どもる。そして何故赤くなる。突っ込んだら理不尽な暴力がきそうなので口にしらない。殴られるのは一回で十分だ。と思っていたら鈴がこっちを睨んでいた。

悠「どうした？」

鈴「あんた・・・変なこと考えてないでしょうね・・・」

悠「まさか・・・」

・・・改めて鈴を見る。身長は俺の胸ぐらいあって、ツインテールが特徴だ。スタイルもいい。顔は・・・まあ・・・いい。

この学園、外見だけなら評価の高い者しか居ないだろうというぐらい、全員整った顔立ちしている。

近くから威圧感を感じた。視線を移したら俺がジロジロと見ていたので、鈴がさつきより鋭く睨んできた。

鈴「・・・何？」

悠「かわいいな・・・と。いてー！」

思っていた事を一言で表した。

言った瞬間、褒め慣れていないのか顔を真っ赤にして足を蹴ってきた。口は災いの元と言うがまさにそのとおりになった。俺としてはこれ以上蹴られるのは御免なので、鈴を避けて食堂に歩いてく。後ろから、待ちなさいよと言って鈴がついてきた。

食堂に向けて歩きながら先程の話に戻る。

鈴「それで？あんたは朝早く、何所に行ってたのよ？」

悠「学園に来る前にバイトしていたレストランに一時的な助っ人として行ってた。」

鈴「ふ〜ん。ど「教えないぞ」・・・けち。」

悠「ケチで結構。それよりも気になったことがある。」

鈴「な、何よ？」

悠「鈴は朝方、俺に何を言いたかったのだ？」

鈴「え！？・・・ちよ、朝食に・・・って何言わせるのよ！」

視線を彷徨わせて、少しだけ口にして照れ隠しなのか、恥ずかしかったのか分からないが怒ってきた。

もしかして夕食も誘うために探していたのか・・・一夏を誘えばいいと思ったが、口には出さないと断ったので黙った。

そういえば一夏が鈴は怒りっぱいと言っていたが、照れ隠しの為に怒っていただけでは？と思えてきた。まあ、中には一夏のデリカシイの無い言葉に怒った事も含まれているだろう。

悠「あくなるほど。朝食に誘おうとしたら、無視して走り去ってしまっただから怒っていたのか。」

鈴「そ、そうよ。」

悠「そうか、悪いことをしたな。夕食は朝の埋め合わせと言う事でいいのか？」

鈴「な、何言ってるの？朝食は朝食、夕食は夕食。という訳で今度の日曜日、あたしと付き合ってもらおうから。」

何がどういふ訳なのか分からないが、無視して走り去ってしまった俺が文句を言える権限が無いことは確かだ。だが対抗戦もあるのでそんなことをしている暇は無いと思う。その日に備え、いろいろ調整したい事もあるはずだ。

俺はどの様に言葉にするか少し考えて鈴を説得することにした。

悠「買い物ぐらい付き合おうが、対抗戦が終わってからにしてくれ。鈴も万全な状態で一夏と戦いたいだろ？」

鈴「う・・・わ、分かったわよ。その代わり食費は悠持ちね。」

悠「ぐ・・・分かった。」

正論とも言える言葉に言い返せなかったのか、渋々ながら承諾した。

そこまでは良かったが、食事に関しては言い返せなかったのでもち  
らも渋々承諾することになった。

三食全て俺持ちか・・・さすがに一万以上は食べないと思いた  
いが、もしものことを考慮しなくてはと思った。



三十一話 全力疾走 (後書き)

やっと纏まった気がする。

投稿が遅くなり申し訳ございません。あと何話か出来ているのですが、修正が必要な部分が無いか確認しての投稿になりますので少しばかり遅くなると思います。

小説タイトルに違和感を覚えたので後日、変更しようと思います。

## 三十二話〜試合当日〜

三十二話 「試合当日」

待ちに待った試合当日。第二アリーナ第一試合。組み合わせは一夏と鈴。やはり、噂の二人だけあって、アリーナは全席満員。それどころか、通路にまで立って見に来ている生徒もいる。アリーナに入らなかった生徒は、リアルで流されるリアルタイムモニターで鑑賞している。

そして俺は観客席に行きたかったが、ピットのモニタールームに居る。それは何故か・・・千冬さんに連行されたからだ。

モニターに映された鈴の機体を見た。中国製の第三世代機『シエンロン甲龍』。

両肩のスパイク付き非固定浮遊部位アンロック・ユニットが特徴的で、手には大型の青龍刀が二本、柄頭を繋ぎ合わされた状態で握られている。

非固定浮遊部位アンロック・ユニットとは、セシリアのブルーティーズと一緒にだな。

鈴に機体の事を聞いてみたら、燃費の良さと安定性を第一の目標として製作されたISって言っていた。それ以外は「試合を見れば分かるわよ」との言葉を頂いた。

一夏の白式とは正反対だな・・・性能は高いが燃費が悪い、さらにシールドエネルギーを消費して稼動する『零落白夜』は余計に燃費の悪さを高めてる。

セシリア戦の負けになった原因が単一仕様能力『ワン・オフ・アビリティ零落白夜』だ。

結構前にだが、俺、一夏、篝の三人で一夏とセシリアのアイエスアウトIS活動記録を見ていたら、千冬さんが教えてくれた。

その効果は対象のエネルギーを無効化させるといふ代物。相手のエネルギー兵器の攻撃を無効にしたり、シールドバリアーを斬り裂き相手に絶対防御を強制的に発動させる、IS戦闘では強力な攻撃力を叩き出す。

だが先程説明したとおり、自身のエネルギーを消費して稼動する諸刃の剣だ。それに当たらなければ全く意味がない、ただ自身のエネルギーを消費しただけになる。

本人の技量に左右される物だ。千冬さんは、この零落白夜と雪片一本で第一回モンドグロツソを勝ち抜いたと言っていた。まあ、それぐらいの技量、力量が無いと刀一本で勝ち抜く事は難しいという事だ。

そんな説明？は措いとして、向かい合っている対戦者達を見た。

早く始まってほしいのかニヤニヤというかワクワクというか・・・まあ、楽しい感じが伝わってくる。

二人が何か会話しているがこちらには聞こえない・・・が、各国の訓練を遠くから観察していた俺は何となくだがわかる。

手加減がどうのこうのと鈴が言って、一夏がそれにたいして文句を言っている。恐らく、鈴が手加減してあげるみたいな事を一夏に言ったら、一夏がそれに少し腹を立てたのだろう。

まあ、一夏にとって手を抜いて欲しくないのだな。

会話が終わって、試合開始の合図がされ二人が動き初撃を打ち合った。

S I D E I N 一夏

鈴「へえ、初撃を防ぐなんて。でも……！」

鈴は繋ぎ合わせた青龍刀を分離させ、二刀流で打ちにきた。それを俺は雪片一本で何とか捌く。

「く、（悠との特訓で何とか対処できてるが・・・）」

事実何とか捌けてはいるが、攻撃に転じれない。相手が攻撃の手を変える前に何とか手を打ちたいところ。

一夏は試合までに、箒に刀の間合いやら特性やらを叩き込まれて、セシリアからは三次元躍動旋回を教えられて・・・千冬姉からは急加速急停止とあれを叩き教え込まれ・・・悠には模擬戦闘を嫌ほどさせられた。

俺は悠との戦闘の時に何回も喰らった事のあるやつをやってみようと思った。

「・・・（ここだ！）」

俺は鈴が攻撃してきた瞬間、持ち手を蹴っ飛ばして強引に隙を作り、動作をそのまま利用して鈴に雪片を当てた。

悠が刀一本でやっていた時に何回か俺の攻撃の瞬間、持っていた手を蹴っ飛ばされた事がある。

俺もやってみようかなと考えていたら、「一夏は剣術を極める俺のような馬鹿な真似をするな。」と言っていた。

そして試合前に、俺が試そうとしているのが顔にでてたらしく、「もし真似するなら相手の武器の特性、状況を見極めて一回だけ使え」と釘を刺された。

—「（おお、巧く行ってよかった。）」

実際、タイミングが悪かったら、鈴の攻撃をまともに喰らっていたことになる。

それを軽々こなす悠が異常なだけなのだが・・・

攻撃を喰らい距離を取り、二つに分離させた青龍刀の柄頭を繋ぎ合わせ双剣の青龍刀にした。そして再度攻撃しにきた鈴を迎え撃ちつつ「二度もしたくない」と思った。

鈴「あんた、足業なんて習ってたの!？」

—「くっ！悠がやっていたのを真似ただけだ!」

鈴が得物をバトンの様に扱い攻撃しながら文句を言ってきた。こっちも攻撃を捌いて言いかえた。

二刀流とは違う縦横斜めと自在に角度を変え、さらに高速で得物を回転させて斬り込んでくる。まさに縦横無尽に動く扇風機の羽だ。

・・・そんな例えはどうでもいいが、武器の特性がハッキリと理解できてない双剣の攻撃を捌ききれなくなってくる。このままでは消耗戦になるので、俺は一度距離を取ろうとした。

鈴「甘い！」

ぱかつと鈴の肩の装甲がスライドして中心の球体が光った瞬間、見えない何かに殴り飛ばされた。

「（な、なんだ！？）」

鈴「今のはジャブだからね。」

牽制の後は本命と相場は決まっている。

ドンッ！！

「ぐあっ！！」

またしても、鈴が不可視の何かを打ち出し俺を襲う。衝撃がシールドバリアーを貫通し痛みが俺を駆け巡った。絶対防御は発動しなかったがエネルギーを大量に消費してしまった。

棒立ちの状態は拙いと感じてクロス・グリッド・ターン三次元躍動旋回を駆使し、鈴が俺を捉えられないように動き回った。

S I D E O U T 一夏



篤「何だあれは？」

モニターを見ていた篤が呟く。

悠「大気が揺れていた気がする、恐らく衝撃波の類だろう。どのような原理かは分からないが。」

セ「原理は空間自体に圧力をかけ、砲身を形成、余剰で生じる衝撃自体を砲弾として撃ち出す、ブルー・ティアーズと同じ第三世代型兵器ですわ。」

悠「なるほど。空間を圧縮するだけだから、弾数は無制限でさらに角度制限もない。それに不可視の弾丸か・・・だが見る限り直線的な軌道で誘導性が無い、そこが救いかな。」

それにしても空間自体に圧力が、やろうと思ったたら対象を空間ごと圧殺できるのでは？と思った。さすがにそこまでは技術は進んでいないと思いたいし、競技規約違反で禁止されそうだ。だが操縦者に直接ダメージを与える物も存在するらしい・・・何事も気をつけないな。

話を戻そう・・・

鈴だが、燃費が良いからと衝撃砲をでたらめに打っているわけでは

なく、一夏の回避先を読みそれに合わせて衝撃砲を撃っている。先読み、衝撃砲の特性を理解しての目標にたいする狙いかた、一年足らずでここまで基礎を高められるものなのか・・・センスというか多少なりとも才能があったのだろう。それに一夏と鈴ではISの稼働時間に圧倒的な差がある。

それだけ鈴が有利なのに、ここまで善戦出来ている一夏も不思議なものだ。おそらく、一夏も才能があるのだろう。鈴以上に・・・

衝撃砲『龍砲』を二次元的な動きで回避しながら一夏は何かを狙っている感じがする。間違いなくあれだろう。

悠「・・・先手を打つにはあれを使うしかないのだが、使いどころを間違ったら勝敗は鈴に傾く。」

山「御神君、あれって？」

千「イグニッション・ブースト瞬時加速だ。私が教えた。」

セ「イグニッション・ブースト瞬時加速？」

悠「一瞬でトップスピードを出して相手に接近する技能。相手に奇襲を仕掛けるのだから通用するのは一回きりだ。」

千「そついうことだ。」

セシリアに説明して画面に向き直った。画面に映った一夏は覚悟を決めた眼をしていた。

そろそろ仕掛けるのだろう・・・鈴の衝撃砲を回避した瞬間、一夏は瞬時加速を発動して接近した。使いだころは間違っていない、後は鈴のエネルギーを零落白夜でどれだけ削れるかだ。

そして一夏の攻撃が鈴に届く・・・瞬間。

ズドオ~~~~~オン!!!!!!

対戦中の二人の攻撃では無い【第三者】の攻撃が、上空から二人の間を通り過ぎて地面に突き刺さった。

三十二話〜試合当日〜（後書き）

長くなったので、二つにブッタ切りました。

誤字、脱字、違和感を感じた人は報告おねがいします。

ついでに感想もお願いします。

三十三話 乱入 (前書き)

2週間ぶりかなって感じの33話です。

## 三十三話　乱入

三十三話

「乱入」

アリーナの上空をふさいでいたシールドが光で打ち抜かれると同時に地面に突き刺さり爆発音が鳴り、爆風と土煙を上げた。

ピットのモニタールームから観戦していた俺は嫌な予感がしたので、誰にも気づかれぬ様に静かに移動して一夏達のところに向かった。人が見当たらないところに出た瞬間、迷彩を使いピット発射口の端に移動。土煙の中からビームが放たれて煙が晴れた。

そこに居たのは・・・異様で異形なISだった。

図体がでかく腕が異常に長い、立っている状態で膝下まである。肩と頭が一体化したような形になっている。そして一番の特徴は・・・  
フル・スキン  
全体を覆うような『全身装甲』。

普通、ISは部分的にしか装甲を展開しない。防御はほとんどシールドエネルギーによって行われるからだ。だから見た目の装甲なんてほとんどが無意味。防御特化型で物理シールドを装備しているISもあるが、まったく肌が出ていないのは見たことがない。

腕を入れて二メートルを超える巨体の姿勢を維持する為なのか全身にスラストロケットが搭載されている。頭部にはセンサーレンズが不規則に並んで、腕にはビーム砲口が左右合わせて合計四つ。そのビーム砲口から放たれる攻撃はアリーナの遮断シールドを貫通する攻撃力を持っている。

そんなISが今、アリーナの中央に居る。ちなみにアリーナ全体を覆う遮断シールドはISに使われている物と同じだ。あれが暴れ、観客席に打たれたりしたら、最悪死人が出る。

恐らく相手が未確認のISと分かったのだろう、観客席は防衛用のシールドになった。アリーナで何が起きているのか観客に来ている生徒は分からない。それにシールドが起動したという事は、脱出する事に生徒が混乱するのが確認せずともわかる。

遮断シールドを貫通させた攻撃がくるかもしれない恐怖と脱出することが間々ならない後続の生徒の恐怖はそこに居る生徒達の混乱を酷くさせる。・・・混乱は伝播し酷くなり、最悪、怪我人もでるし錯乱する者も出てくるだろう。

侵入者をセンサーで確認した俺は両肩のシールドビットをパージした。そしてやる気になって口論している一夏達の方に向かい接近しつつ怒鳴った。

悠「話す暇があるなら、敵に集中しろ！」

「「悠!?!」」

二人が驚いてこちらに視線を移した。

その瞬間、視線を移しつつ武器を構えた鈴にビームが発射された。それをエネルギーシールドを展開したシールドビットで防ぎ、狙われた鈴を抱えて移動した。

悠「一夏、ぼつとするな！」

「「お、おっ!」」

一夏は俺の言葉に気を引き締めた。そして抱えられている鈴は慌てた。

鈴「ち、ちよっ!?!ゆ、悠!?!」

ハイパーセンサーの簡易解析で確認したら、セシリアのライフル」



スターライトmk?』より威力が上だ。直撃したら火傷ではすまない。そのビームをエネルギーシールドで防げることを確認した。

エネルギーがシールドを展開するだけで消費していくが、エネルギー再生で秒毎30づつ回復するから別に気にしない。が、俺のエネルギーの量を怪しまれないようにする為、攻撃が収まったら解除する。常に無駄な消費を抑える行動を心掛けないと、いつ誰かに気づかれるか分かったものではない。

俺は敵に集中しながら二人に話しかけた。

悠「一夏、鈴、俺の装備は対複数向きだ。誤射したくないから攻撃に参加せず、流れ弾の処理と被弾しそうになった時の攻撃を防いでやる。それと最大出力状態は防げる確証が無いから、兆候があったら観客席に打たせないよう回避してくれ。」

鈴「ゆ、悠、わ、分かったから、離してよ・・・」

悠「ああ、悪い。シールドで防げなかったら直撃だったからな。」

敵を見ながら鈴を降ろしつつ二人に言った。

悠「エネルギー切れになりそうになったら言うてくれ。いいな?」

「分かった。」「う、うん。」

俺の言葉に二人は敵に集中し戦闘を開始した。しばらく一夏達の戦闘を見て流れ弾を防ぎつつ敵の武装を確認する。

悠「（今のところビーム砲しか使ってきていない……が違和感を感じる。）」

それは、何故俺たちが喋っているときに攻撃しなかったのか？だ。敵の武装を調べるため、あえて攻撃する隙を与えていたのに全く攻撃をしてこなかった。

それに先ほど撃つたものと打ち抜いてきたモノは威力が違う。最大出力で攻撃する隙も時間もあつたのにしなかったのだ。こちらの機能停止をさせ機体回収を狙った目的の線は、攻撃をしてこなかったので確率的に低い。

悠「（何故、何のために戦っている？……ただの腕だめしか？自身の機体性能を調べるためか？それとも相手の機体を調べたいのか？）」

……そんな事をする為に侵入する馬鹿は居ないだろう。学園にも

アリーナがあるように、少なからず所有しているところは試運転できるところぐらいあるはずだ。どこかに侵入して試すような事をする意味がない・・・だが侵入者はここに居る。相手の機体を調べたいにしても最悪、貴重と言えるコアを回収されてしまう危険性があるのだ。他国の機体を調べる価値があるとは言いがたい。

利益より、不利益のほうがでかい。

侵入者がビーム攻撃を止めて、一夏に狙いをつけて飛んだ。攻撃があたらないから接近戦で攻めることにしたのだらう。だが飛ぶ姿にも違和感を感じる。無理やり飛んでいるみたいに見える。

悠「（こいつは囿で本命は違うところにあるのか？だとしたら捨て駒時間稼ぎか？・・・ダメだ、情報が少なすぎる。これ以上の詮索は無意味だな。」

これ以上、侵入して来た目的を考えても仕方が無いので、戦いに集中することにした。



侵入者が来た時のピットでは……

山「織斑くん！凰さん！今すぐアリーナから脱出してください！すぐに先生たちがISで制圧しに行きます！」

真耶が一夏達にプライベート・チャンネルで呼びかける。言っていることは正しい……が声を出す必要がないのに喋るほど真耶は焦っていた。周囲に少しでも気が利く人がいたら「落ち着いてください」と言われるだろう。

一「……いや、ここで俺達が引っ込んだら観客席を撃つかもかもしれません。先生たちが来るまで俺たちが相手をします。」

山「織斑くん！？だ、ダメですよ！生徒さんにもしものことがあったら……」

やる気になっている一夏に再度呼びかけようとした。

その時、侵入者がビームを放ったがエネルギーで覆ったシールドが飛んできてビームを防いだ。そしてそのシールドの持ち主であろう悠が鈴を抱えて移動していた。

突然のことで、ピットに居る真耶、篝、セシリアが驚いた。

「み、御神君!？」 「悠!？」 「悠さん!？」

千「(小娘め・・・い、いや一夏め、敵に集中しないか。」

突然の乱入者にみんなが驚いている中、一人だけ違うことを言っていた。その場にいた者達は画面に集中していたせいか、その小声に気づいたものは一人もいなかった。

そして真耶が乱入してきた悠にも呼びかけたが、集中しているのか全く返事がない。

山「織斑くん!聞いてます!?!?鳳<sup>ファン</sup>さん、み、御神君も聞いてますか!?!？」

千「山田先生、本人達がやると言っているのだからやらせればいいだろう。」

山「お、織斑先生！何に悠長な事を！？いくら御神君が増援に加わっても……」

千「落ち着け。そしてコーヒーでも飲め、糖分が足りないからイライラする。（悠め・蹴り飛ばせば良いものを……）」

そういつて容器のふたを取り、白い粒子をコーヒーに一杯目をいれて一杯目をいれようとした。

山「……あの……織斑先生……それ塩ですけど……」

千「……」

真耶の言葉にぴたりとコーヒーに運んでいたスプーンを止め、白い粒子を容器に戻す。

千「なぜ塩があるんだ？」

山「さ、さあ……？でもあの、大きく塩って書いてありますけど……」

千「……」

山「あ！もしかし・・・」

千「山田先生、このコーヒーを飲むといい。」

次に何を口にするのか予想した千冬は真耶にコーヒー（塩一杯いりを差し出す。顔は笑っているが口調からは有無を言わさない感じが伝わっている。

山「あ、あの、それ塩が入ってるヤツじゃ・・・」

千「ああ、混ぜてなかったな・・・さあ、どうぞ。」

入れたものを溶かすようにかき混ぜてから、ずずいっと差し出される砂糖ではなく塩入りコーヒー。真耶はそれを、涙目で受け取る。

山「いただきます・・・」

千「いつきに飲むといい。二杯目も用意しておこうか？」

山「ごめんなさい・・・」

余計なことを口にするなと口には出さず、コピーを押し付けて真耶に悟らせた。

セ「織斑先生！私にIS使用許可を！！」

持ち前のプライドと代表候補生の誇りなのだろうか、セシリアが千冬に出撃を求める。それに侵入者と一夏達が戦っているのに何も対応策を考えていないと思ったのが、その声は少なからず怒りが含まれていた。

千「・・・これを見る。」

そう言っつてブック型端末の画面を少し操作し、表示される情報を切り替えた。表示された数値はここ、第二アリーナのステータスチェックだった。

セ「遮断シールドがレベル4に設定・・・？しかも全ての扉が封鎖されているなんて・・・あのISの仕様ですの！？」



千「そのようだ。これでは避難する事も救援に向かうこともできない。」

セ「だったら、悠さんはどうやって・・・」

千「あいつは侵入者が来る前に気づき、あそこに向かった。」

千冬は悠が何時ここを出て行ったかは気づかなかったが、どうやってアリーナに行ったかは予想はついている。

そして何も考えていない訳ではない。あらゆる策を考えているが、遮断シールドと全ての扉がロックされているので何もできない状況なのだ。それでも打てる策はすでにしてある。

千「今、三年生の精鋭部隊がシステムクラックをしている。遮断シールドを解除でき次第、一夏達を引かせ編成した部隊を突入させる。だがおまえは部隊に入れないから安心していい。」

セ「なっ、どうして!」

千「おまえの機体は一对多向きだ。多対一になると邪魔になる。連携訓練はしたのか？ポジションは？味方の構成は？敵のレベルはどの位に想定してある？この戦闘の中に加わったとしてどのよう動く？連続稼働時間・・・」

アリーナ内という限られた空間で三人が侵入者と戦っている。唯でさえ悠のビットが飛び回っているのにそこにセシリアが加わったらどうなるのか、容易に想像できる。

つまり、千冬が口にしたとおり役に立つどころか邪魔になるという事だ。

セ「わ、わかりました・・・もう結構ですわ・・・」

その事を理解したのだろう、セシリアは両手を挙げ降参のポーズで言った。

千「わかればいい。」

そう言って画面を見た。

画面を見ている千冬の目は普段見せている教師の目ではなく、I S<sup>モン</sup>ド・クロックン世界大会を総合優勝しブリュンヒルデと呼ばれた現役時代を思わせる戦士の目をしていたが、気づいたものは誰も居なかった。

~~~~~

悠「やはり、違和感がある。侵入者から気迫というか威圧感みえないのが感じられない。それに動作が滅茶苦茶だ。」

侵入者の攻撃を防ぎながら、観察していたが違和感ばかり増えていく。

悠「（姿形、巨体、動作、全てが異常だ。とても人が乗っていると  
は思えない。……人が乗っていない？まさか、な。）」

ちょっとした疑問。盲点。だが、それが正しければ辻褄が合ってくる。

一夏達が敵の相手をしている間に、俺は流れ弾を防ぎつつ生体反応を調べ、内部状況を聞くためプライベート・チャンネルでピットに  
いると思われる千冬さんに話しかけた。

悠『千冬さん。生徒達の避難状況はどれくらい進みました？』

千『このフラグ立て男が・・・現在、遮断シールドがレベル4に  
設定されて、すべてのドアがロックされている。三年生がシステム  
クラックをしているが、いつ解除できるか未定だ。生徒達を避難さ  
せるには時間が必要だ。』

悠『変な言葉を言われた気がするのだが・・・まあ、いい。生徒達は  
脱出ができていないのか、錯乱していなければいいが。遮断シール  
ドを強制設定とドアロック・・・恐らくクラッキングが完了するま  
ではこっちの方は片付きます。・・・千冬さん、そこに山田先生  
と他に誰か居ますか？』

話をしている間も全ビットを駆使して観客席にいく流れ弾をシール  
ドを展開して防ぐ。

侵入者は鈴の龍砲を回避している・・・要するにそれ程、高性能の  
センサーを積んでいるという事だ。

そして侵入者はコマの様に回転してビーム砲を撃ち始めた。普通に  
撃つより、コマの様に回転して撃つほうが有効射程が半分ぐらいに  
なる。

俺は一夏達の動きを邪魔しないようにシールドを操作しつつ、観客席にいくものだけを選別して防ぐのと、敵の観察と分析、報告で精神的に疲弊してきた。だがここで集中力を切らすわけにはいかない。

それに俺も攻撃に参加したいが、連携訓練をやっていないし役割分担も決めていないので、今より不利な状況になってしまうことになる可能性がある。先ほど説明したように、俺の装備は対多数むきだ。俺が多数の方に回ると最悪、誤射してしまう可能性だってある。それはセシリアにも同じことが言える。

俺一人だけでもよかったが……二人がやると言っていたのに引かせる訳にはいかず、二人に侵入者の攻略を任せただ。

千『今この場に居るのは、私と山田先生だ。オルコットと篠ノ之は……何処かに行ったぞ。』

悠『……非常に嫌な予感がする……』

おそらく、セシリアはここに向かっていると思う。だが筭はISを持っていないのに、どこに向かった?……絶対に手洗いではない、間違いなく余計なことをする気がする。

千『そんな事より、悠、何かわかったのか?』

悠『侵入者の生体反応を調べたら生体反応がありませんでした。つまり……無人機という可能性があります。』

無人機……俺が知る限りどの国も完成していない技術……遠隔リモートコントロールスタンド・アローン操作が独立稼働。もしくは両方の技術が使われている可能性がでてきた。

千『……そうか。』

どこか納得した感じで千冬さんは答えた。説明を求めなかったので恐らく気付いていたと思われる。

これで誰の仕業か目星がついた……

各国が一個でもコアを多く欲しがっているのにそれを使い捨てに出て来る人物、衝撃砲を回避できる高性能センサーにセシリアのライフより強力なビーム兵器を作れる人。そして学園にたいするクラッキングが出来るほどの人物。数ある可能性の中で最も蓋然性がいぜんせい、つまり確率が高いのはあの天才になるのだが……目的がわからない。

それにあの人がクラッキングしたと仮定したら、ロックを解除するのにかかりの時間が費やされると思う。よってこちらの増援が来るのは、ほぼ皆無だという事になる。むしろ来ても邪魔なので、観客

の避難の事を一番に心配していた。

そして戦況は・・・鈴と即席の連携「コンビネーション」をやっているのだが、また一夏の攻撃が外れてる・・・

鈴との連携は、鈴が敵の注意を引き付け、隙ができたところに一夏が接近して攻撃するというものだが・・・一夏の攻撃に確実に言っているほど侵入者は反応して避ける。一夏・・・いや、この場合白式と言ったほうが正しいだろう。白式だけに狙いを定めて対応している、おそらくその様にプログラムされているだろう。並みの者なら当たっているであろう攻撃すら全身のスラスターを使って回避している。

これで七度目の失敗・・・そろそろエネルギーが危ないところだ。

悠『一夏のやつ、力を抑えてやっている様なので、無人機ということとを教えていいですか？』

千『構わない。だが油断するなよ。』

悠『わかっています。』

そういつて俺は無名の刀型近接ブレードを両手に展開して一夏達に言った。

悠「一夏、鈴、こいつから生体反応が無い、無人機の可能性がある。」

鈴「悠、あんた何言っているの！？無人機なんて有り得ない。ISは人が乗らないと絶対に動かせないのよ！」

そうだ。鈴が言ったとおり、本来、ISは人が乗ってないと動かせないのだ。それは教科書にも載っている事である。そんな事を考え付かせない為にあえて載せていないだけかもしれない。だがセンサーで調べた結果、地面に突っ立っている目の前の侵入者からは生体反応が無い。

悠「それぐらい分かっている。だが目の前に生体反応が無いISがいる。無人か死体か未確認生命体に乗っているかだ。一夏、鈴、エネルギー残量いくつだ？」

—「80・・・零落白夜一発が限界だ。」

鈴「あたしは170。あんたは？」

悠「俺は7割ぐらいある。(そこまで減ったからな。)(一夏、無人機と仮定して全力で攻撃しろ。俺と同じで加減していたんだろ?)」

—「わかった。次は全力で当てる。という事だ鈴、援護頼むぞ。」



鈴「誰に言ってるのよ？アンタこそしくじったら承知しないから。」

そして一夏達が行動しようとした

その瞬間・・・

箒「一夏あつ！……！」

キーーンとハウリングが尾を引く箒の声がアリーナのスピーカーから響いた。

ここにきて、予想以上の余計なことを！……！！……！！

箒の行動が戦闘している俺達、そして自分自身にどのような結果を招くのか、まったく考えてない。呼びかけたところで何が変わる！ただ状況が悪いほうに転ぶだけだ！

箒がやった行為は言わば、戦闘中の真つ只中に飛び込んで大声で殺してくださいと言っているのと同じ事。

俺は箒がどこにいるか確認せず敵を見た。侵入者が俺達と違う方、恐らくだが箒の方を向きビーム砲がついた腕を構えようとしていた。

一夏達の攻撃を待たずに、俺はブレードを展開したビットで侵入者を攻撃しシールドエネルギーを削りだす。

「「悠!?!?!?!」」

突然の攻撃で二人が俺の方を見た。見た瞬間何故か驚いてる。だが俺には何で驚いたのか問う時間すら惜しかった。

ビットで攻撃しつつアンロック・ユニットのスラスターで瞬時加速を使い敵に接近した。途中でエネルギーが切れたのだろう攻撃にたいしてシールドが発動しなくなっていた。

それでも俺は止まらず左で居合いのように片腕を肘から切り裂き、上段に構えた右で更に片腕を肩から切り裂いた。そして両足を切り裂き、地面に落ちそうになった体を足のブレードを展開して蹴り飛ばし、二本のブレードを敵の顔と首の下辺りに目掛けて全力で投擲した。

投擲したブレードは狙い通りに敵ISの顔と首少し下を貫き壁に縫い付けた。足と腕はズタズタに切り裂かれ、頭と体だけの機体を見

て無人機と分かった。

一夏達は、若干やり過ぎと思われる悠の行動に寒気を感じたのか震えていたのだった。

### 三十三話「乱入」(後書き)

異様に文が長くなってしまいました。戦闘場面は面倒です。作成していたら3回ぐらい寝落ちをしてました……

話の途中で出てきた【蓋然性】と言う聞きなれない言葉について。

意味は(辞書から引用)「ある事柄が起こる確実性や、ある事柄が真実として認められる確実性の度合い。確からしさ。これを数量化したものが確率」(引用おわり)と言うことです。使いどころがあっているか不安です。

もし使い方が間違っていると思う人はコメントお願いします。

三十四話 思考 (前書き)

前回に続きまたまた遅くなりました。

## 三十四話〜思考〜

### 三十四話 「思考」

俺は礫にしたISを見ながら、冷静に思考しつつ一夏と鈴の付近にシールドを待機させた。

そして周囲を警戒しつつパッシブ・イナークシャル・キャンセラーPRICを使い浮遊して無人機が侵入してきた所を見た。

何故、改めて思考し直したかというと、本当にあの天才・・・篠ノ之しののたはね束がこの無人機を作ったのか？と思ったからだ。高性能なハイパーセンサーも高出力ビーム砲も束以外の者が作るうと思えばできるかもしれない。システムクラックにしても、束しか出来る者がいないのか？と問われれば、答えはNOだ。

それに一番重要な事・・・総てのISに使われている共通の物『ISの核となるコア』。

この無人機に登録されているコアが使われていたら、どこの国が作ったか特定できる。もし奪われたりしていたらその奪った者かそれに関わる者が作ったことになる。

そして・・・もし、登録されていないコアが使われていたとしたら。ISのコアは篠ノ之<sup>しののたはね</sup>束しか作れないという前提がある。故に、登録されていないコアを搭載したこの無人機を作れるのは篠ノ之束という事になる。と考えていたのだが、その前提が間違いであったなら無人ISを作ったのは束さんでは無いということになるかもしれない。

「本当に登録されていないコアは束にしか作れないのか？」と問われたら。『登録しなければいけない筈のコアを登録していなかった。』とか、『篠ノ之束以外にコアを作れる者がいた。』とそんな答えもある。限りなく低い確率だが「ある」のだ。

何が言いたいのかというところ。自分の結論は本当にそれしか無いのか？』と言われたら間違いなく答えは『NO、違う結論もある』と言うこと。束さんがさりとて告白する。とか、作っているところを目撃しない限り絶対とは言えない。つまり、今、この時点で結論を出すのは早すぎると思うのだ。

それに束さんとは数えるほどしか話した事が無いので、このような事をするのか判断がつかない。さらに付け加えるなら、先程の無人機との戦闘記録を確認したら戦闘中とは違う答え、疑問点が出てくると思う。

無人機を作ったものが束さんと違う場合も考えた。これを作るのに

相当な資金やら施設が必要になってくる。違う者が作ったとして、もしそれらに所属していると仮定したら機体回収を目的とした部隊が侵入してくる事、そして証拠隠滅の為に自爆させる事もありえる。ちなみに束さんは組織や軍に所属していないと言うより逃走中なのだ。

現在、集中力を切らさずにいる俺とは別に、一夏と鈴は残り僅かなエネルギー残量で無人機が動かなくなったことに少しだけ気を抜いている。緊張を緩めたい気持ちは分からないでもない、だが、何が起こるかわからない戦闘で気を抜くのは命取りになるのだ。思い過ぎならいいが、不意打ちをされてからでは一手、二手、後手に回る。

だから俺は奇襲を防ぐ為にシールドを二人の付近に待機させ、PICで浮遊しハイパーセンサーを使い臨戦態勢の状態で周囲を警戒しているのだ。

『残心』という言葉があるように・・・何事も最後まで気を抜かないと言うことだ。

千『・・・悠。』

悠『・・・何ですか？』



千冬さんがプライベート・チャンネルで話しかけてきたので警戒を怠らず答えた。それに俺にだけに通信をしているのか悠と言っている。

千「いいかげん、周囲にたいして威圧をやめろ。回収部隊が「怖くて入れない」と言っている。」

悠「……警戒はしていますが威圧はしていませんよ。」

どうやら気を張りすぎていたらしく、警戒しているだけなのだが周囲は威圧されていると感じているらしい。

千「はぁ……お前の考えている事はおよそ予想はつく。現在、アリーナ周辺に部隊を配置して警戒をさせてある。それとアリーナ内は悠の右方向にいる『馬鹿』に任せるので、さっさと警戒を解いてこちらに來い。戦闘に参加したお前達三人には事情聴取、念のために身体検査を受けてもらわないといけないのだ。三人の事情聴取が終わったら馬鹿二人にはありがたい説教と反省文を書いてもらう事になっている。」

……千冬さんは俺の考えている事はお見通しらしくすでに手を打

ってあり、兎にも角にもさっさと事情聴取を受けると言ってるのだ。この部分は恐らく三人に言っているのだろう。だが気になった事があった。それは……

悠「（馬鹿って誰の事だ？……あ〜）」

右方向を見て納得した。セシリアがブルーティアーズを装備して待機していたのだ。それに通信で説教を受けたのか、戦ってもいないのにどこかしら疲れた表情をしている。この後でさらに追加の説教と反省文が……自業自得だな。

二人と言っていたから、残る一人は筈になるだろう。山田先生にプライベート・チャンネルを使わせてもらって声をかけたら良かったと思う。危険を顧みず中継室かえりに行つて声をかけなくてもそれで十分と思うのだが、他人の考えている事は分からない。

まあ、ありがたい説教を受けて少しは考える力をつけて貰いたいところだ。

悠「……かなり不安なんですけど、もし侵入してきても無理はさせないで下さいね。」

千「当たり前だ。だが本人が此方の忠告を聞かず勝手に行動をとつたら、また任せることになる。」

悠『まあ、回収部隊もすぐ来るだろうし大丈夫でしょ。』

話をしながらブレードで壁に縫い付けてある無人機に向かって歩く。そして無人機に突き刺さったブレードを引き抜いた。

ドシヤツ！！

壁から落ちた無人機を改めて見た。確かに無人機だったが、少しばかりやり過ぎてしまってる。機体を調べるにもここまで破壊してしまつては極僅かしか分からないだろう。

このISを回収した後は、解析することになり使われていたコアは学園で秘密裏に保管されることになるかもしれない。政府に報告しても余計な争いの種になりかねるのだが、学園が所持しても結局争いの種になる。コアを破壊するという手もあるが、どうするかは教師達が判断するだろう。

そして無人ISに関わつた者達は混乱とかを避けるため口外しないように誓約書みたいなのを書かされる予感がする。それに事情聴取と言うのが軽い報告程度になるだろう・・・そう思いつつ事情聴取を受けるために向かつた。

悠がアリーナから立ち去つて数分後・・・固まっていた鈴が口を開いた。

鈴「……ねえ、一夏、悠って何者？」

—「箒とセシリアにも同じことを聞かれたが、詳しい事は知らないんだよ。それにしても……怖かった。」

鈴「……うん。」

振り向いた二人が感じたのは恐怖だった。

鈴の一夏の部屋乱入事件の時に怒った悠の顔を、鈴は直に見てないので知らないが、一夏は怒った顔を見ている。つまり知っている。知っているのに一夏は怖かったと言ったのだ。……つまり、あの時以上に酷かったということになる。

鈴「……篠ノ之さんだっけ？一夏。」

—「ああ、箒がどうした？」

鈴「少し考えたら自分がどうなるか分かるのに、何も考えてないんじゃないの？（それにあたし達……この場合一夏か、一夏の名前しか言っていないし。何とかできるって信じてないってことよね……言いに来るって事は。）」

「……幼馴染として否定できないのが、恥ずかしいというか何というか。まあ、千冬姉が説教するから少しは考えて行動してくれるようになるぞ。」

鈴「千冬さんの説教ならありえるわね……」

千冬さんのことを知っているのか声からは恐怖がにじみ出ていた。それとは別に、一夏が鈴の言葉に何か思いついたのか思い耽ふけつてた。

「……ありえる……ありえる……ア エール……」

鈴「一夏……ア エールなんて考えてないでしょうね？」

「ま、まさか、考えてないぞ。（何で考えている事がわかる!?）」

否定した一夏を疑いの目で見る鈴。幼馴染だからなのだろうか、一夏の考えている事は何となく分かってしまうのである。

千「お前等、いつまで喋っている。さっさと戻れ。」

『『わ、わかりました!』』

何時まで経っても来ないからだろう、不機嫌な感じで千冬さんから通信が入った。これ以上遅れたら自分達も説教に参加させられると思い、二人は急いで向かうのであった。

### 三十四話〜思考〜（後書き）

今回は言葉が少なくなりました・・・次回作はまだ作成していませんのでどうなるやら。

使用する言葉の意味を調べていたら、自分が理解してもいないのに日常的に使っていた事が分かりました。勉強になりますね・・・

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7350s/>

---

IS～インフィニット・ストラトス～記憶を失いし者

2011年8月11日14時55分発行